「――貴女は未だ私に憎つて居られるのですか。私は什んなに頭を下げて貴女に繰り返へし繰り返へし私の不躾を謝まつたでしやう。私は未だに痛く自らに羞じ入り、後悔し續けてゐるのです。――併しお互にくだらない小さなことに何時迄も氣を惡くしたり、恨みがましくせずに、海のやうに、空のやうに大きく、自由に、胸襟を開き合はうではありませんか。吾々は永遠に太陽と月とのやうに仲よく打ちとけてゐましやう。――私は根深く惡意や怨恨を持たれるにしては餘りに罪のない好人物です。私は元來性急なもんで、什うかすると直ぐ粗暴に走り勝ちですが、その動機はと云ふと、何時も到つて小供らしい、簡單なものに過ぎないのです。ですから私に執拗な惡意を抱かれることは寧ろ馬鹿氣てゐます。什うか呑氣に私を可愛がつてやつて下さい。今度お目にかゝる時は私はもう全で宮廷の小姓のやうに鹿爪らしくちやんとしてゐましやう。――」

かう云ふ比較的暢氣な手紙を出したら、自分は何となく自分の氣分迄がサッパリして來て、Sが此方に對して怒つてゐる抔と云ふぐじ〳〵した疑いはもう霧のやうに晴れて了つ

たやうに感じた。「氣の持ちやうと云ふものはヒドイものだ。いじけた姑息な邪推と云ふ奴は對手よりは却つて自分自身を不快にし、卑小にするものだ。」と自分は思つた。そしてすが〳〵しい快活な心持で「なあにSは決して俺を憎んでゐる譯ぢやないのだ。其中屹度あの人は俺を愛するやうになる。」抔と獨語つたりした。

「自分の彼女に對する盲目な熱愛は、大抵な屈辱や、失望から自分を奮い起たせる。自分は矢張りSが好きで〳〵堪らない。」三十日の朝自分は日記にかう書いた。

十四

電車で一寸買物に出た。すると眼の前に大きな銀杏返しを結つた若い女が立つてゐた。ふつくりとした大きな髷につや〳〵と鬢膏が塗つてあつた。そのこつてりとした鬢膏の香いが、甘つたるい白粉の香りに交つてつんと自分の鼻を刺した。決して美い香ではない。併

し男の最も卑賤な劣情を唆のかす頽廢の肉香である。自分は嘗て此あくどい、、、、肉香の中にひたつて獸のやうに眠つたことを思い起こすと同時に、氣の早い自分の空想は最早サティールのやうに輕浮な獸慾を透して賤しい過去の追憶の中に姦淫を縱まにしてゐた。自分は唸り聲を立てながらステッキで電車の床をコツ〳〵叩いたが、やがて「えゝッ。」と云つて起ち上つた。そして走つて居る電車から飛び降りた。

「こりやあ矢張り戸外はいかぬ。」

かう自分は其處ら中にペッペッと唾を吐き散らかし乍ら、無暗と疳癪を起し、穢はしい自分の頭を何遍となく杖で撲つて云つた。

自分はそれなり踵を後に廻らし、そして「おゝ穢ない！」と度々おめき乍ら何と云ふことなしに二丁餘りも夢中で走つた。自分の一方の下駄は中央から二つに割れた。自分は愈々苛立ち乍ら跛をひき〳〵自家に戻り、そしていきなり書齋に駈け上つた。それから自分は日の暮れ迄薄暗い机に凭つたなりじつと讀書を續けた。

それでも自分は此夜母に伴つて帝國ホテルのヴェルディー・コンサートに行つた。殊によるとSに會へるかと思つてゐたのであつたが、その望みは矢張り無駄となつた。自分は晝間の電車のことを思ひ出しつゝ、此賤しい自分には到底Sに會ふ資格がないのだ抔と思つた。

十月も最終の日となつた。Sは依然として石のやうに默りきつてゐる。自分は又恐ろしく不安になつた。そして彼女の心を解することに苦しむだ。「何故彼女は自分にかくも酷薄なのか。自分には分らぬ。」と齒痒がつた。前田の處へでも行つて仕事の話をし、そして折角元氣な、アクティーヴな氣分で何かしてやらうと意氣組んで歸つて來ても、Sから何等の消息も來て居ないのに接すると、もう俄かにガクンと氣が挫けて、意氣消沈し、何一つする氣が失せて了ふのであつた。

「貴女は何故さう默つてゐるのです。私は貴女が思ふ程短慮ではないが、何分恁んなに曖昧〻にされてゐると不安でなりません。これでは全で嬶り殺しにする樣なものです。何と

か云つて寄來して下さい。」

自分は遂に怵へきれずに又恁んな端書を出した。そうし乍ら自分は彼女に對する愛戀の情が自分の中に彌增しに燃燒して行きつゝあることを苦しく感じた。自分は物狂ほしい氣分で徒らに室の中を一時間以上も歩き廻つたりすることが度々であつた。

十一月朔日の朝Sから恁んな手紙が久し振りに屆いた。

「妾の親しい子供よ。(My dear child)

若し貴方が此處へ來て妾に會い度いなら月曜(三日)の午後五時半にお出でなさい。七時迄妾は貴方に會つてゐられますから。それから又妾は出なければならないのです。

S」

二三遍掌で顏を擦つて夢中で開封した自分も、此手紙を見た時には思はず「畜生!」と口走つた。殊に "dear child" と云ふ言葉には驚いた。併し自分は矢張り擽つた相に笑つ

た。そして此短かい手紙を奴隷のやうに接吻した。他の何人が一言でもこんな言葉を串戲にも自分に云つて寄來したとしたならば什うして自分は怒らずにゐやう。それでも自分は猶ほ此手紙を受けとつて果敢ない嬉しさと安慰とを感じた。自分にとつてSからの沈默程恐ろしいものはなかつた。

夜久し振りに嫂と一緒に松子が來た。自分は彼女が或は此方のSに對する心根を幾分氣取つて居はしないかとも疑はないでもなかつたが、事實松子は只自分が少しばかりSを見知つてゐると云ふ位にしか思つてゐなかつた。そして自分がちよい〳〵と引つかける無頓着氣な質問に對して、心おきなく色々Sに關する話を饒舌つた。自分は松子からかう云ふ風にしてそれとなくSのことをほじくることにある私かな興味を感じてゐた。が、此晩松子からSが例の仲間と一緒に、此前日あたりから富士の裾野の方に又も旅行に出掛けてゐると云ふ噂を聞いた時自分はグイと不快を感じた。そして「馬鹿!」と心の中に云つた。

「あの人はそりやあもう恐ろしい精力家なのよ。何しろ此間なんぞ一日中靑梅の方を遠足

して夜遅く迄遊んで歸つて來てから人と會食をして、それから又池上のお會式にHさんと一緒に見物に出掛て、夜中の二時頃やつと自家に歸つて來たんですつて。そして其翌日は朝早くから習いに來る小供に英語を敎へて、それが濟むともうテニスコートに來て練習をして居るんだつて云ふんでしよ。そんな風なのよ。」

かう云つて松子は「元山さんはテニスがそれは素敵に上手なんですつて。何でもあの倶樂部では女であの人に勝つ人は誰も無いつて云ふ話よ。」と附け足した。

「Hとは大層仲がいゝらしいね。」

自分は松子が覺るならば勝手に覺らしておけと思い乍らかう少し露骨に、併し調子丈けは何處迄も冷靜にして訊ねた。

「えゝ、そりやあ非常に仲がいゝの。どんな細かいこと迄もあの人には打ち開けてゐるやうよ。」

「それでH夫婦はお互に仲がいゝのか。」

「えゝ、よさ相よ。でもHさんは何時も奥さんの機嫌を取つてゐるらしいの。それでもあの奥さんも氣六ヶ敷やな癖に夫にはそれは叮嚀にしてゐてよ。だからつまり仲がいゝんだわね。」

と松子は笑つて云つた。彼女が歸つた後で自分は一人書齋に殘り乍ら不快でならなかつた。自分はSには少し嚴肅過ぎる。Sには到底自分は理解出來ない。自分の戀は成立しないに定まつてゐる抔と思つた。そして自分は苛立ち乍ら情けなくなつた。

自分には什う云ふものかSの戀人が誰かと云ふことが比較的大きな問題として壓して來なかつた。自分は一時それを餘程Bかとも疑つてゐたが、やがて又Hであると鑑定するやうにもなつて來てゐた。此鑑定はSが結婚出來ないと云つた言葉にも、彼女が他の誰よりかも殊の外Hと親密にしてゐることにも、日光から中禪寺の方に二度も——自分の知つてゐる範圍内でも——一緒に旅行したこと抔にも當て嵌まることに思へたのであつた。そして此疑念は此晩松子から先前の話を聞くに及んで愈々明瞭なものになつて來たやうに自分

は感じた。そして此ことは勿論自分を不快がらせた。しかし實際の處S一人が餘りに絶大な對象になりきつてゐる自分には、そして凡ての意志、凡ての感情、凡ての欲望が偏へにSにのみ集中し、如何にそれが絶望に近いものであるにせよ、只無暗に彼女が戀しい、彼女を獲度いと云ふ風にのみ凝り固つて居る自分には不思議な程彼女の戀人が什うのかうのと云ふことは永續きのする力強い問題にはなつて來なかつた。が、只自分は常にSの身邊を取り圍んで、彼女のあらゆる興味と注意とを牽きつけてゐる彼等輕浮な一團を煩はしい邪魔物に思つた。で、自分はSを奪ふには什うしても先づ彼女を此等の輕浮な一群――それを彼女は「友達」と呼んでゐる――から引離すより仕方がないと思つた。併し又Sに愛されて居ない自分が彼女の上に何等の專權を握つてゐないことを思ひ、且つ此等の自分にとつて最も厭はしい一群が、彼女にとつては又何よりかも習慣的に適合した唯一の快樂であることを思ふと、彼女をそれから引き離すことの甚しい困難――と云ふよりも殆んど不可能を考へない譯には行かなかつた。で、自分はじり〳〵苛立ちながらある意味に於ては彼

女に不滿を抱かずには居られなかつた。

「Sはあの下賤で、輕薄な友達の爲めに凡ての大切なもの、高尚なものを犧牲にしやうとしてゐる。而も彼女は無法にも――否、實は無法ではない、それよりもつと惡い只の口實として俺をその――俺にとつて、又S自身にとつて、――何よりの禍である「友」の中に引き入れやう抔とした。馬鹿な奴だ。他のBとかH抔と云ふ凡愚と同じやうに、否、もつと少く俺を彼女の厚意の端くれに浴させて滿足せしめやうなんて、――什うも俺は間違つた。Sが俺に對して飛んだ奴に取つ憑かれたもんだと云ふならば、俺も飛んだ奴を戀するやうになつたと云つてやる。俺は彼女に罪を犯したかも知れぬ。しかしSが俺に犯した罪に比べればそれは比較にならぬ程微々たるものだと俺は思ふのだ。俺は隨分盲目な愛の爲めに自分の尊大な節や、高貴な時間を安賣りしてゐるのだ。だが、それも何時迄保らへ得られるものか。それが問題だ。」

併し恁んな風に考えた後には又乾度賴りない愛着の淋しさが自分の心を葬と捉らへるの

であつた。「だが何よりかもいけないのはSに諦めの心が出來てゐると云ふ點だ。それはSのやうな勝氣な女が、彼女のやうな境遇に育つたとして決して無理もないとだけれど、何しろ人生に多きは望めないものと輕卒に見極めをつけるとは餘りに弱い罪惡だ。彼女は考えない女ではない。否、寧ろ考え過ぎる性質の女だ位に自分を思つてゐるだらう。だが實はもつと深く考えなければいけないのだ。それなのにSは其考えると云ふことにさへ「考えたつて始まらない。」と云ふ樂な歸着を急ぎ過ぎてゐるので更にいけないのだ。兎に角あの人は自己の眞價を知らずにゐる。いや、實は知らないではないが、か弱い娘の一人身として其境遇に打ち勝てなかつた爲めに女らしい輕卒な自暴を起し、そして寶玉である自分を、心から下らないBとかHとか又其他の所謂「友達」である砂利の中に自棄氣味に擲つて、徒らな埃のやうに立ち騷いで自信をまぎらしてゐる。思へば實に悲慘な身の上だ。俺は心から其同情に胸を痛ませる。だが今はそんなことは云つて居られる時ではない。何よりも先づ俺はあの人に自覺を促さなければならぬ。最早下を向いて半分千鳥足になつてゐる彼の

人に生涯の最も危險な瀬戸際に今あの人が立つてゐることを覺らせ、そして確乎りあの人の手を取つてあの人を本道に引き戻してやるべき義務が俺にある。恐らくあの人は最初その本道を面倒臭い、煩はしいものとして可厭がるだらうが、其中屹度又あの人はそれを祝福と感ずるやうにならない程愚かな人ではない。否、あの人は其處にのみ眞の滿足を得られるやうに生れてゐるのだ。そしてあの人が眞に自己を再び其希望ある本道の中に見出し、あの人の「何」なるかを自覺したならば、あの人は必然に自らの使命をも感ずるやうになるに異いない。自分の行くべき道が何處にある。何を先づ自分は爲すべきであるかと云ふことが次第にあの人に分つて來るに相違ない。さうすれば今あの人が抱いてゐるやうな「獨立」や「生活」に對する淺薄な考え抔も自づと又變つて來るだらう。そして今のあの人にある果敢ない自暴から彈ね返へつて出る浮はついた空元氣の代りに、根底のあるしつかりした永久的な活氣と、美はしい底力とが常にあの人の身邊に漂ふだらう。

「妾のことはお前よりもずつと妾自身の方が御承知だ。餘計な心配は御無用だ。どうぞ此

儘に放つておいてお呉れ。」

あの人はかう俺に素氣なく云つて顔を背向けるかも知れぬ。素よりあの人は俺よりもSの「誰」なるかを知つてゐるさ。だが俺は信ずるのだ。恰度七歳の小供も親の知らない秘密を持つてゐることが出來ても、其自分の何者なるかを知つてゐる點に於て到底親に叶はないやうに、此俺の方が却つてあの人よりもSの「何」なるかを知つてゐると。さうだ。俺はSに俺を紹介すると同時に、S自身を紹介してやるべきであつたのだ。すればあの人はあの人自身を知ることによつて、又俺の値打を知るやうにもなるのだ。そして殊によるとあの人はその新らしい眞の自己の世界の中に蘇生つて、その新たらしい肉體と精神とに於て俺を戀するやうにならないとも限らない。もしさうなつて二人が一緒になることが出來たとすれば、それこそ眞に理想的と云ふものだ。勿論恐ろしく蟲のいゝ妄想さ。俺はあの人の最高の使命が俺と運命を結び付ける處にあるのだと考えてゐるのだからな。併し誰が戀して蟲の好い妄想を抱かないものがあらう。戀をして對象の幸福の爲めにあらゆる一切を

犧牲に供しやうと望みながら、而も一方に於ては極端なイゴイストにならないものが何處に居やう。戀は何れ人の心を泥棒猫のやうに臆病に、邪推深く、而も妙に圖々しく、又蟲好くするものではないか。」

十一月二日。日記にかう書いた。

「Sから寫眞を入れた厚意のある手紙を受け取つた夢を見た。何分夢だから仕方がない。しかしかう云ふ夢は夢であつても悪くはない。矢張り快い。Sは今日富士の麓の黄金なす秋の湖畔に例の如く多くの男の「友達」の仲に交つて、一人ちやほやされ乍ら嘸ぞ面白可笑しく遊び暮してゐることだらう。勿論此慘めな俺のことなんぞすつけらかんと忘れ果して。それもよからう。美しからう。だが兎角此我儘な業が煮え返へる。泣き相に腹が立つ。女性的な「憎悪」と「嫉妬」とが胸の中で火焔の舞をする。

元來短刀直入的な俺は長い竿を以て遠くから當てもなく徒らに蜘蛛の巣でも搔き廻はしてゐるやうな齒痒ゆさを感じる。悪いとは知り乍ら何う〳〵なり行くことやら。英譯で

「ウェルテルの悲哀」を讀んでゐる。面白い。少し宛なら讀書も出來る。」

翌三日の夕刻、自分はSに命ぜられた儘にかつきり五時半頃に彼女の家に着くやうに自家を出た。

「あゝ俺は全一週間と云ふものあの人に逢ふことを赦されなかつた。一週間と云ふ間は恁んな場合には恐ろしく永いものだ。だが俺は今あの人に會はうとしてゐるのだ。あの人は未だ俺に不快を感じてゐるだらうか。どうか責めて外見丈けでもいゝから笑つて快く歡迎して欲しいものだ。」

電車の中で自分は恁んなことを思つてゐた。處がSは此晩始めからヒドク不興氣な顏をして、室の中で自分を迎へた。此れ迄彼女は何時も自分で玄關の襖を開けて出迎へた。自分は一目彼女を見た時「これは愈々惡くなる許りだな。」と思つたが、又先夜のとがあるので、Sは最早内心其程自分に對しては反感を續けてゐないに拘はらず、多少それを此方に

表はして見せる態面上の必要があるのだらう抔とも思つた。

自分が何時富士の裾野から彼女が歸つて來たかを尋ねた時、SはHの都合で旅行は見合はせになつたと告げた。「また喰らつたか。」と自分は度々の豫想外れを思ひながら、恰かも彼女が旅行に立つた方が望みであつたかのやうに呆然として口の中に呟いた。併し自分は兎に角「まあよかつた。」と思つた。

始めの中十分間計りと云ふもの、自分は例によつてSのむつつりした不快氣な態度が恐ろしさに何も碌に云へなかつた。併し自分は又餘りに彼女の專横であることにも一方決して不服でないことはなかつた。

「此間はどうも失敬しました。未だ私に對して不快を感じてゐますか？」暫くして自分はかう穏やかに切り出したが、彼女は默つてゐたので、やがて又

「あの後私に對してずゝと可厭に思つてゐましたか？」と重ねて訊ねた。

「いゝえ別に。」とSは何時ものやうに、しかし一層排斥的調子で素つ氣なく云つた。

「そんなとはないでしやう。貴女は確かに私が可厭だつたに違いない。そうなんでしよ？」
自分に更にかう繰り返へされて、彼女は
「實は矢つ張り可厭だつた。しかし貴方の心が分つたから宥せた。」とさも蒼蠅ささうに横を向き乍ら獨り語のやうに云つた。すると自分はグイと腹を立てた。
「此奴は人が下た手に出て居ればいゝ氣になつて何處迄もつけ上つて來る。」自分はかうも思つたのである。
「何。宥す？貴女は僕の何を宥すんだ。」
自分はついもう恁んな矛盾したことを荒々しく口走つて了つた。が、彼女は顏色も變へず俯向いたなり、火箸を玩具にして默つてゐた。
「僕は貴女にある外見上の罪を犯したかも知れないさ。だから其に對しては僕は何處迄も謝まつたし、又謝まる。しかし貴女と僕との間で罪を犯してゐるものがあつたとすれば、それは僕ばかりだと貴女は思ふのか。」

自分は腹をむか〳〵させ乍らかう當つた。Sは止むを得ず首を振つた。
「僕は君達の間に通用してゐる禮儀作法抔と云ふものを全で知らない。だから僕の行爲や態度の外見は時として隨分それと牴觸するやうなこともあつたらう。しかしそれは決して僕の惡いボロではない。何故と云つてボロを持つてゐない僕にはボロは出せないからだ。僕の殊に君に對して爲てゐる、又爲た凡てのことは皆僕の最も眞劍な誠實が迸つたものに過ぎないと云ふことが君には分らないのか。僕は少くも誠實の點では君に不服は云へても、君から愚痴を云はれる覺へはない心算だ。そして誠實でありさへすれば凡てのことは偉くない迄も善なのだ。君になんで僕を罰したり宥したりする資格があるものか。」
自分は調子に乘つて續け樣にかうがみ〳〵饒舌つた。自分の胸の中には此時彼女を征服して了へと云ふ欲望が快げに頭を擡げてゐた。
「しかー此間のことなんぞつまらない極く一寸したことぢやありませんか。」
彼女は稍々脅迫を感じたものか、かうくつろいだやうな調子を見せて自由に云つた。

「さうだ。つまらないごく一寸したことだ。しかし僕にはその一寸したことも大きな心配に感じられたのだ。」

「妾は一寸したことは氣にかけない。」Sはかう冷やかに自信を持つて云つた。

「それは君が戀を知らないからだ。少くもしてゐないからだ。戀をしてゐる人間には一寸したことも大變なことになつて來るものなんだ。」

「そんなことは妾だつて知つてゐる。」とSは又獨り語のやうに云ひ反へした。

「ふむ。一體君は僕を輕蔑してゐるのか。」自分は又も此問を發した。

「別に輕蔑はしてゐない。」と彼女は何處迄も反撥的な調子で餘所々々しく云つた。

「さうだ。輕蔑は出來る筈がない。――イヤ、出來るだらう。君は僕を強いて輕蔑しやうと思へばすることも出來る。弄んで玩具にすることも出來る。只僕に克つことが絶對的に出來ないんだ。」

自分はワナ〳〵顫へながら激昂しきつてかう云つた。

「それは又何うして？」とSは面白さうに微笑んで訊ねた。

「何うしてと云ふ奴があるもんか。邪が什うして正に克てる。」

自分はかう我鳴りつけるやうに苛立しく云つた。Sはニッと反抗的な苦笑を口許に見せて俯向いた。

「僕は弱いやうでも人からの侮辱や、不正な迫害に對しては恐ろしく強いぜ。」と自分は云つたが、又「一體貴女は什うも不眞面目だよ。それが何よりいけないのだ。」かう稍々低い調子で付け足した。

「什うして妾が不眞面目なの？」と案の定Sは餘裕を以て反問するより仕方がなかつた。

「什うしてと云つたつて、眞面目なものに冷淡だと云ふとは自分の不眞面目を表はしてゐるとにはならないだらうか。戀は對手が偉い人間だから起ると云ふ譯のもんぢやない。それは其自身獨立した自由なものに相違ない。だから貴女が私よりも價値の少ない人間を戀人に持つてゐたからと云つて、僕はそれを些しも責めるとは出來ない。必然に迫られた場

合には僕婢に對してさへも戀が起ることは避けられまいからな。併しそれが爲めに一方自分に捧げられた眞摯な深い戀を冷やかに輕んずる必要はあるまい。そんなことは眞に誠實な善い人間には出來ない筈のことなんだ。處で少し露骨に云ふと、此場合で貴女が僕に冷淡だと云ふことは、貴女が餘り「向上」に忠實でないことを意味するやうに僕には思へるのだ。」

Sは「へ。さうでしやうか。」と云ふやうに鼻の先で冷笑して默つてゐた。

「僕は何も貴女と勝負する氣はないが、一體貴女は何で來たつて僕に敵いつこはないのだ。いくら僕が幼稚でも貴女位ゐに克てなくては仕樣がない。僕は貴女よりはずつと意志も強い。感情も強い。知慧も勝れてゐる。勇氣もある。タレントも持つてゐる。だが貴女は自分で自分を餘ほど利口だと思つてゐるんでしやう。」

「いゝえ、ちつとも。」とSは笑つた。

「利口だと思ふのもいゝさ。實力に相當した自信は誰でも持つてゐるがいゝ。しかし僕が貴女の利口に征服されるものと思つちや間違いだぜ。間抜けに見へてもこれで僕はBなん

とはちつと人間の出來が違ふんだからね。」

と自分は苦笑し乍ら云つてチラリと彼女の方を見遣つたが、Sは何とも云はず俯向いてゐた。

が、一見不思議なことに彼女は自分の恁んな不躾な腹癒せと云つたやうな粗暴な言い草(自分のものを云ふ調子は、事實言葉の內容程粗暴ではなかつたが)、に對して、却つて氣を惡くしなかつたのみか、前よりは氣嫌よく打ち解けて見えて來た。彼女の緊く硬はゞつて居た顏には何處ともなく擲り出したやうな自由さがたるんで來た。で、自分は漸く冷靜な意識に戻りかゝると共に、彼女に同情し、そして自らの厚かましい橫暴に悔いて來た。

「だが僕は勿論今夜貴女を譏りに來たのぢやない。又責めに來たのでもない。そんなことは恐ろし過ぎることだ。僕が貴女を未だに愛しきつてゐることは云ふ迄もないことだし、のみならずそれはどんゞ強くなつて來てゐるんだ。併し貴女とても一週に一時間位は恁

んな少しは實のある話をして見る位のことは惡くもないでしやう。」
自分がかう云つた時、彼女は伸びをした。
「何しろ貴女は僕と恁んなつまらない話をするのが不愉快だから、早く面白い仲間の處へ行つて騷ぎ度いでしやう。」
「そうでもない。」とSは笑つた。
「一體今夜何處へ行くんです。」
「食事。」
「へッ。又食事か。そんなに會食が面白いか。」
と自分の眼は彼女を睨んだ。
「別に面白いから行くと云ふ譯ぢやないわ。」
かう彼女の眼はそれに答へてゐた。
「それにしても未だ少しは時間があるだらう。」と自分は懐中から時計を取り出して見た。

「えゝ、未だよござんす。」と彼女は機嫌よく云つた。
「ぢやあもう少し談し度いことがある。」
かう云つて自分は、Sが自身の素質や、天職を卑下してゐること、彼女が危險な地位に立つてゐること、併し其危險な位地を脱して安全な本道に立ち返へるのは今より外にはない。今を外して惜しい彼女は永久に救はれないこと、そして救はれるには希望を盛り返へさなければならぬ。輕々しく自己の運命を諦めて、自暴自棄に走つてはならないこと抔を語つた。すると話は自分が彼女の獨立に就いての意見に對して辯駁したことから生活問題の上に及んで行つた。
「貴女は人から飯を食はして貰ふことを此上ない恥だと考えてゐるんですか。」自分はかう訊ねた。
「いゝえ、自分で何か仕事をしてゐさへすれば妾はそれを別に恥とは思いません。しかし兎に角パンは最も大切なものですわ。」

「勿論さ。だがそれは生活の目的ではない。」
「併し何と云つても吾々はパンなしに生きてはゐられないでしよ。貴方なんぞはもつとパンの値打を知らなくつちやいけない。」
「君は、「人はパンのみにて生くるものに非ず。」と云ふ言葉を知らないか。」
「無論知つてゐますさ。しかし人が餓死をしかゝつてゐる時にどうして他の問題なんぞを考えてゐられるでしやう。」
「ふむ。貴女には此基督の言葉がそんな貴女の云ふやうな考えを百も通り超した上で云はれてゐると云ふことが分らないと見えるな。」
Sは暫く口を噤んだ。
「僕だつて貴女が思つてゐるやうに決してパンの問題に冷淡ではない心算だ。僕は日夜パンの問題に追はれずに濟んでゐる自分の現在の境遇に感謝してゐる。だがもし僕だつたら餓死をしかゝつてゐても、矢張りパンの問題を通してパン以上の問題にふれてゐるに違い

いと思ふがな。しかしそんなことは其時になつて見なくては分らない。今考える必要のないことだ。吾々は萬一の場合よりも先づ現在に於て一番緊急な問題に眞面目に喰い込んでゐればいゝのだ。」
自分は暫くしてから云つた。
「その現在の一番緊急な問題と云ふのはパンでなくて何でしやう。」Sは又かう反復した。
「ふん。貴女のやうな人にはさう思へるかも知れぬ。だが僕は貴女に訊くが、貴女は毎日明日什うしてパンにありつくかと云ふことを一番多く念頭に浮べますか。よもやそんなことはあるまい。恐らくもう少し必然的な他の生活上の出來事や、意義をそれとなく考えてゐるだらう。僕のだつて只それがもう少し深い、根本的なものであるに過ぎないのだ。」
「そんなら貴方の生活上の意義とは何です。」
彼女は自信を以て又もかう突きつめて來た。自分は思はず侮蔑的な冷笑を鼻の先に浮べたが、それは餘りに分りきつたことのやうであり乍ら、一寸説明に窮した底の冷笑であつ

た。

「何ですと云つたつて、それはつまり絶えず偉くならうと藻掻いてゐることに外ならないさ。」

すると彼女は案の定侮辱的な冷笑を自分に返へした。自分にはそれは分つてゐた。

「と云ふと君はそれを幼稚な妄想だと云つて輕蔑するだらうが、竟る處それより外なくていゝ筈ぢやないか。だがもう少し具體的に云ふとだ。――」自分はこゝで一寸休んで、「毎日の生活をしてゐる間に絶えず自分の中に擡がつて來る凡ゆる問題を片端から本能的に底の底迄突つ込んで行くのだ。それでも自分の生活の中心が常に一つの方向に向つてゐるから、そう云ふあらゆる突きつめた感想が結果の上では皆必然に統一されて來るのだ。そして一人手に自分に運命づけられた道を歩いて行くことになるのだ。それを又生長と呼ぶとも出來るんだが、つまり何のことはない、何事によらず人一倍深く行く處に此方の人生はあるんだ。僕の偉くなると云ふ意味はつまる處それだ。だからそれは決してパンから全然離れ

た一種特別な高遠な問題ではない。何故と云つてパンの問題が實際に迫つて來れば矢張り凡人が考えられない處迄それの根底に觸れて行くのだから。例へば今貴女と恁んな話をしてゐるのも僕にとつては一つの大いな生活上の意義だ。そして僕は今貴女の戀に喰い込んでゐる。此れからも永遠に喰い込んで行かねばなるまい。」

かう云つて自分は内心少し得意を感じた。が、彼女がその得意に對へたものは欠伸であつた。

「ふむ。そんなに退屈ですか。」

「什うも失禮。」と彼女は眼を赭くして微笑むだ。

「欠伸もし度くなるでしやう。兎に角恁んな話は何方かと云ふと君達には餘り平凡過ぎて却つて專門的に聞こえ相な話だからな。だが僕は何も貴女に今云つた話が分る必要もないと思つてゐるんだ。分らなかつた處で貴女の價値が些しも下る譯ではないんだから。だけども貴女だつて不眞面目な、無意義なライフを送つちやいけない。」自分はかう云つた。

「どうせ人生は無意義だわ。」と彼女は笑談らしく云つた。
「馬鹿。」と自分は思はず口走つて赭くなつた。
「そんな淺薄な生意氣を云ふからいけないんだ。君の言葉には何等の内容もありはしない。爪の垢程も人生を知りもせずに假令カリソメにもそんなことを口外するのは宥し難い大罪だ。串戯であれば猶更惡い。一體心から人生をノンセンスだと云へる人間ならば、氣違いになつてゐるか、又は自殺してゐなければならない筈だ。誰しも少くも生きて居る間そんな僭越を云へた義理ぢやない。へ。馬鹿な。」
自分はつい怒つてかう云つた。併し又一方Sを怒らすことを恐れもした。
「妾だつて實はさう思つてゐる譯ぢやないんですよ。でも貴方が餘んまりムキだから、ついぢ一寸冗談を云つて見度くなつたの。」
彼女はかう云つてせゝら笑つた。自分は怒る譯にも行かなかつたので、止むを得ず皮肉な苦笑を漏らした。

「君は人生を茶化して滑稽なものに見て行かう。善い生活が人生の一方にあるとは分つてゐるが、それは面倒だから低級でも樂な方面に遁れて、傍らそれを嘲笑つて行かうとでも思つてゐるらしいが、そんなら僕は君に忠告する。失禮乍らそれにしては君はちつと知慧が足りな過ぎはしないかと。メフィストフェレスかなんかなら知らぬと、君の小才位ではそれは未だ少し無理ではないかと云ふことを。これで世の中には君の仲間のやうな馬鹿ばかりはゐないからね。一體人間と云ふものは根本的にならずに決して利口になれるもんぢやないんだ。根本的な眞面目な問題丈けが眞に人の理性を練り鍛へて、磨いて行くことが出來るのだ。僕が聊たりとも君より賢いのは僕が常に根本的なものにばかり眞劍に浸つてゐるからだよ。尤もそれは誰れにでも出來ることぢやないんだが。」
自分は一句々々に手間取り乍らかう云つた。
「貴方の云ふことは一般的の理屈としちやあ多分間違つてゐないでしやう。しかし貴方は妾に就いては全で一つ大間違いをしてゐる。それが滑稽なんだわ。」暫くして彼女はかう云

ひ出した。
「何がです。」
「貴方には妾の外見と、内面との區別がてんで分つてゐないんですもの。實に恐ろしく分つてゐない。」
自分は暫く俯向いて考えた。そして云つた。
「そりや少しはさう云ふ處もあるかも知れない。だが私は思ふのだ。内面と云ふ奴は善かれ惡かれ、自づから外見にも表はれて來ずには濟まないものだと。内丈けが善くて、外が惡いと云ふことは本當の意味では有り得ないことなのだからな。」
「併し少くとも貴方は妾の現在の地位を見てゐない。」とSは現在と云ふ辭に力を罩めて
「現在だから妾が貴方に斯う振舞つてゐると云ふとに貴方は全で氣が付かないんですよ。それが何より貴方の笑ふべき間違ひなんだわ。」
彼女はとう〳〵此方をやり込めたと云はむばかりの誇らし氣な表情を以てかう手強く自

分にむかつた。自分は一寸「參つた」と云ふやうにつまつた。併し何とか口對へをしずには餘りに强腹であつた。
「だつて君は殆んど毎も僕丈けに饒舌らしておいて、自分は狡るく默つてゐた。それで僕は君の僕に對する冷淡な態度や、毎も日常生活から君を判斷する時、僕があゝ云ふ見方を君にするやうになつたのも亦止むを得ないとぢやありませんか。それに戀と云ふものは元來隨分自分勝手なものだからな。殊に君が先刻のやうに此方を茶化すやうな巫山戲方をする時、そして僕が愈々ムキになればなる程此方の不利を覺つた時、君の方の誠實を疑い度くなつた譯さ。併し間違つてゐた點があれば僕はちやんと謝まるよ。」
かう云つた時、自分は「君のやうに只無暗に負け惜しみは云はない。」と云ふ辭を咽喉元迄來させて居たが、それを口先に出さうとはしなかつた。暫く沈默が續いた後で、自分は此木曜の散歩に就いて彼女に尋ねた。二人は大分以前から何時か一緒に歩かうと云つてゐたのである。それは何時も〳〵彼女の方の差支へで見合はせになつてゐたが、此前週に自分

は愈々今度の木曜にはその約束を果すやうに相談しておいたのである。
「オヽ・アイ・アム・ソリー。」と彼女は空々しく云つて
「此木曜には何うしても外されないテニスの試合があるの。妾はそれに出なければならない。」かう云つた。自分は落膽すると同時に、グッと又腹を立てた。
「へ。大方又そんなことになるだらうと思つてゐたんだ。テニスの試合か。ふむ。馬鹿な。」
「だつて約束だから仕方がないぢやありませんか。」
「テニスの試合の約束は人生的な戀よりも大事件か。」かう云つて自分は彼女を睨みつけ乍ら
「それにその約束は一體何時したんです。僕との約束の方がずつと先きだつたぢやありませんか。」と附け足した。
「ですけれど貴方は一體自分が妾のことを考えると同じやうに妾が貴方のことばかり考えてゐる筈のものと思つちや大間違いですよ。何しろ全で立ち場が異ふんですからね。」

暫くしてSはかう「お前になんで妾の意志を束縛する權利があるものか。」と云はぬばかりに傲然と云つた。
「無論立ち場は違ふさ。だが君にとつては僕よりもテニスの方がずつと大切なんだね。」
自分はかう云つた。
「さう云ふ譯でもないんですけど、何しろ今度丈けは仕方がないのよ。」
とSは俯向き加減になつて呟くやうに云つた。自分は堪らなく苛立つた。そしてもう少しの處で激憤を爆發させ相になつた。が、此時自分は幸か不幸か不圖自分の立場に考え及んだ。今此處で俺がこんな一時の安値な怒りに負けたならば、もうそれで此事件は永久にお仕舞だ。萬事休すだ。俺はいよ〳〵Sを失はなければならぬ。」かう自分はあるものに私語かれた。で、自分は冷やりとして力を失つたものゝやうに煩悶し乍ら彼女の粉碎に從ふより外なかつた。
「あゝよくも俺は怒らなかつた。」と自分は深く椅子の背に靠れ込み乍ら腹の中で云つた。

「さあもうそろ〳〵時間ですよ。」Sは機嫌よくかう自分を促した。が、此時時間は既に七時を廻つてゐた。

「うん。今夜は素直に歸りますよ。しかし貴女はこれからほんとに側へ出るんですか。」自分はかう尋ねた。

「え丶七時半に向ふに着くやうになつてゐるの。」自分は其「向ふ」を追究する氣がなかつた。

「兎に角今週の木曜は駄目。」

「では晩は？」

「いけません。貴方は此處少くも一週間許りは妾から遠退いていらつしやい。其方がよをござんす。お互の爲めにね。」

「私の貴女に對する感情が冷める爲めにね。」

Sは二三遍軽く合點いた。

「僕は寧ろ感情の冷めることを欲してゐるさ。だが――什うもいけないんだ。」自分は冠りを振り乍らかう暴く云つた。

「アレ。もう七時を恁んなに過ぎてるわ。」とSは時計を見て又も急き立てた。

「其處迄私と一緒に出掛ける譯には行きませんか。」

「いや。」

「ふん。什うも仕様のない女だな。」

かう云つて自分は起ち上り乍らSの頸背のあたりを軟く抓つた。そして

「實に色んな氣持で僕は此玄關を出たり入つたりするぜ。」と云つて外套を被た。

「知つて丶よ。」Sは捷利者の微笑を浮べ乍らかう機嫌よく云つた。

自分は表へ出た。

「何たる侮辱だ。テニスの遊戯よりも見縊られて俺は何とも怒ることが出來ない。一體俺は案外我慢強いのか。それとも只の腰抜けなのか。戀の奴隷なのか。それとも只の奴隷なのか。併し〳〵俺は未だSが心から好きでならない。俺はSに嫌はれゝば嫌はれる程、虐待されゝばされる程、そしてそれに對して俺が反感や恨みを抱けば抱く程、俺は段々Sから離れられなくなるのだ。恰度悔氣する女房がそれによつて一層亭主を可愛いゝものにするやうに、反撥は所詮彌が上の愛着を增さしめるに過ぎない。Sは俺を愛しないと云ふ權利を應用して勝手なことをしてゐる。いや、之れからは猶ほするだらう。堪らなく業が煮へ返へる。なんぼ何でも餘りの侮辱だからな。しかしさうかと云つて「えゝ、もう勝手にしろ。」と突き放す勇氣は到底俺にない。否、勇氣處ではない。其能力が全然俺には與へられてゐないのだ。噫、彼女は可愛いゝ惡魔だ。俺は彼女の殘忍なクロロフォルムにかけられて、失戀に定まりきつてゐ乍ら、小供扱いにされ、顏に唾され乍ら、猶ほ彼女に甘へて、縋り付いて

ゐる彼女の馬鹿な幫間だ。靴だ。あゝ馬鹿だ。馬鹿だ。しかし何のこつたか全で分らない。俺は何も云へない。俺は今更此俺の見すぼらしい赤裸の形骸の前におのゝきたじろぐにしては餘りに全身が麻痺してゐる。什うにでもなるがいゝ。只俺はしやうことなしに何處迄もSに縋りつくのだ。」

四日の朝下の如き手紙をSに書いた。

「――

貴女は何たる私にとつて不思議な人だ。恰度私が貴女に妙な奴に見えるでしやうやうに、貴女は實に私には奇しい人だ。恁んなにも貴女の冷たい侮蔑にたゝきみじかれてゐ乍ら、猶ほも章魚のやうに貴女の足にからみ付いてやう離れない私は、嘸ぞうるさくも滑稽なものに見えるでしやう。御尤もです。當の私にさへ其理由は分らないのですから。それは私のやうな傲慢な男にとつては殆んど自欺のやうに見へることであり乍ら、よし自己侮蔑で

あつたにせよ、決して自欺ではない。實は私の驕慢な理性は時として私の貴女に對する戀を擲つやうに私に勸告しました。併し私の中の「最も眞なる何者か」は什うして貴女との永遠の離苦を私に許しましやう。吾々二人の間には何か什うしても私の力、否、如何なる人力によつても斷ち切ることの出來ない鎖が堅く繫がれて了つてゐることを私は感じます。併し貴女はそれを格別迷惑に思はれなくともよいのです。何故ならばその鎖の重力を感じねばならぬものは唯私一個なのですから。(貴女は蝶の目方程の重力をも身に感ずることなく平氣で後ろを向いてゐることが出來る。)私は戀――少くも私が貴女にしてゐるやうな性質の戀――が運命の人間に對する最も酷ごたらしい惡戯のやうに感ぜられて來ました。其中に於ては最も名譽を重んじる嚴肅な義人も道化のやうに他愛なく恥を忘れ、醉漢のやうに馬鹿な囈語を喋舌くり、人形のやうに無頓着な偶像の前を熊の如くに匍い廻る。全く其處では眞摯な强者の尊嚴も何もあつたものではない。――私は一人でゐる時、貴女の側にゐる時程お芽出度くはない心算です。――貴女は否應なしに私を催眠術にかけた。そしてお互にそ

れを不快がつてゐる。貴女は何も醉興に私なんぞを催眠にかけ度がりはしなかつたし、私も亦別に好き好んでそれにかけられ度がつた譯でもない。併しお互に止むを得ないのです。萬事が徹頭徹尾「止むを得ない。」ばかりです。其處に戀の不思議がある。貴女に嫌はれ、輕蔑されることを十々承知の上で、テニスの試合よりも輕んぜられてゐることを承知の上で、又私にとつて此上なく不利な貴女の現在の境遇に苦しい同情を寄せ乍ら、私は猶ほも貴女を戀ひ慕はずにはゐられない。吾々は共に不幸な立ち場にゐる。苦しい破目にゐる。そしてお互に同情し合ふことが出來る。貴女は實は私に冷淡ではない。併し恰度私が何處迄も貴女に熱くあらずには居られないやうに、貴女は私に對して冷たくあらずにはゐられないのだ。併し何處迄もでしやうか？それは餘りに酷い。餘りに辛過ぎる。――何にしても貴女は實にいゝ。只限りなくいゝ。私は彌が上に貴女を尊敬し、只一途に貴女を戀する。貴女から離れやうとする徒らな努力は、譬へば水に溺れかゝつたものがその藻掻くにつれて水面に浮び上らずに、却つて一層水底深く沈み行くのと同じだ。――私は要するに無邪

氣な小供です。什うか私を憐れむで下さい。愛して下さい。善良な阿母さんよ。私は所詮貴女の小さな靴以上のものではありません。――」

五日になつた。

自分は又Sに會い度がつた。そして何時迄たつてもSとは話し足りない。未だ自分は何一つSに語つてはゐない。と云ふやうな氣がした。

「Sとても矢張り人間だ。從つて缺點は持つてゐやう。いや、あの人は惡くなれば隨分惡くもなれる素質を一方持つてはゐる。しかしそれ丈けあの人は一旦善い傾向に就いたならば、女としては又並外れて善くなれる有望な素質をも持つてゐることを俺は固く信じてゐる。又妻として實に氣丈夫な、頼りになる女であることも確かだ。そして今あの人は危險な地位に立つてゐる。あの人の前には永劫な絶望と云ふ暗黑な深淵が口を開いてゐる。救ふのは今だ。そしてそれを救ふ使命を荷つてゐるものは返へすがへすも俺を措いて他には一人もない。實に俺は地團太を踏んで焦慮してゐる。だが一體什うしたらそれが出來ると云ふ

のだ。」

自分は日記にかう書いた。

「人生其物は深刻な悲愴なものかどうか俺は知らない。併し少くも然う云ふ人生に俺は愛と信仰とを持つ。高い人生は寒い。深い人生は暗い。俺はさう云ふ氣がする。」其先きには又かう書いた。

六日になつたがSは例によつて默つてゐる。

「昨日で自分のあらゆる精神、生活、又人間に新たらしい改革を齎らした事件――卽ちSとの戀――に遭遇してから丁度一ヶ月經つた。此一ヶ月の間、自分は畢に何一つ創作と云い得るものをしなかつた。一と月と云つたつて、何しろそれは三十日間だ。其間に創作家と云はるゝものが何一つ書き度いと云ふ欲望の起らない筈はない。」かう云つて仕事をしない者を頭から嘲笑つてゐた自分が、碌に原稿紙に手も觸れずに一と月を送つたと云ふとは近頃珍らしいことであつた。併し自分は此三十一日間を又今迄にない張りつめた氣分です

つと押し通して來た。自分の全力は殆んど常に弛むことなく、Sと云ふ一つの對象に集中してゐた。故に自分は此間創作を怠つたことを悔まない。自分は創作を現實の上に行つて來たのだ。けれども自分は全然S以外のことには無關心でゐたか。創作と云ふ自分の使命にかけて迄も。そうではなかつた。自分は矢張りSから遠けられてゐる暇には時として隨分仕事のこと——未來——を思ひ煩つた。「ぐずぐずしてはゐられないぞ。」と云ふ氣は絶えず自分を鞭打つてゐた。——だがそれは又自分として止むを得ない當然の運命だ。俺は其爲めに自分をSに不忠實だとは思はない。——併しSからは見離され、同時に仕事も出來なくなることを思ふと、俺は餘りの不安に堪え兼ねる。」

日記にはかう書いたが、午後又長い手紙を自分は彼女に書き送つた。生活——卽ちパンと、人間の義務とに就いての感想風な手紙である。その最後を自分は恁んな風に結んだ。

「——貴女自身を更に愛し、尊敬し、且つ重くお見なさい。吾が戀する人よ。而して貴重なる貴女の運命をそれの到り得る最高頂の光りに迄持ち來たしなさい。賢明な貴女にも一

度忠告することを宥して貰はふ。返へすがへすも貴女が自分の尊い生涯をつまらない夢の中に過すことのないやうにと。義務と云ふものは、撰ばれた人間にとつては、決して苦痛ある束縛ではない。却つて意義のある自由であります。使命に煩はしい重荷ではなくして、却つて堅實な希望であります。貴女は眞鍮の中に交つて朽ち果てるにしては餘りに黄金だ。永へに砂の中に葬られるにしては餘りにダイヤモンドだ。——賢い勇氣をお出しなさい。蟬さへも廣い自由な世界に出る爲めには舊い脱け殼を捨てるではありませんか。——私は絶えず耀く希望の力を以て不屈不撓に攀じ登つて行きます。わが戀人よ。私と手を携へませんか？貴女は自然の意志に反して迄も自分を土砂の中に葬つて了はう。脱すべき殼を被たなりに朽ち果てて了はうと望まれるのですか？——」

此手紙を懷にして自分は散歩に出た。此日は木曜でSと一緒に歩かうと約束した日であつた。いゝ天氣で小春日和のやうにぽかぽかとしてゐた。兎もすると肉慾の烈しい衝動を感じ易かつた自分は、市街の中をぶらつくことは好んで誘惑を漁りに歩くに等しく思はれた

ので、散歩と云ふと足は自づと郊外に向つて、殊に競馬場抔の廣々と明け開たげ原のあたりに曳かれるのであつた。そしてかう云ふ闊濶な原野の健やかな空氣を自由に呼吸することは殊の外くさ〳〵した重苦しい自分の頭にとつて何より快い蔚晴らしであつた。此日も自分は存分氣持のいゝ散策に肉體を疲らし拔いて暮方に歸宅した。

七日の朝Sから恁んな手紙を受け取つた。

「Nさん

妾は何ですか貴方が妾から切りに何か書いて寄來すものと待ち設けておゐでのやうな氣がします。ですが妾にとつて何を云ふことがありましやう。何んにもないぢやありませんか。貴方だつて何一つ書くことのない時には書く譯には行かないでせう。でも貴方が妾に書く分にはいくらなりともも差支はありません。

S、」

之れに對して自分は早速丁寧な返事を書き送つた。手紙の内容よりも、此れ丈けでも自分に書いてやらうと欲した彼女の篤志に對して厚く感謝したのである。そして終りに「明

晩は愈々音樂會です。私は彼方で貴女にお目にかゝれることを今から樂にしてゐます。ですが御心配には及びません。私はあゝ云ふ人込みの中で無暗に貴女に話をしかけて、貴女に御迷惑をかけるやうな不作法な眞似はしませんから。――!」と書いた。(Sは當然音樂會には來ることになつてゐた。と云ふ理由は此演奏會で彼女の最も親しい友?である日――の細君がピアノを彈奏する豫定になつてゐたからである。)

午後林が來た。話は例によつてSの上に及んだ。

「戀は受身の地位に立てば什うしても少し餘裕が欲しくなるものだらう。」恁んなことを林は自分に云つた。

「さうかも知れない。併し僕の場合ではどうももう此以上の餘裕を先方に與へる譯には行かないな。」自分はかう答へた。

自分には「一週間と云ふ時間は少し考える性質の人間には隨分短くない餘裕だ。それがもう何週間にもなつてゐる。のみならず戀は思考ではない。直感だ。自分の性質としては

此れ以上の餘裕を彼女に與へることは不可能であるに止まらず、それを與へることは單にSが自分に對する忘却の念を強めるより外役に立たない。そんなことは對手によることだ。」と云ふ風に考えられたのであつた。併し自分はそれなり林の厚意を受けて默つてゐた。

翌朝自分は滿洲にゐる兄にSのことを長く手紙で書いて出した。恁んなことは無く無要なことであつたが、自分は何と云ふことなしに味方に餓えてゐたのであつた。そして味方から慰められることに猶更飢へてゐた。(此兄は嘗て若い自分に彼の戀を眞面目に打ち開け、そして結婚のことに關して賴りにもならなかつた其頃の自分を家族中で唯一人の味方として、何くれとなく自分に相談しかけた。で、自分も一生懸命になつて心から此兄の肩を持つたものであつた。)手紙には恐ろしくSのことを褒めちぎつて書いた。

演奏會は午後八時に開かれることになつてゐたが、自分は雜誌の方の關係上餘り無頓着にしてゐる譯にも行かないので、七時半頃にはもうホテルに行つてゐた。

東京にゐる自分の極く近い身内の者は母を始めとしてかれこれ十人近くも、半ばは自分

に對するお努めとして、やつて來た。別にこれと云つて働くこともなかつた自分は此等の兄姉、嫂又は姪抔をそれ〴〵席に案内抔をしたが、Sが來る——そしてSは當然彼女を善くは思はない自分の親兄姉や、又二三の友達にも氣付かれずには濟まないと云ふ不安はヒドク自分を落付かせなかつた。

既う定刻を過ぎて最初の演奏に間もない頃、自分は廊下に彼女を認めた。彼女は晴やかな桃色の衣裳を着て、豐かな胸を廣く露はし、そして淡い化粧を施してゐた。Hと夫婦のやうに近接して立ち並んで彼女は何かしら林と小聲に談してゐた。自分は何となく彼女に近付く氣にはなれなかつたが、此時ふと林は後ろを振り返へつて自分の名を呼んだ。で、自分は胸を慟悸に轟かせ乍ら彼等の處へ行つた。そして殆んど頭を下げるか下げない位にして、只眼丈けの強い表情を以て彼女に挨拶した。が、彼女は恰かもHを楯にするやうに恐ろしく傲然とかまへたなり、氷のやうな緊張さを以て自分を睨み返へした。自分は彼女を恐れると共に、皮肉な冷笑を以て蔑むやうにじつと自分を見据へてゐるHの表情によつ

て、此男が既う何もかも此方の内情を覺つてゐるとを感じた。で、自分も自づと負けず劣らずの蔑むやうな敵對的表情を以て露骨に此男の臘細工のやうな萎びた顏を睨めつけるやうになつた。「何で來たつて恁んな奴に負けるものか。」ヒドク興奮したゐた自分は彼と勝負するとを考え乍らふと恁んなとも思つた。

彼等の間に擡がつてゐた相談と云ふのは、演奏者への贈物の花束をSが持つて出る役をするやうに林が彼女に頼んでゐるのを、Sは自分は厭だが松子に頼んだらよからうと云ふのであつた。自分は此氣の利かない割りに、目に立つ役目を此等の二人の中何れにもさせ度くなかつた。が、あはよくも恰度他に適當な娘が見當つたので、此相談は難なく片付いた。そしてSは自分の母達の注目を惹くとなしにHや、其他二三の男の連れと一緒に會場の中の席に就いた。

演奏は始まつた。聽衆は存外多く集まつて、廣い會場の中には空いた椅子も容易に見當らなくなつた。プログラムはどん〴〵と順に追つて進んだ。それは餘りに飽氣なく進

捗して行くやうに自分等には感ぜられた。自分は場の一番背後に前田等と並んで腰を掛けてゐたが、氣が氣でなかつた。什の演奏も什の唄も此晩に限つて殊の外不出來と云ふやうにも、他愛なくも感ぜられた。自分は何遍となく起ち上つた。そして一齊に音樂に耳を澄ましてゐるひつそりとした聽衆を見渡した。Sの黑い頭がHと、遲れ走せに來たBとの間にチョコリンと低く見へた。Sは頭をHの肩に半分靠れかけてゐるやうにも見へた。「畜生！」と自分はむか〳〵した胸の中に呟いた。

此晩は林の許嫁であるKと云ふ令孃も謠つた。自分は林の位置においた自分を考えた。そしてもし自分だつたならばプラットフォームの上に躍り上がつて一々聽衆を毆鳴りつけずにはゐられまい抔と考え乍ら、林の心持に同情してゐた。

間の休憩時間をも入れて會は一時間と二十分程で畢りを告げた。散會の後吾々は演奏家一同をホテルの一室に招いて、其處で茶菓の饗應をした。が、其處にはH夫人の伴れ合いとして夫H、S、それからB、畫家のL夫婦、其他Mと云ふ男も這入つて來て一緒の卓子

に就いた。

「所謂叔父さん。」かう云つてSは「ゼ」に抑揚をつけて（松子の話に屢々出ると云ふ意味で）人を馬鹿にしたやうに自分をMと云ふ仲間の男に紹介した。自分は恐ろしく迷惑を感じ乍ら止むなく此如何にもSにへい〳〵してゐるやうな人の良さ相な凡人と握手をした。Hは勿論自分とは口を利かなかつたが、彼の自分に對する態度は愈々露骨に惡意を表白してゐた。其處でSは特に自分の眼の前だからと云ふ意志でか、殊の外快活にHやL抔と噪いでゐた。

「踊りましやう。さ。踊りましやう。」

恁んなことを彼女がLの耳に囁いてゐると、「音樂がないから駄目だよ。」と側からHがそれを打ち消したりしてゐた。（これは後に林から自分は聞いたのである。）

「此處にかなり大勢の人間がゐる。そして其人達は皆Sをそれとなく見てゐる。だが其中で彼女が自分の戀人だと云ふことを知つてゐるものは自分と彼女自身との外に何人ゐやう。

前田はもう覺つてゐる。――彼は此派手な女を見て、それを戀してゐる自分を何と思つてゐるだらう。――それから林がゐる。Hがゐる。Bがゐる――ふむ。割りに多勢ゐるな。だが其他の友達は誰も知らない。――あゝ併しSは矢張りいゝ。實に可愛いゝでないか。」

恁んなことを思い乍ら自分は無暗と不安でならなかつた。自分は前日にSへの返事の中に、來る月曜の晩、（此晩は土曜であつた。）彼女の都合がよければ訪問すると云ふことを云つておいたので、其返事を一言彼女の口から聞き度いと思つてゐたが、其機會は到底與へられないことを自分は覺つた。で、自分は二三の友と相撲でも取るやうに廊下をズシン〳〵と往つたり來たりし乍ら、冗談半分の間にも思はず突拍子もない大きな聲を出した。

「どうも野蠻人が偶まにこんな文明社會の中に出て來ると不調和で困るよ。」

抔と自分のある（Sのことを知らない）友達は自分に揶揄つて笑つた。自分も笑つた。

歸りがけに自分は玄關の處で黑い毛の外套を被てMと一緒に立つてゐたSに輕く「さよなら。」を云つた。

「グッド・ナイト。」

と彼女は愛想よく答へた。自己に捷利を感ずる時何時も愛想がいゝのは彼女の持ち前である。

自分は前田と、其他一人の友と三人で表へ出たが、やがてひつそりとした夜の公園に入つた。月のいゝ冷や〳〵した晩であつた。自分は爆發するやうな苦しまぎれに呶鳴り、叫び、歌い、ステッキを振り廻はし乍ら躍り狂つた。そしてそれなり直ぐ近い自家に歸ることの苦しさに大分遠く迄友と一緒に歩いた。前田は自分に彼の家に來ないかと勸めたが、自分は夜更けて彼及彼の家の人々に迷惑をかけなければならないことを思つたので其厚意を却け、そして一人別れて復た公園の方に戻つた。が、味方と共にゐる間恐ろしく騷ぎ狂つてゐた自分も、さて一人となつて見ると又俄かに堪えられない淋しさに襲はれて來た。自分は猶ほ暫くの間、胸の苦しみをまぎらしに一人叫んでゐたが、仕舞にはその氣力さへも失せ、そして只々滅入るやうに頼りない心持になつて、木の葉の影が明月の光りでハッ

キリと黑く讀まれる公園の道を一寸宛慘めな乞食のやうに流し歩いた。

「あゝ彼奴は馬鹿者にはイヤに親しく、優し氣に甘つたれておき乍ら、俺に向つては又ひどく冷靜に、嚴酷に、そして傲慢になりやがる。何のこつた。而も此俺は其虐待に甘んじて何時迄恁んな煙に捲かれた樣なミゼラブルな生活を送つて行かねばならぬのか。畜生、是ぢや餘り情けない、恐ろしい徒勞だ。」

恁んなことを自分は力無げにぶつくたこぼした。

九日の朝前田から昨夜出した葉書が來た。

「今夜の君には同情した。僕迄ある程度の興奮を強ゐられた。——あの人は anti に出る人だ。だから君がぶつかればぶつかる程反抗するだらう。そして今は其闘いの絶頂に居るやうな氣がする。しかし此峠を通り越すとそれから先きはよくなつて來るやうな氣もする。何しろあゝ云ふ勝氣な人は征服して了ふより仕方がないだらう。」

かう云ふ意味のことがそれに書いてあつた。

「眞個くだ。前田はよく見拔いてゐる。これから先きよくなるか什うかは覺束ない話だが、Sは兎に角反對に出度がる奴だ。何でも自分が上は手な位置に立つてゐないと氣が濟まない奴なのだ。そして一つには俺に對しては其勝手か利かないので猶更俺を嫌つてゐるのだ。だから俺が眞劍に出れば出る程、其眞劍を正面から攻めつけるとに自信の持てない彼女は、益々此方を串戲に弄ぶやうな茶化した態度でやつて來る。だが圓曲な手段や、姑息な弄策を用ゐることを良心と性格から絶對に禁止されてゐる俺は、向ふが如何にシラを切つた意地惡い態度に出て、無意義な反撥に興味を持たうとも、先方がそれを遂には恥じる位な眞摯な愛と、眞向な熱誠とを以て飽く迄も彼女を奪ふことに全力を盡くすより外に道はない。又さうすることによつてのみ俺は自分の不足を責めることの苦しみに沸き立つた意義と慰めとを感ずることが出來るのだ。Sはさながら春の海に漾ふ彩られだ海月のやうな女だ。俺が青い水を潛つて行つて其奴を捕まへやうとグイと手を延ばすとするりとわきへ辷る。

今度は其方へ腕を差し出すと、又ぬらりと片一方へそれてふわ〳〵と浮んでゐる。偶まに手に觸れたかと思ふとチクリと刺す。それでも藝のない俺は懲りず其方へ〳〵とごつ〴〵した黑い腕を棒のやうに突き出しては此海月を追いかけて行く。海月はぴたぴたと笑い乍ら右へ左へ腋の下へと自由自在に逃れて遲ろい俺を散々弄んだ擧句、仕舞には俺のしよぼ〳〵した兩つの眼を思ひ切り刺して、俺が灰色の涙に霞んでゐる間にふわ〳〵と何處かへ姿を隱して見へなくなる位が落ちだらう。眞個く俺は狐につまゝれてゐるやうな氣がする。だが戀しい人よ。俺を弄ぶなら弄べ。嘲笑ふなら嘲笑へ。恥かしめるなら恥かしめよ。俺はそれに堪えやう。そして俺は泣いても、砂を嚙ませられても、此氣の利かない苦しい一本道を辿つて、飽く迄も覺束ない此手を君の方に差し延ばす。實に痛ましいことだ。だがそれが運命だ。俺を弄び、嬲るものは君ではなくして運命だ。君が俺を嫌ふのは君の意志ではなくして運命の意志だ。其處で俺は其運命を征服して更に自分に都合のいゝ奥の運命に從ふことが出來るだらうか。又そんな運命が他にゐて呉れるものだらうか。」

日記にかう書いた後で自分は自分が不憫になつて泣いた。と、Sから葉書で月曜日には約束がしてあるから、火曜の晩來て呉れと云つて來た。自分はムカ〳〵し乍ら早速返事を認めた。

「私は延引位好かないものはないが、では止むを得ないから火曜の晩に行きます。世界に誰一人權威者を持たない私も貴女の前には只々奴隷のやうに從順になるより外に仕方がない。と云つても貴女がそれを欲した譯でもなければ、又私がさうならうとしたのでもない。ある眼に見へないものが吾々に然うあることを要求するのだ。」

恁んな風に自分は書き出して、それから「烏なき里の蝙蝠」と云ふ言葉を引き出し、それに就いての攻擊的感想を書いた。そして自分が何處迄も單純な、眞向な態度で行くのは、自分に才や、手腕が缺けてゐるからではなく、自分が人間として第一流の行き方しか取れないやうに生れついてゐるからである。——吾々は執拗に自己の運命や生命の意義に固着し、それを否應なしに最高頂の完全に持ち來すべき義務がある。人生を愛すると云ふことは、樂みを愛することではなくして、辛くとも智慧を愛すると云ふことだ。墮落に行く道は、樂ではあるが、無知を愛することだ。——抔と書き、終りに「昨夜貴女は美しいと云ふ以上に恐ろしかつた。貴女は私が昨夜を什んな心持ちで過ごしたかを知らないでしやう。——だが如何なることがあらうとも私の貴女に對する熱愛は易はることがない。——でも貴女の「お氣の毒ですが併し」"I am sorry, but—"と云ふ言葉程私にとつて厭な、情けない言葉はありません。私はあの言葉を聞く度に胸をえぐられるやうな絶望を感じます。どうかもう二度とあの言葉を使はないやうにして下さい。——」と云ふ風に書いた。が、此晩十一時頃、自分は又も彼女に會へないことの苦痛に堪え兼ねて更に第二信を認めた。

「おゝわが愛する〳〵〳〵人よ。

噫、如何に貴女は私から逃れ、私から遠かり、私を振り捨てることに貪慾でしやう。そして如何に私は貴女に近寄り、貴女に密着し、貴女に縋りつくことに貪婪でしやう。私は貴女の殘酷な拒否に遇ふことなしに斷えず貴女に固着してゐられる貴女の肌衣を、貴女の靴下

を羨む。こんな不躾を云つたからと云つて怒らないで下さい。私の崇拜する人よ。貴女は私の中に夜も晝も休むことのない激情を煽つてゐ乍らそれを抑えつけろと命ずるのは無理ではありませんか。私の胸の中に、永遠に息むことなく噴出する泉を掘つておいて、それを枯らして了へと仰有るのは無理ではありませんか。私を救ふと云ふことは貴女自身を亡ぼすことにはならずして、却つて貴女の身を一層救ふことになると私は思います。私を愛すると云ふことは貴女の身を侮辱することにはならずして、却つてそれを更に高尚にすることに過ぎないと私は信じます。私は貴女に泥醉しきつてゐる。あゝ何と貴女の引力は抵抗し難く怖ろしいものでしやう。貴女が尊大であるやうに私も實は尊大だ。貴女が賢明であるやうに私も馬鹿ではない。貴女がアクティーヴで獨立的であるやうに、私も奮鬪的で且つ創造的だ。貴女が強いやうに私も強い。吾々は共に撰ばれた二人だ。タレントを持つた二人だ。そして二人は同じやうに苦しい境遇にゐる。然らば吾々は互に愛し合はうではありませんか。恰かも太陽が月を愛する如く、又月が太陽を慕ふ如く。吾々は共に凡俗と運

命を等しくすべく生れては來なかつた。一體什うして斯うも調和する二人の間に戀が成り立たないのでしやう。貴女の美しい性質は私の力強い個性と合奏してゐるではありませんか。私のと、そして唯私のとのみ貴女の運命は踊ることが出來る。——こんな小供のやうな自惚めいたことを厭きもせず饒舌くる私を貴女は白痴だと見ますか。ですが私の簡單な自負の底には決して浮はついてはゐない鞏固な地盤があるのです。

貴女の永久なるNより」

かう一氣に書いて書した。薊のやうなSに。自分は無暗にミケルアンジェロや、レムブラントを懐かしがるやうになつた。

十日の日記には下のやうなことが書いてある。

今朝の曉方に見たつぎはぎな夢に眼鼻をつけたら恁んなものになつた。

「なんでも恐ろしくよく晴れ渡つた美しい秋の日和だ。Sと自分とはとある海岸の少し勾配のついた砂丘の上に並んで休んでゐる。眼の前にだだつ廣い海が紺青の天の下に銀色に

眩しく展開して、其上を白い海鷗がチラ〳〵飛んでゐる。Sは桃色の着物を着て桃色の陽傘をさし、自分は好い加減色の褪めた例の鳥打帽子を被り、厚ぼつたい黒の外套を着てゐる。二人は長いこと爭論でもした後のやうにだれて、軟かい日光を浴びながら默つてゐる。

「相撲を取りましやうか。」Sは俄かにかう云つて自分の膝をたゝいた。

「何。相撲だつて？面白い。取らうとも。しかし投げられたつて怒つちやいやですよ。」

「貴方こそ。」

で、二人は急に元氣を回復して小供のやうにいそ〳〵と起ち上つた。自分はステッキで砂の上にイビツな圓を描いて

「さあいらつしやい。」

と其中央に身構へをした。Sは髮をいじくつてゐたが、矢庭に自分に飛びかゝつて來た。自分は笑ひ乍ら彼女の都合のいゝやうに充分取り組ませた。Sは中々力があつた。そしてどうしても勝たずには措かないと云ふやうに滿身に力を罩めてグイ〳〵と自分を押し始め

た。「これは案外馬鹿にならんぞ。」と自分がすつくと彼女を抱き上げやうとするとSは必死となつてピン〳〵足を海老のやうに跳ねかして我ん張つた。で、二人は一寸の間格闘した。が、自分はとう〳〵彼女を横に抱き上げて了つた。そして上から恰度搖籠の中の赤兒を覗き込むやうな工合に

「どうです。可愛いゝねんねえさん。あの海の中に投げ込んでもよこざんすか。」と笑ひ乍ら彼女の小さな顏を見下ろして云つた。

「勝手になさい。」

彼女は最う全く抵抗を止めて、かう駄々つ子のやうに投げやりに云つたが、その狡猾氣な眼の表情の底には如何にも隱しきれぬ執念が拗ねてゐた。自分は何かずだ袋でも擔ぐやうにぐるりとSの體を背中に廻はして背負い込んだ。

「さあお歩きなさい。さうして妾をおんぶした儘自家迄送り届けて頂戴。妾はもうすつかり草臥れちやつたから。」

かうSに云はれて自分は彼女を背にし乍らズシ〳〵と砂原の上を歩き出した。するとSは先の尖つた小さな靴で無遠慮に自分の後股を蹴りながら、「お駈けなさいよ。」と促した。で、自分は駈け出したがSの體は妙に目方を増して來たばかりか、彼女は背中の上でえらく噪がつて横を向いたり、背り返へつたりして仕方がない。自分はふり落さうと試みたが、彼女の體は什うしたものかしつかり自分の背中にこびり付いてゐて離れない。と、Sは復た自分の後股を豚の臀でも突つつくやうにヒシ〳〵と蹴り立てゝ走らせた。で、自分は大分ムカッ腹を立てゝ來た。

「妾ほんとうは貴方を愛してゐるの。」

Sは急に後ろからかう囁いた。が、自分がふつと後ろを振り向いた途端、彼女は長く出してゐた舌を慌てゝ引つ込ました。自分はカッとして復たも苛立しく彼女を振り落さうと背中を搖すぶつたが、矢張りSは落ちなかつた。そして彼女の體はどん〳〵重くなつて來た。自分の眼は次第にくるめき、足はよろめいて來た。が、それでも自分は瀧のやうな汗

を流し〳〵限りなく廣い砂原を海に沿つて走り續けなければならなかつた。キラ〳〵耀く銀色の海面は自分の眼をいり盡し、炎のやうに搖れつゝ立ち上る砂原の熱い陽炎は自分の足許を恐ろしく赤い凸凹したものに見せた。自分は日射病に斃れるものゝやうな心持を抱き乍ら何遍となく蹴つまづきさうになつた。が、それでも猶ほ彼女の小さな靴の尖頭に意識を付けられ乍ら物狂ほしく走つた。そして自分は耳の裏に「妾貴方を愛します。」と云ふ辭を幾度か夢のやうに聞いた。が、仕舞に自分はSの吊り鐘のやうに重い體に身も骨も碎けるやうな心持になつた。そして遂に眼が眩んで二三歩ヒョロ〳〵と前によろめいたが最後、氣が遠くなつて恰かも使い過ごされた瘦せ馬のやうに「ウン」と喘いでどさりと其處にぶつたほれた。と、Sは自分の骨と皮ばかりになつたやうな、見るかげもない屍の上に、揚々と其大きな體を踏み乘らしたが、やがて凱旋者のやうな矜らしさを以て「妾ほんとに貴方を愛してゐましたのに。可哀相な……。」と云いかけて噴き出した。すると不思議にも自分の慘めな屍體の中から今度は全で巨人のやうに恐ろしく大きな自分がメキ〳〵と顯は

れて立ち上り、忽ちSを上から見下ろした。そして「あゝ御免なさい。妾貴方を愛してゐたと云つたぢやありませんか……。」と云いつゝ逃げやうとする彼女を、恰度可愛らしい毒の蕈かなんかのやうに上からぷすつと一踏みに踏み潰した。そして自分は大きな聲で笑い、やがて又淋し相にオイ〳〵泣いた。

「あゝ什んなに私は貴女を愛してゐたゞらう。」かう云つて自分は彼女の小さな屍の上に突つ伏し、それを處關はず接吻した。

日は沈みかゝつて肌寒い風が金色の海面の上を通よつてゐた。」

十六

晴れながら毎日寒い風が強く吹いた。

十一日の火曜、Sは默つてゐたが、此夕兎に角彼女に會へると云ふ豫覺はいくらか自分

に平安を與へた。が、會つた結果が什うなる。あのおぞましい妖怪屋敷のやうなホームに歸れば、迚も滿足して氣持よく再び出て來ることは許されないに定まつてゐる。それを思ふと恐ろしくはあるが、そうかと云つて矢張り行かずにはゐられない。――それは最早自分にとつては「行く」のではなくして、「歸る」ことに等しいのだから。で、自分は朝の中から何の道不安を免れる譯には行かなかつた。

出がけにかねて親しいある友の折惡しい來訪に逢つたことゝから、自分は――六丁目の停留場から夢中で走つたが――八時過に息せききつて慄へ乍らSの家に着いた。にや〳〵笑つてゐる田舍者の「せき」に迎へられて例もの室に通ると、Sは温か相にして眼鏡をかけてスキンバーンを讀んでゐた。

自分は出しなに生憎友達が來たので氣が氣でなかつたことや、その友に止むなく事情を打ち開けて歸つて貰つたこと抔を笑い乍ら語つた後で、此間の音樂會の話を始めた。一體自分は一人自家にゐると何時も遽だしく興奮しきつてゐ乍ら、いざSに會ふと最初の間は

妙に安心したやうに落付く癖があつた。そして少し惡いことでも聞かされて、苦しい刺戟を受ける迄は、直接に恐ろしい本問題に立ち入つて大膽に當る勇氣が挫け、それを不滿に思いつゝも一種混沌と和らいだ暢氣な、そして臆病な氣分になるのであつた。

「一寸貴女に訊くが、Hは貴女にとつて一體「何」なのです。「誰」だと訊ねるのではない。」

自分は暫くして漸くある不安に促がされてかう串戲らしく口を切つた。

「なあぜ。」とSは「又始まつたな。」と云はむばかりに微笑して云つた。

「Hは僕のことを知つてるでしよ？」

「えゝ。」

「えゝ？」

「えゝ。どうして？」

「それで判つきりした。しかし什う云ふものか僕はHを其程迄に憎くむことが出來ないんだ。」

彼女は默つてゐた。

「まあ其事はそれ丈けでいゝ。」

と自分は云つて莨を喫かし始めた。何時も自分が此處に來て會ふ時にはぐんなりと疲勞してゐる彼女は此晩妙にそわ〳〵してゐて、室内を起つて歩き乍ら足の調子を取りつゝ何遍も踊る樣な姿をした。

「踊つて見給へな。一つ。」と自分は微笑み乍ら云つた。

「いやですよ。」かう云つて彼女は急に椅子に腰を卸したが、さて腕を組んだ。

「此人には什うも腕を組む癖がある。あれは別に自分でもいゝと自覺してやつてゐる譯でもあるまいが、如何にSらしくあるとは云へ、何しろ餘り感心した格恰ではない。――」

こんなことを自分は彼女の可愛さに醉い乍らふと心の中に思つてゐた。が、其中彼女のかうした態度と表情とはひどく自分に對するあてつけな傲慢なものに感ぜられて來た。

「貴女僕を揶揄ふ氣はあるの？」やがて自分は恁んなことを云い出した。

「いゝえ。」
「併し貴女は人を揶揄ふことは好きでしやう。」
「さうね。でも小供を揶揄いはしない。」
「で、僕が小供だと云ふ譯か。」
「えゝ、まあ一寸いゝ小供ね。」
「ふむ。それで大人だつたら揶揄つてやると云ふのか。」
「大方さうでしよ。」
「中々えらいことを云いますね。だが僕はある意味で小供には違いないさ。僕は其處にも自信を持つことが出來るのだからな。それに僕なんぞは何時迄も一方には小供であつていゝ特權を與へられてもゐる。併しそれにした處で無論只の小供ぢやない。」
「つまり世間を知らないと云ふ意味で……。」
「貴女の云ふ意味が單にそれだと云ふことは聞かなくとも分つてゐるさ。成る程僕は君程

世間に觸れた譯ではない。又さう云ふ意味では此れからも餘り觸れずに濟むだらう。しかし觸れずにも貴女よりは世間を知つてゐる。――」
「馬鹿だと云ふのでしよ。」
「勿論。少くも貴女の云ふやうな世間ならば。」
「へ。だけど觸れても見ずにそんなことを一概に云へた義理ぢやないわ。何處に什んな價値のある物や人が轉がつてゐるか分りはしないぢやありませんか。」
「例へばHのやうなか。成る程それや貴女には分るまい。だが僕にはじつとしてゐても分る。兎に角大抵な世間と云ふ奴が此方よりも段違いに程度が低いこと丈けは確だ。それは世間の奴等の言つたり爲たりしてゐることを見ても直ぐ分ることだ。本當に吾々の尊敬に値するやうな人間がもし世間に居たとすれば、そんな人間は何も此方が探さないでも、自づと先方から出て來る。隱れやうとしたつて隱れてはゐられない筈のものだ。――」
かう云つて自分は猶ほ、それでないにした處で、そんな塵埃の中に若しや金の指輪でも

まぎれ込んではゐないかと當てもなく捜すやうな覺束ない遊戯よりも、自分の要求にピッタリ合ふ滋養物――金でもいゝ――があるに定まつてゐる確かな處をばかり掘じくつて行く餘裕のない眞摯な態度其自身に大きな價値がある。又さう云ふ人間にして始めて其求めた處の貴重品を役に立たせる道を知つてゐる。自分は始めからSの云ふやうな第一義的でない「價値」をあさる程閑人ではない、と云ふやうなことを饒舌つた。

「一體貴女は什んな人間が一番好き？」自分は又恁んなことを訊ねた。

「分らない。併し妾馬鹿は大嫌い。」

「で、僕が其馬鹿だと云ふのか。」

「いゝえ。」とSは笑つて

「でも妾利口な人間が好き。」

「つまりコンモンセンス丈けの氣の利いた凡人がか。」

「しかしコンモンセンスも必要。」

「うむ。だが智慧よりもか。」

「兎に角妾は面白いものが好き。」

Sは又恁んな風にぴよい〳〵と話を横道に逸らして自分を弄ぶやうな興味をその表情に示した。

「幸福よりもか。」

「えゝ、單調な幸福よりも色々に變化して行く面白さの方が却つていゝわ。」

「む。そんなことが心から面白いかね？」

「だつて什うせ心から面白いなんてものはないぢやありませんか。でも斯う云ふこともあるでしよ。心が面白くなくて悲しい爲めに却つて面白いと云ふやうなことも。」

「ふむ。僕も人工的と云ふとに妙な興味を持つた時代もないとはない。だが人間の欲望が少し大きく眞面目になつて來ると、もう意識的な人工なんぞに儚ない慰めや、遊戯的な興味を感じたりしてはゐられなくなるんだ。だが兎に角貴女には凡てのことが興味の問題

以上には行き得ないやうですね。」
「それで貴方は妾を不幸だと思つてゐるんでしよ？」
「うむ。さう思ふさ。」
「しかし何時妾が不幸だと云つて？妾ちつとも不幸ぢやなくつてよ。」Sは又恁んな風に出て來た。
「戀人と永久に一緒になるとが出來ないと云ふ心細く、悲しくてならない立場にゐ乍ら貴女はさう串戲半分に幸福だと云ふのか。だが一體什う云ふ意味で貴女はそんなとを云ふのだか僕には分らない。しかし眞面目にせよ、串戲にせよ、兎に角それで貴女のは戀になつてゐないと云ふとが分る。」自分は少し逆上せ氣味に面喰つてかう云つた。
「什うして分つて？」彼女は巫山戲てはゐながつた。
「つまり日常の一寸した好き嫌いと大差のない氣輕なものだと云ふのさ。」
「淺薄なね？」

「うむ。」
「でも貴方には一體深さと云ふことが分つてゐるでしやうか。」
「うむ。貴女よりは分つてゐる心積だ。」
「しかし貴方は少くとも妾の場合の深さを知つてゐない。」
「馬鹿な。深さにそんな人に由る種類の別があるものか。」
Sは默つて了つた。で、自分はSの云ふやうな面白さは自分には不快に外ならない。自分には興味と云ふことは問題にならない。只圖拔けて恐ろしい人間になること丈けが問題だと云ふやうなことを云つた。
「妾別に偉くならう抔と云ふ氣はない。」
「うむ。貴女が自身でなる必要はない。併し大きな人間と運命を結び給へ。さうすれば貴女は貴女自身一個で行くよりかも遙かに貴女の道を果たせる。惡いとは云はないぜ。」
「そんな氣もない。」

「ふむ。淺薄な「ニルアドミラリ」で凡てを茶化して行かうと云ふのか。」
「いゝえ、ですけど妾簡單は嫌い。」
「ぢや簡單とは何だい。複雜とは何だい。それや僕が正面的だから君にはさう思へるのだ。それが簡單なのだ。僕はこれで君よりももう少し物事を正面から深く考えてゐる。併しもし僕が卑怯な横道を狙ふ弱者だつたら君は恐らく僕を複雜な大人だと感心するだらう。」かう自分は云つたが、彼女は何とも答へなかつたので
「だが僕は貴女に云はう。僕は切りに例の一つ話を持ち出し度がつてゐ乍ら、又貴女に怒られるのが怖わくつてつい恁んな詰らない談をするやうになるんだが、斯う云ふ議論では僕は貴女より小供でも、貴女の方がずつと僕より小供なのだからね。到底僕に叶いつこはないんだ。何しろ餘り分りきつた屁理屈なのだからな。」と附け加へた。
「えゝ、ほんとに貴方は理屈ばかり達者で、實際のことを知らないのね。」Sはかう云つた。自分は又默つてゐられなくなつた。

「そんなら實際とは何です。社交と云ふことか。そんなら先刻一寸云つておいたからあれでもう澤山だ。」
かう云つて自分は猶ほ「凡人は既成の社會に出來る丈け自己を適合させることを以て自己の天職と考え、天才は自己に社會を適合させることによつてそれを開拓する。」と云ふやうな意味のショオの言葉を引き合いに出した。すると彼女は自分に又人情や、ユーモアの理解がない抔と云つて非難したが、それに對して自分は一々眞向から嘲笑を返へした。そしてユーモアと云ふものゝ意味を説明した後で、それは意識的に求めて得らるべきものでもなければ、又さうする程價値のあるものでもないと云つた。
「要するに僕は欲望が大きくて、意志が強く、又統一されてゐるから、外見的には簡單に見へたり、世間知らずの小供に見へたり、又人情や、ユーモアが分らなく粗野に見へたりするだらう。併しそれは凡て僕を全で理解出來ない奴の見方だ。だがそんなとは什うでもいゝ。僕は貴女と議論ばかりし度くはない。それに貴女と議論をしてゐると什うもつい貴

女を輕蔑するやうになるからな。處で僕は貴女を輕蔑するのは厭だ。又貴女にいくら議論で勝つた處で何にもならない。だがもうこんな空論は止しにしましやう。それで什うです。未だ僕に對して些しも愛情は起りませんか。僕は戀とまで云ふとを控へるが。」

「又始まつた。何遍同じことを繰り返へすの？」

とSは「何遍」にアクセントを附けて笑い乍ら反問した。

「何遍だか知らないが、戀をしてゐるものゝ言葉は什うせ繰り返へしばかりさ。殊に僕のやうな場合では什うしてもさうなるのだ。」と云つて自分は一寸言葉を切つたが

「だが僕は貴女を戀し始めてからもうかれこれ一ヶ月以上になる。其間には人の感情はいくらでも變化出來ると思ふのだ。」かう云い足した。

「だから貴方が妾に一つ問を繰り返へして聞くのは當り前だと云ふのね。處が戀と云ふ感情丈けは他の感情と違つて、さう時間で變化することの出來るものぢやないの。」

とSは自分の言葉を遮ぎつて、敎えるやうな落付いた口振りで云つた。

「どうもさうらしい。」かう自分は苦しく唸るやうに云つたが、暫くして更に

「ぢや始めと同じことか。」とむつつり付け足した。

「えゝ些つとも違はない。」と彼女も獨り語のやうに羽織の紐をいじくり乍ら呟いた。

「では尊敬は什う。」

「別に考えても見ないけど、そりやあ未だあるにはあるでしよ。」

「減りも增えもせずか。」

「どうですか。」

「して見ると少し減つて來た方かな。」かう云つて自分は「だが兩性の間では尊敬と云ふことは什うも其程大した問題にはならないな。」と考えた。そして

「それで好意は？」と尋ねた。

「妾訖度さう來るだらうと思つてゐた。」Sは笑つて云つた。

「あゝ何故さう僕が嫌いなんだ。」と自分はとう〳〵又短氣を起して狂い出した。

「別に嫌と云ふ譯ぢやないけれど、自然に任せておくより仕方がないぢやありませんか。」
「自然なら仕方がないさ。併し貴女は果して自分の感情を自然に任せてゐるかしら。」
彼女は面倒臭いと云ふ風に横を向いて默つてゐた。
「――一體貴女と僕とは性質の上に隨分共通點があると僕は思ふのだが、貴女はさうは思はないか。」
「さうね。そりや中々貴方と合ふ處もありますさ。しかし妾には又林さんなんぞと合ふ方面もある。」
「さうも思へる。何方かと云ふと僕の方が貴女に近いと思へるが。だがそんなことは何方にしたつて僕は關はない。什うせ全然同一な性質と云ふものは二つとはあり得ないのだからな。」
「そんなことを云つたつて貴方は自分と少しでも合はない性質の人とは一緒になれないでしよ。少くも滿足は出來ないでしよ。さうよ。」

「さうばかりも思はない。何故ならば僕はこれで他人の性格の價値――少くも價値ある性格を認めることに努力する調和的な性質をも一方に有つてゐるからな。此僕の調和的な一方の性質が未だ貴女には知れてゐないやうだ。けれども若し僕と一緒にゐる間に自づと僕の性質に化せられて了ふやうな弱い人がゐたとしたならばそれは僕の罪ではない。」
話は此處で一寸途切れた。不氣味な沈默が暫く續いた。で、自分は復たSとの散歩のことを思ひ出して、此週の木曜日にそれが出來ないかと訊ねたら、稽古があるから駄目だと彼女は云つた。(Sは以前に若し散歩するならば木曜以外の日には都合が惡いと云つたことがある。)それで來週の木曜日は什うだと云つたら、活花の會があるから差支へると斷つた。
「貴女は凡ての他の事や、他の奴にはえらく熱心な厚意を持つて、僕丈けにイヤに冷酷なんですね。」自分は苛立しくかう云つた。
「什うして? 妾人に冷酷なことは嫌い。」と彼女は冷やかに微笑むだ。
「嫌いでも好きでも兎に角君は冷酷なのだ。これが冷酷でなくて何だ。」

「それや貴方の氣の故よ。」
「さうかも知れぬ。」
と云つて自分は、生溫い日向水が二つ並んでゐる時兩方は互に冷たい奴だと一方を思ひはしない。併し一方が同じ溫度で止まつてゐるのに、他の一方丈けがどん〳〵熱して沸騰する時には什うしても片一方の生溫の水は氷のやうに冷たく感じられるのだと云ふやうなことを云ひ足した。其處でSは「オール・ライト」と笑つた。
「僕はテニスよりも、活花よりも、稽古よりも輕んぜられてゐる。これがもし僕でない他の君の友達の塲合だつたならば、君はそんなものゝ約束を直ぐ破つて了ふことは分りきつてゐるのだからな。考へて見りや僕の人格も戀も君の惡戲の前には、かた無しだ。實に何と云ふ虐待だ。侮辱だ。」
「貴方がさう思ふなら仕方がない。貴方の勝手だ。」
Sは又腕を組んで意地惡氣に横を向いた。

「僕は一體我慢が弱い男なんだ。だが僕は未だ我慢する。苦しくとも我慢せずにはゐられない。しかし僕は僕の意志丈けは什んなことがあつても貫徹させる。」
「オールライト。」とSは又自分の好かない答へ方をした。
「ふむ。其方は其方、此方は此方の勝手だと云ふんだろ。」
「だつて貴方が一人で勝手にするのを何も妾が干渉するには及ばないぢやありませんか。」
「へむ。」
以前のよりは更に不快な沈默が襲つた。
「貴方は其中妾よりもつとえらい女を戀するやうになり、さうして妾を戀したことを笑ふやうになるでしやう。」
暫くしてSはかう不氣味な落付きを以て云ひ出した。
「うむ。さうなつて欲しいとも僕は思つてゐるんだ。貴女よりずつと優れた女を俘にしてそれを貴女の眼の前に見せつけてやり度いやうな氣もしないとはないよ。そんなことをしたつ

て貴女は格別驚きもしまいが。だが何と云つたつてそんなことは夢にも有り得ないことだ。又實はそんなことになつては堪らない。――あゝしかし一體何をグズ〳〵してゐるんだらうな僕は。」

「だからさつさと何か他の氣の利いた仕事でもなさいよ。何時迄も妾の後ばかり追つかけてゐずに。」

「何だつて？巫山戯ちや困るぜ。この戀の塲合でグズ〳〵してゐると僕は云ふのぢやないか。」

「其位のことは分つてゝよ。」

自分は何遍泣き相な苦笑を漏らしたか知れなかつた。

「あゝ怒れない〳〵。僕は自分が何をしてゐるんだか分らない。だが何しろ君は僕よりも強い。吾々の間で君は何處迄も強者で僕は弱者だ。何故ならば僕は君を此程愛してゐるにも拘はらず、君は些しも僕を愛しないのだから。全で何だか此處は牢屋のやうな氣がする。」

「自分で勝手に入つて來ておき乍らぶつくた云はれちや妾こそいゝ迷惑だ。」

自分は苦々しく笑つた。そしていきなり彼女の左手を取つて其手に齒を押しつけた。Sは荒々しく其手を引き去つたが怒つてはゐなかつた。

「僕は什う云ふものか心から君が好きなんだ。こんな侮辱に迄あつて居乍ら僕は何一つ反抗出來ない。君は全で僕から權威とか、自尊心とか、凡てそんなものを奪つて了つた。僕は君に對しては絶對的に戰鬪力がない。」

「屹度貴方のいゝ爲めになりますよ。」

「これがもし他の奴だつたなら僕はもう疾くに敲き殺してやつてゐるがな。どうも君だから仕方がない。」

Sはニッと微笑したが、其微笑には何處にも愛嬌の閃きがなかつた。

「あゝ妾もう眠むい。さあお歸りなさいな。」とSは自分の顏を始めて眞向に見た。

「よし〳〵。歸りますよ。温和しく。しかし此儘僕を追い返へすのは餘り酷過ぎる。何と

か云つて僕を慰め、勵ます氣にはなれないんですか。」
「お氣の毒でもそりやあ出來ない。」とSは呟いた。自分は又妙な笑い方をした。
「君は餘んまり正直だ。正直過ぎる。だが僕はそんな正直を聞き度くはない。そんな正直はいゝ正直ぢやない。そんな正直よりは僞でもいゝから一言でも優しい慰めの言葉を聞き度い。その方がずつと有り難い親切だ。什うせ破滅に終るものなら不意の失望は間斷ない失望よりは未だいくらか增しだ。いや遙かにましだ。癌に罹つた覺りきれぬ人間に早くから癌の死病であることを宣告するのは親切な正直だらうか。そんな病人には癒る〳〵と瞞し拔いて殺して了つた方が餘程自然な親切だ。」
Sは欠伸をした。が自分はもう少しも腹を立てなかつたのみか、却つて其欠伸を可愛くさへ思つた。
「兎に角もう此處に來ちやいけないんですか。」
「なに又來週お出でなさい。其迄はいけません。」

「ふむ。來週々々で何時迄行くことか。こんなことをしてぐず〳〵延引ばかりしてゐる間に僕は一生終つて了ふかも知れない。ほんとに何と云ふ馬鹿な話だ。」
「だから妾イングランドに行つて了いますよ。さうしたら貴方ももう來週なんて云ふ厭な言葉を聞かなくなるでしやう。」
「えゝ。いつそ早く行き給へ。明日にでも立ち給へ。其方が却つて思い切りがよくつていゝや。」
「餘計なお世話。賴みもしないのに勝手に妾をラヴなんぞして。」とSはコケットに笑ひ乍ら自分の顏を斜に覗いた。
「さうだ。俺はまあ何と云ふ馬鹿だつたらう。こんな飛んでもない馬鹿な戀に陷つたとは。」
「えゝ、ほんとに貴方が馬鹿だつたのよ。」
「うむ。僕はマサカ自分を恁んな馬鹿だとは思はなかつたよ。恰度君に僕が解らないのが馬鹿であるやうに、僕が君を戀したことは馬鹿だつた。盲目だつた。」

「此處に來ることはほんとに厭でしよ。」
「うむ厭だ。失敬だが此處は一寸怪物屋敷のやうな氣がするよ。それにも拘はらず此處は僕のホームだ。此處にゐると僕は妙に落付く。だから僕は何遍放逐されても結局此處に歸つて來ずにはゐられない。あゝしかし此れからの何も出來ない一週間が今から恐ろしく苦痛だ。」
「妾に手紙でも書いてゐればいゝぢやありませんか。」
「へ。有り難ふ。書くなら書くがいゝさ。どうせ讀む譯ぢやないんだからと云ふんだらう。」
「さあ兎に角お歸りなさい。厄介なお客樣。」とSは起ち上つた。そして腕を組んだ儘室の中を歩き廻つた。
「歸らう。だが僕は未だ君を訪問することを止めはしないからね。」
「それは貴方の定めることで、妾の知つたことぢやない。」
「あゝ馬鹿だ〳〵。什うせ俺はもう本當の俺ぢやないんだ。」

と自分は自暴に云い放つて起ち上つた。Sは横を向き乍ら臘のやうに冷たい手を差し延べた。自分も矢張り汗ばんだ水のやうな手で輕く彼女の手を握つた。
「しかし僕は未だどうしても思ひ切れない。僕はどんなことがあつても到底君から離れることは出來ない。どうかさう思つてゝ呉れ給へね。」かう自分は靴を穿き乍ら云つた。
「オールライト。」と云ふ彼女の聲が横へ走るやうに後ろで幽かに聞えたが、其時玄關の電燈はもう消されて、彼女は室の中に入つてピシャンと襖を締めてゐた。
月の冴えた凄い晩であつた。來る時は小鹿のやうに勢込んで飛んで來た同じ道を、今度はもう何を考えると云ふ意識を特つにしては餘りに粉碎された重苦しい混濁の心地を抱いて歩くともなくずる〳〵と歩いた。ある明るい通りに出た時、其處にあつた一軒の珈琲店は、此儘自家に戻ることを怖れてゐた自分を引きつけた。自分は何と云ふ氣なしに其處の二階に上り、そしてガランと空いた室の椅子に腰を卸した。と瓦斯の灯りに照らされた自

分のイヤに青褪めた顔が、壁の鏡に戦死者のそれのやうに不吉に、わびしく映つた。自分は席を換へて珈琲を一杯飲んで後、其店を去つた。「あの時はあゝ云へばよかつた。かう答へるべきであつた。」と云ふ例も乍らSの家を去るとは自分の念頭に浮ぶ不満が此時も色々の言葉に於て自分の頭に擡がつた。

「俺は人を感心させるやうな巧いことを饒舌つたり、自分をえら相に見せかける達者な警句を吐いたりすることにかけては決して多くの人間より無神經ではない。だから俺は普通の場合大抵無口な或は朴訥な會話者だ。しかしSの場合に於てはもうそんな餘裕のある眞似をしてはゐられない。俺は全力を盡して適當なことを云い、出來る丈け利口に自分を紹介して熱心にSにぶつかるべき義務があるのだ。良心はさうあることを俺に命じる。何時もかつも控へ目にした裝つた俺であることを命じはしない。恁んな場合に饒舌らずに何時饒舌る時がある。」

恁んなことは暗い道を歩く自分の念頭をちらと掠めたが、直ぐそれなりに消え失せて後

には

「思ひ切れ〳〵。もういゝ加減に諦めろ。何時迄思い切り悪くぐじ〳〵引つかゝつてゐるのか。此腰抜け奴。」

と云ふやうな罵りの聲が意識的に自分の中に繰り返へされた。しかしそれは自分が強いて起こさせた力無い叱咤であつた。實の處自分には未だ本當に思い切ることが出來れば、それは僞だとしか思へなかつた。Sに對する深い愛惜の念は自分の骨の髄迄ひつつこく喰い込むでゐる。自分の全身の中に彼女に對する愛の分子が一滴たりとも殘留してゐる間、自分は永久にSを思いきることは出來ない。思い切れないことは實に〳〵苦痛の種子である。併し猶ほ且つ彼女に見離される苦痛よりは比較にならない程まし。恁んな風にしか自分には思へなかつた。「これが苦痛だ。苦痛の恐るべきものであることは知つてゐたけれども、よもやかう迄執拗な、根深く恐ろしいものがそれであつたとは知らなかつた。」と自分は感じた。そして自分は猶ほも歩き續けた。

併し自分が「もう俺は爲る丈けのことをし盡したか。自分の全力を果したか。」と自らに尋ねる時、自分は「什うして未だ〳〵。俺は未だ勿論行き盡してはゐない。それのみか俺は未だ殆んど一歩も踏んではゐないのだ。」と云ふ答へ外聞くことが出來なかつた。而も自分は自分の冥い前途を恐れた。

自分は今更のやうに――leben heisst lachen mit blutenden Wunden――（生は血を吐く懊惱の笑だ。）と云ふやうなデーメルの句を思い出した。此深い傷手は堪え難く痛ましく人の身を苦しめ拔く。人は其の痛苦に呻吟し、號哭する。しかも其傷口は妙に痛痒ゆい。搔かずにはゐられない。それでつい引つ搔く。引つ搔けばボロリと肉が又一片かけて、其處からは更に新たらしい毒血がだら〳〵と流れ出す。それが痛さに又泣く。さう云ふ風にして人は其濃い〻血の迸り去つて己れの眼の刻一刻に落ち窪み、冷たい死人のやうに顏の蒼褪め行くのを戰慄を以て眞向に見つめ乍らも、猶ほ彼の盲目な手は其傷口を彌が上にも擴げにと其方に引きつけられる。其泣く子のやうに拗ねた矛盾の惱みに何うにかしたはき出し

口を求める時、纏綿した人の本能は、悲痛の正反對の側にゐる笑いの中に逃れ度がる。それも人生かも知れぬ。しかし其處迄俺が行つてゐない故か、俺にはその恐ろしい流血を見て所詮笑ふなんて云ふことは出來ない。――少くも極く瞬間的にしか。――俺は只呆然として爲すことを知らずにゐる。そして時偶ある物狂ほしい發作から矢張り小供のやうに泣き號び、悲嘆し、呻吟するより外ない。だが其處で俺は一升の生血を流す時に、一斗の鮮血を飲まう。一斤の肉片をもぎ去る時に十斤の肉片を奪はう。貪らうと泣きつ〻、喘ぎつ〻、藻搔く努力の中に人生を認める。其處に悲壯な人生はあると俺は思ふ。

Sよ。自分を傷け、鞭を以て虐待し玉へ。自分はそれを甘んじる。それは返へすが〳〵も君でなくして運命の意志だからである。しかし噫、什うして自分は故意に求めて愛する自分の肉一斤を失ひ、あたら一升の血をむざ〳〵流す氣になれやう。あ〻自分は苦しむ。苦しむ。苦しむ。お〻可愛らしい殘忍な鬼よ。桃、色の惡魔よ。

「見てのことが要するに盲目だ。」と自分は又考えた。「出來得る限り盲目を排け、能ふ限り

小さな意識の眼を大きく睜いて進み乍ら、而も所詮盲目だ。自分がSを戀したとも盲目だ。彼女が自分を愛しないことも盲目だ。絶望に定まつてゐ乍ら、十々侮辱を受け乍ら、猶ほ未だある幽かな迷信を頼りに懲りず彼女の前に匐い寄つて行く。それも盲目だ。二人の落ち行く先も定まつてゐるやうで矢張り盲目だ。猶ほ其他に傍觀者には氣付いてゐて當の自分には盲目である盲目がいくらもあるに違いない。何もかも盲目だ。だから悲愴なのだ。

今晩も自分はそれと覺悟の前で彼女を訪れ、豫想通り更に痛い傷口を擴げられてすごすご歸つて來た。蹂み躙られに行つて蹂み躙られて歸つて來た。何のこつたか、利口か馬鹿か、全で譯は分らない。兎に角自分は滅入つて居る。くしやくしてゐる。だが自分は未だシッカリしてゐる。此分ではいくら血を流しても容易に死につこはなさ相だ。」

十七

十三日の朝自分はカナリ長い手紙をSに認めた。自分は先づ戀の盲目なることに就いての最近の感想を書いたが、什うも自分がSから恐ろしく神經の太い、簡單な男に見縊られてゐる氣がしてゐたので、「ウェルテルの悲哀」の中に見出した「天才は奔流である。」と云ふやうな意味の言葉から河の譬へを引き、簡單と統一との區別を說いたりした。そして自分は人として最も當り前な、如何なる困難をも避けやうとしない正面の道を歩いてゐ乍ら、求めて樂な横道に逃れやうとしてゐる彼女の如き人々よりも却つて自由であると云ふのは什う云ふ譯か。實の處自分は未だ自分の道に眞に苦しみと云はるゝ程のものを感じたことはないのだが、兎に角「同じ苦痛にも苦しみ甲斐のある苦痛と、ない苦痛とがある。喜びにも喜び甲斐のある喜びと、ない喜びとがある。而して千百の艱苦や喜悅に一々眞の腑甲斐をあらしめるのが賢い强者の本領だ。吾々も什うかさうし度いものです。」抔とも書いた。

自分にも恁んな手紙を今猶ほ懲りず彼女の許に出し續けると云ふことが、一方糠に釘と云ふやうな無益な感を起させないでもなかつた。併し自分は殊に彼女の戀を通じて自分に

生じて來た感想は、一つ〳〵彼女に打ち明けずにはゐられなかつたのみならず、又その義務があるやうにも感じてゐた。そしてそれを書き送ると何となくそれが彼女の心絃に觸れ、ひよつとかすると僅かなりとも何か有効な啓示にならないとも限らないと云ふやうな氣がしてゐた。且つ顧ふに自分には恁んな恃みもあつた。と云ふのはモンナ・ヴンナの最後のあたりに、ある人がヴンナに向つて「お前は人間の力によつては殆んど不可能なことを能く成し畢はせた。」と云ふやうな意味のことを云つたのを自分は芝居から記憶してゐたので、それが妙に此場合の自分にとつては勵ましの言葉として働いてゐたのである。さう云ふ譯で彼女への手紙を草すると云ふことは、縱令それが極く微弱な、瞬間的なものに過ぎないにも、自分にとつて殆んど唯一の慰めでもあり、氣晴らしでもあつた。

「未だ分らない。什うなるか分るものか。」

かう自分は屢々自らに云つた。そして「俺は未だ動きの取れない最後迄行ききつてはゐない。」と常に心に思つた。が、そんなら什うして動くか。什うしたらいゝのか。何處に道

があるかと云ふことになると、てんで自分には見當がつかなかつた。「噫。誰か自分に力を添へて呉れる人はないか。自分に道を指し示して呉れる人はないか。この道に踏み迷つた瞽な自分に。」と云ふ幽かな訴へは屢々不滿な自分の胸の中に憐れに繰り返へされてゐた。が、自分は矢張り切ない沈默を守るより仕方がなかつた。

「事件は什うだい。發展して行きつゝあるかね？」

ある友が來てかう訊ねた。

「あゝどん〳〵發展してゐるよ。惡い方へ。」

と自分は微笑を以て答へた。が、自分は此友の歸つた後で、何と云ふことなしに彼及び其他二三の友が、自分の戀の破滅を期待し、且つそれを喇りを以て望んでゐるものゝやうに感じた。そしてむらむらと惡感を感じたが、又恁んなS一人の戀に行き惱むで最早その惱み丈けに十二分に骨身を削つてゐる自分が、友のことや、仕事のことや、家族のことや、其他細々した些事の爲めに氣を腐らして、猶ほ一層のそれこそ腑甲斐ない苦痛の重荷を招

くやうなことがあつては、到底此小さな身一つでは背負いきれない。堪つたものではないと思つた。で、自分は出來得る限り他の不快に對しては高く止まつて、無神經に、冷淡にしてゐやう。自分をもつと尊敬して人を氣輕に鼻の先であしらへ。一々正直に胸でぶつかるな。詰らないことには卒業して了へ。それでなければ自分の爲めに損だ。餘りに割りが惡過ぎると思ふやうに努めた。

此日の夕方自分は松子に誘はれて久し振りに日夫人を訪れた。(自分は夫日を敵視してゐたが、什う云ふものか其細君にはある不明瞭な一寸した同情に手傳はれた好意を持つてゐた。そして自分は日が毎日午後二時頃から後は自家に不在であることを知つてゐた。)自分には殊によるとSに逢へるかと云ふ豫想と、若し其望みが果されなかつたならば、せめて何か氣晴らしになる音樂でも聽いて來ることが出來るだらうと云ふやうな期待とがあつたのである。併し結局自分は此二つの望みの一つをも叶へることが出來ず、匆々夫人の家を辭し去つた。そして歸つて來ると再び極めてすつきりした氣分で溫愛の溢れた手紙を彼女

に書き送つた。此方がアフェクショネートと出ると先方もアフェクショネートに來るやうな氣がする。自分が怒つて彼女に對すれば、彼女も亦怒つて自分に應ずるやうな氣がする。それを當然のやうで變なものだと自分は感じた。そして此れからは能ふ限り穩かに、優しく彼女に向はう。すれば屹度いゝ報いがあると思つた。自分は希望に胸を擴げて手紙を女中に渡した。と、田舍者である其娘は、その上は書きを一目見て、他の女中達の顏を誘ふやうに顧みつゝ互に默笑を交はした。自分もそれを見て心の中に笑つた。

翌日は大風であつた。此日Sは例の「友達」の仲に交つて富士の裾野に行くことになつてゐたので、自分は此嵐では什うしたかしらと案じてゐた。

「——何しろ彼女が度々日と落ち合ふと云ふことは什う考えても此方の爲めに不利だ。處で人は普段離れてゐて、氣に向いた時丈け會ふと、互に得意な點ばかりを見せあつて氣持よく行くが、さて一緒に生活するとなると、其間には隨分自分と一致しない對手の醜さを發見する。だが對手の醜を發見するとは未だいゝが、自分の醜を對手に見られてゐることを

意識すると不快が強い。殊に兩人の間柄が親密なればなる程其不快は強い。平氣でゐられなくなる。しかし其醜を互に秘め隱し恥じる處に又一層の同情も湧き合ふ。其代り又お互の美點も更に發見することになる。さう云ふ場合は非常に喜ぶ。殊に二人の心持が同じ飛び切りのムードの中に抱き合ふ時、其喜びは極度に達する。二人は欠ぎの擾された瞬間が襲つて來る迄、恰かも極樂淨土にゐるやうな氣になる。結局プラス・マイナスのやうで、殊に夫婦になり度くてなれない同士の間では勿論プラスの方が勝つに定まつてゐる。」

恁んな風に自分は思つた。そして此二三日の間嵐が彌が上にも烈しく荒れ續けて、Sが日に一層近付く機會を妨げることを切に願つた。

すると午少し前にSから手紙が屆いた。

「十一月十三日

親愛なるNさん

妾は明日旅に出逵するに先だつて一筆貴方に書いておかうと思ひます。

先づ第一に簡單な人間と、シムプルトンとの間には大變な相違があります。妾はついぞ貴方をシムプルトンだ抔と呼んだ覺えはありません。又妾は貴方の單純を蔑むではゐません。河の譬へによつた貴方のお說には御同感です。しかしとう〳〵と流れる大河は樹の間をさら〳〵と流れる細流が感じるやうな幾多の優しく美しいものを知らずに過ぎ行くと貴方は思いませんか。素より細流は大河のすさまじい力を感じることが出來ないでしやう。しかし草の葉や、花や、小石に戲れて流れ行くことも決して何かでないことはありません。

一體貴方が妾にほんの小供に見へる理由と云ふのは、今貴方が此から通り過ぎやうとしてゐるあらゆる事を妾がもう既に通り拔けて來てゐるからです。——妾の心の臟は妾が貴方の中に釀もしてゐる苦痛の故に痛むことがなかつたでしやうか。妾は知らず識らずの中に貴方に爲した自分の「わるさ」の思いにおの〳〵かされて、一度ならず寢つかれぬ夜を明かしたことがなかつたでしやうか。しかし其爲めに怯むと云ふことは餘りに意氣地が無さ過ぎます。妾は矢張り勇敢に此苦痛を突き拔けなければなりません。("Hasn't my heart often

bled because of the pain I am causing you? Haven't I often spent a sleepless night terrified of the thought of the mischief I have done unconsciously to you? But it is weak to be frightened by it. I must go through with it bravely.—")

妾は又妾が貴方に嫁ぐべきものであると思つたこともありました。しかし貴方は勿論妾がそれを自ら進んでするのでなければ、そんなことは吾々二人の爲めに什んなにか不正なことであると思いませんか？實は妾、貴方の苦痛や悲しみを考えるの餘り、自分自身のそれをさへ忘れて仕舞ふやうなことも稀ではなかつたのですよ。貴方は此間の火曜（十一日）の晩、貴方が什んな心持でゐたかを妾が知らなかつたと思いますか？あの時妾隨分貴方に同情してゐたのですよ。そして妾はほんとに貴方の自制力に感心しました。

貴方は此れから先き未だいくらも通り拔けなければならない境遇を特つてゐます。そして妾は貴方が充分その苦闘に値ひするものであると云ふことを信じてゐる心積です。斯う云ふ風に闘ふことの出來る力と云ふものは決して誰にでも與へられてゐるものではありま

せん。（—"You have a lot to go through yet, I am sure you will be worthy of the struggle. It isn't given to everyone to have to fight thus—.") S」

自分は彼女からの此殆んど最初の手紙らしい手紙を讀んで初めは呆然として爲す處を知らなかつたが、やがて涙ぐみ、それから泣いた。自分の胸の中には恐ろしい絶望と、悲憤と、侮蔑と、火のやうな戀愛とが炎の波の如く交り狂つた。

併し自分は無爲にして徒らに苦痛の餌食となつてゐるとに堪えられなかつたので、愴惶何をと云ふはつきりした目當てもなく、ぶつつけにペンを取つて書き出した。

「本當に何處迄愛してゐるか分らない人よ。

何と云ふ物狂ほしい感情を抱いて私は貴女の初めての餘りに親切なお手紙を讀んだでしやう。だが私は餘りの胸苦しさに逆上せて譯が分らなくなりました。併し私は貴女に感謝してゐます。什うもほんとに有り難ふ。眞に貴女は私にとつて何たる恐ろしい威力を持つた人でしやう。私は勿論最初から貴女が決して冷酷な人ではないと云ふことを知つてゐま

したが、其事は今朝のお手紙によつて一層はつきりしたやうに感じました。……」

こんな風に書き出して自分は「貴方が妾にほんの小供に見へるのは云々」と云ふ彼女の文句に對して、教場で聽く講義は一つでも、それの役に立ち方は生徒の腦力に依つて一個〳〵々々異ふと云ふ例に據り、「經驗ではない。人間だ。外觀でなくして內容だ。」と云ふことの意味を今一度くどく說明した。そして更に自分が大河の譬へをとつたのは天才の息み難い統一的意志を徵象したものであることを繰り返し辯明した上、分析的で綜合的で、細緻で同時に單一な、優れた人間の微妙で且つ力强い神經を說いたりした。

「併し〳〵恁んな平凡な理窟を何遍くどく說明した處で、それが何の役に立つでしやう。私は無報酬な甲斐ない徒勞は御免だ。收穫なきことを知り乍ら徒らに種子を蒔き、土を耕す農夫が何處にゐるでしやう。言葉は事實を拔きにしては無一物だ。私は死に賭けて迄もあらゆる仕事を事實に持ち來たさなければならない。しかし貴女が私が未だいくらも今後に通過すべき境遇を持つてゐると仰有つたのは什う云ふ意味でした。それは貴女無くして

私一人で切り拔けなければならぬと云ふ意味だつたのですか？ いくらもとは貴女を除いたいくらもなのですか？ 噫、しかし什うして貴女なしに私は苦鬪に値する力を持つてゐましやう。それは餘りに意氣地なく、恥ずべき弱音かも知れません。しかし私はほんとに貴女を獲る爲めでなく何事をも爲すことが出來ないのです。私は貴女の居ないそんな千百のいくらもを想像するだに身の毛の慄立つ程心細がり、又呪咀する。私に惡い處があつたならばそれを遠慮なく知らせて下さい。私は死に物狂いでそれを直します。私に貴女の氣に喰はない缺點があつたならば、親切な貴女よ、何うぞそれを敎へて下さい。私は立ち處にそれを捻り潰して了いますから。私は貴女を滿足せしめむが爲めには如何なる難事をも歡喜に勇んで屹度成し遂げて御覽に入れます。それは實にお易い御用ですから。一體什うして私は貴女のお氣に入らないのでしやう。私から遠退く位ならば何故私を撲つて下さらないのです。蹴り飛ばして下さらないのです。あゝ堪らない〳〵。私を救つて下さい。私は滅茶苦茶になつて惱んでゐる。おゝわが愛する〳〵母よ。限りなき威力持つ人よ。燃え

るが如き握手を以て　　Nより。」

自分は此手紙を懷にして昂奮しきつて神田迄歩いた。そして何かSに送り物をしやうと本屋を漁つた擧句、英譯のビルコフのトルストイ傳を一冊買つて歸つて來た。それから自分は又切りに彼女に逢い度がつたが、Sは旅行中なので、止むなくストリンドベルヒの繪はがきを彼女に送つた。彼女が自分のとの爲めに、(如何なる意味にせよ)寢つかれぬ夜を明かして呉れたことを思ふと、自分は涙が出る程感謝の念に充ち溢れた。そんなことは何となく自分には僞のやうに身に餘つた勿體ない光榮としか思はれなかつた。

「確かに戀は人に新たな運命の信念を起こさせる。眞個くそれは人に苦しいライフの眞相に肉薄することを强ゐる。戀人の中に於てのみ人は始めて眞の異性の神秘を見出すことが出來る。此神秘に對する靈眼は戀をしない間、永久に眠つて閉じられてゐる。が、一旦それが開くと人生の姿が以前とは變つて眼に映じて來る。神が何故兩性を下し給ふたかと云ふ眞の理由も解つて來る。それは又人力以上な力の前に人間を持ち來たすことによつて、

其前に跪く秀美な敬虔の德を高慢な胸に誕生させる。更に其謙德を透して、今迄何處迄も自己を主體とした自力一天張な意識から脫して、人は盲目に運命の翼に乘つてゐる己れを感じる。其處で若し人が此運命の翼から墜ちて死滅することが怖ろしくある以上は、否でも應でも此貧弱な自己の意志や意識を以ては左右することの出來ない鳳翼に連れられる處迄連れられて行かねばならない。が、斯の如く盲目に運命の翼に何處とも知らず導かるゝが故に人は平生の自覺を以ては踏み入ることの能はない特別な天地に迷い込んで行くことも出來、そして其處に深い人生の景を目擊することも出來るのだ。だがそれ丈けに又其飛行は惡夢のやうに息苦しく、又恐ろしくもあるのだ。」

十五日の朝自分は日記に以上のやうなことを書いた。

「Sはあゝ云ふ女の人——否、特にSにのみ見出される美しい力、又力强い美の化身だ。それは俺の憬れる處のものだ。あの人に對する俺の感情、それは實に一種特別なものだ。人に對する普通の感情とは勿論全で違ふ。あの人が俺の求める對象となる爲めに特に生れて

來たのか、あの人を慕ふ爲めに俺が此世に生れて來たのか知らない。兎に角俺はあの人を思ふ時、恰度魔法にでもかゝつたかのやうに恍惚とした氣になつて、何となく只夢中になる。俺にとつてあらゆる喜びは直ちに彼の人の觀念と抱き合い、あらゆる哀しみも卽座に、あの人の影像の中に溶け込んで了ふ。ほんとに俺はあの人に溺れてゐるやうに、あの人に對する俺の戀にも溺れてゐる。それは痛ましくも苦しくもあるが、俺は妙に俺の戀迄が捨てられなく好きになつた。」

其先には又かう書いた。

自分は又彼女が自分に手紙で云つて寄來したやうなことが事實であるとすると、或はSとても自分に對してまんざら簡單な感情とは云へない、多少戀に近いものを懷いてゐるのではなからうか。が、彼女はうつかりそれを打ち開けると、容易に深入りする性質の自分が直ぐ途に乘つて結婚と云ふ問題に迄それを取り立てゝ騷ぐことを怖れて、何氣なき體に控へ隱してゐるのではなからうか。抔と勝手な推了を慰むで見ることもあつた。さうして

Sが自分を愛しなくてさへ、自分は斯く迄も彼女を戀い慕つてゐるのだから、萬一彼女が此方を愛するやうにでもなつたならば、自分は什んなに有頂天になつて彼女の愛に溺れることだらうなんぞと思つたりした。

「奴隷であることの屈辱に苦しみを味つたものでなければ、實は王の權威に眞の幸福を感ずることは出來ないに違いないと俺は思ふ。戀は人を何人よりも弱くすることによつて、又人を心底から强くする。」

と自分は日記に書いた。(此日自分は異常な感動を以てストリンドベルヒの「死の舞踏」を讀了した。)

翌日自分は久し振りで二十二枚許りの一寸した小品劇を一氣に書いた。新約聖書に材料を得たもので、其中には自然現在の自分がSに對して抱いてゐるやうな心持が書かれたことは云ふ迄もないが、自分は恁んな小品とは云へ、兎に角創作を試みたと云ふことが、一方時次第によつては矢張り書くことが出來ると云ふ自覺を得た點に於て少からず慰めを感

じはしたものゝ、又それがSに對して濟まないことのやうにも思はれた。自分には何か創作をし度い。そしてそれによつて僅かなりとも現在の苦痛と寂寥とを紛らし度いと云ふ欲望と、又それを彼女に對する不義であると咎める心とが屢々もつれ合ふのであつた。

十七日の朝、Sに大體左の手紙を書いた。

「戀人よ。

私は永いこと御無音に打ち過ぎた氣がします。私は此處二日ばかり我慢をしました。が、餘りの淋しさに私は又默つてゐられなくなりました。旅行は什うでした。貴女は何時もの快活な健康に於てお歸りでしたか。彼方は嘸ぞ寒かつたでしようね。そして貴女は私にとつては實に恐ろしかつた其間を彼地で面白く愉快にお暮らしでしたか。――「私の元山さん――どうか責めて手紙の中では「私の」と云つても怒らないで下さい。――は今頃あの男の伴れ合いと何をしてゐるだらう。饒舌つてゐるだらうか。笑つてゐるだらうか。仲のいい友達とお互に戯れの眼を投げ合つてゐるだらうか。踊つてゐるだらうか。互に腕を組み

合はせて散歩してゐるだらうか。今日は寒くて、天氣が惡い。だからあの人達は恐らく室の中に閉じ籠つて遊んでゐるだらう。それは一層危險だ。今は美しく靜かな秋の夕暮だ。あの連中は輝く湖畔に出て、歩み、謠い、巫山け、騷いでゐるだらう。そして美しい夕方と云ふものは兎角戀と親しいものだ。おゝ恐ろしいことだ。」恁んな笑ふべき想像が常に私の胸を不安にさせ續けでした。併し貴女が私の爲めに眠れぬ夜を明かして下さつた?ことを思ふと、私のこの打ち碎かれた悲しい胸も俄かに優しい感謝の情に一杯になります。そして私は自分に叫びます。しかし〳〵希望は未だ死なゝい。それを失ふな。人は安に絶望する權利を持つてゐない。忍耐强く進め。勇敢に進め。問題は未だ決定されてはゐない。「時」の到るを待ち、而して運命の愛を信ぜよ。未だいけない。しかしお前は遂には彼女を獲ることが出來るであらう!」と。

私が一旦それを追窮しやうと決心したものは、それを得る迄は私は諦めない。それに反抗することに無慈悲な興味を持たないで下さい。貴女は何もそんなことに迄興味を持たう

とせずとも、其他にいくらも氣の利いた興味を持つてお居でゝしやう。貴女が若し今私を捨てるならば、私は誓います。貴女は未來に於て屹度何時か「あゝ妾はNを愛してやるべきであつた。妾はあの男の妻になつてやるべきであつた。」と私かに思はれる時が來るでしやうと云ふことを。私はこれを笑ふべき自惚だとは思いません。——どうか愛を以て私を征服して下さい。私に乘りうつつて下さい。私は喜んで貴女に征服されます。かと云つて私は萬一貴女と一緒になつた時、貴女の手を携へて共に進むことが出來ない程弱い者ではありません。

「何人も若し眞率ならば、自らの救いの爲めに、再びダマスカスへの道を辿るであらう。各々の心靈を改革する旅行となるべき其道を。」と并クトル・ユーゴーは云つてゐます。貴女はどうか他でもない、貴女自身の榮へる爲めに私——と云ふと少し厚ましいが、兎に角貴女のいゝ巡禮の道連れの手を取りませんか。私は素より私のダマスカスへ巡禮しつゝあるものであります。何事も、高貴なる種族にとつて、此れより必然な、自由な、幸福な、又

名譽ある仕事はありません。昨日私はある雜誌の中で、露西亞のウスペンスキーと云ふ批評家の左の興味ある辭を發見しました。

「一般に何時でも凡てを失ふ用意ある人のみ、何物かを掴むことが出來る。人はあらゆるものを失い盡したと感じた瞬間にこそ、その失はれたるものよりも無限に貴いある新しいものを己れ自身の中に發見したのである。」

勿論私は此言葉を引くことによつて、貴女に私の爲めに凡てのものを擲つやうに抔と鐵面皮に要求することを意味したのではありません。が、此言葉はある意味に於て、貴女への戀の故に今迄の——凡てと行かない迄も——色々の自分を失つた私にも當て嵌まる事實です。兎に角人の一生には是非とも進歩する爲めに一大英斷を要する時機が早晩來るものだと私は思います。而して盲目な無決斷の故にあたら斯う云ふ機會を外したものは單に自然の意志を無にした許りでなく、永遠に人類の生存競爭に敗れたものであります。併し私は貴女をそんな無分別な人とも、又臆病過ぎた人とも思つてゐる譯ではないのです。では

又明晩。――」

――それは自分にとつて以前から一つの樂しい日暮しであつたが、此日も自分はSからの手紙を殘らず机の抽斗から取り出して、それを何遍となく接吻しては讀み返へしては又接吻した。

郊外に住むでゐるRと云ふ友を訪ねて、暮れ方彼と一緒に其處いら迄出掛けやうとすると、彼の細君が傘やトンビを彼に世話してゐた。Rは「何か買物はないかい？」抔と云ひ乍ら玄關に膝をついてゐる細君と親しげに顏を見合はせてゐた。自分よりも三つ年下の彼は此細君と二人きりで、下女一人使はず、まずしいわび住いをしてゐるのである。自分は此親しい友の境遇に同情と、ある羨みとを感じながら、暫くの間彼と無言の儘歩いた。

自分は便利な場所にあり、且つ電話や、取次の呼鈴の世話しく鳴り響く自分の家の喧騒を厭い、時には恐ろしく癇癪を起した。「靜かに默つて歩け！」かう云つて二階から往來の者

を呶鳴りつけてやり度いやうな氣が度々した。Sと共にゐる時、沈默を恐れる自分は、一人ゐる時、偏へに淨い靜寂を欲した。

十八

翌日の晩方、例もの時刻に自分が小暗いヌカルミの道を俯向きになつて歩きながら彼女の家に近づくと、恰度裏辻の曲り角の處で思ひがけなくも「アラッ。」と云ふ懷しい聲が聞こえた。驚いて前を見ると其處にSが立つてゐた。「しまつた。又逃げられるのか。」と思ひながら

「何處へ？」と訊ねると

「一寸電話をかけに。待つて、頂戴ね。直き歸つて來ますから。」

かうSは慣れ〳〵しく答へた。さう云はれて見ると彼女は帽子も被らずに普段着の上に

例の紫の羽織迄被こゐた。

「さうお？」

と自分は薄闇の中に仄白く見へる彼女の顔を慌てた眼で睜めながら云つた。Sは再び闇の中に消えて行つた。「なんと云ふ善い人だらう。」かう思い乍ら自分はSの家に上り、彼女の室に通つてお馴染みの肘掛椅子に腰を卸した。

一人煙草を喫かし乍ら暫く待つてゐると、やがて門の潜ぐり戸を開ける音がして、自分が安心の太息を吐く暇もなく「どうも失禮。」とSが入つて來た。

彼女は眞面目であつた。で、自分は取り敢ず彼女に棒げるべく提へて來た「トルストイ傳」を彼女の手に渡した。Sは自分がその扉に「謹呈S・M様。Y・Nより。」と書いた英字を迷惑相に氣にし乍ら見てゐたので

「そんなことを書いてはいけませんでしたか？」と自分は氣遣はし氣に訊ねた。

「いゝえ、ちつとも。」

と彼女は優しく答へた。自分は以前よりは一層Sの機嫌を損ねることに臆病になつたことを感じた。

彼女からはづまない旅行の話抔をちよい〳〵聞いたりしてゐると、「チリン〳〵。」と門の鈴が鳴つた。Sは眼に見へてギクリとした。そして矢庭に飛び上つて襖を開け、玄關に出て行つた。誰か男の西洋人が來て格子戸の處で彼女とひそ〳〵と談をしてゐるのが、コツコツと敷石をたゝく靴の踵の音に交つて幽かに聞こへた。自分は「又か。」と呟き乍ら卽座にHとBとを思つた。そして「何方かに違いない。これは厄介なことになつた。」かう思いつゝイラ〳〵と胸を躍らせてゐた。が、幸に男は上らうともせず、それなり暫くして歸つて行つた。

自分がホツと安心の太息を洩らしてゐると、「失禮。」と云ひ乍ら再びSが戻つて來た。見ると手に何か大きな本を一冊持つてゐた。

「誰です。」と訊くと

「なに。別に何でもないの。只此本を持つて來て呉れた許り。」と云い乍ら彼女は明りの下に起つた儘、其「活花」と云ふ英語の本を開いてゐた。

「たつた今出版になつた許りなの。」こんなことを云い乍ら彼女は中の挿繪に就いて頻りに獨り批評を口籠つたりしてゐた。自分は彼女が猶ほ少時くの間此本をいゝ餌にして、偏へにそれに氣を取られてゐるもの丶如くに自分の方を放つたらかしにして關はずにゐることに不服であつた。

「お。一寸お見せなさい。」

かう云つて自分は何氣ない體で其本を彼女の手から受け取るが早いか、それを「こんな邪魔物。」とでも云つた樣にポンと自分の後ろに放り遣つた。そして揶喩ふやうな臆病な微笑を以て眞向からジッとSを見た。

「まあひどい！」と彼女は笑つたが、最うそれなり此本を取つて來やうと起ち上りはしなかつた。

一寸話がなかつたので、自分は此間H夫人を訪ねた折のこと抔を持ち出した。

「一體何しに行つたの？」とSは少し興味を持つて尋ねた。

「勿論若しかすると貴女に何出來るかと思つてさ。だけど貴女が矢張り來なかつたのでつまらなかつた。」かう云つて自分は

「併し考へて見ると一寸切ないやうな變な氣はしたな。」と附け足した。

「どうして？」

「どうしてと云つたつて彼處は僕には恐ろしく思い出の深い處だからな。矢張り妙に懷かしい氣がしたと云ふのさ。」

と自分はいくらか顏を赭らめ乍ら微笑むで云つた。さうして俯し目になつてゐるSを打ち見やつては「あの人が卽ち此處にゐる此Sだつたのだな。」と不審氣に訝かり乍ら、忘れられない十月四日の彼女との最初の會見の樣をまざ〳〵と追憶に視てゐた。

「何か談しがあつて？」とSは訊いた。

「うむ」僕はあの人に未だ一度しか會つたことがなかつたのだが、此間行つたらイヤに以前からの親しい知合でゞもあるかのやうに、僕に慣れ〳〵しく妙なことを云い出したつけ。何故こんなことを此僕に云ふのか知らんと僕は思つたよ。尤も其時はもう僕の姪抔は歸つて了つて、僕丈けが一人後に殘つてゐたのだつたが。――」彼女の忌諱に觸れることを怖れてゐた自分はおづ〳〵こんな串戲を云い出した。

「へえ。なんて？」と彼女は正氣な興味を以て訊ねた。

「えらく不平をこぼしてゐたつけ。僕も細君に同情した。」

Sは愈々乘り氣になつた。で、自分は濟ましてゐたが、内心一寸心配でもあり、馬鹿らしくもあり、可笑しくもあつた。

「何のことを？」

「無論夫のことをさ。」

「あゝさう。なんて？」と、流石にSも氣取つて來たらしかつた。

「貴女と什うも仲が好過ぎて困るつてさ！」と自分は大きな聲で云い放つて鋭く笑つた。

「まあ、ヒドイ人。貴方も。」と彼女も安心したやうに笑つて云つた。

「貴女は割りに正直ですね。」かう自分は心の中で彼女に云つた。

暫く二人は沈默した。

「一寸お願があるの。」やがてSはかう云い出した。自分は不安な好奇心を以て耳を傾けた。

「妾は土地が變るとどうしても眠れない性質なの。」

「又始まつたな。」

「ですから旅行中は恰んどずつと眠れなかつたんでしよ。それに昨夜遲く歸つて來ると、又落付かずによく眠れなかつたの。」

「だから歸れか。」

「それに少し風邪も惹いてゐるの。それは眞個くほんと。」

かう云つてSはその風邪氣を證明する爲めに眞面目臭つて二三遍ゴホン〳〵と輕い咳を

して見せた。自分はそれが可愛らしかつたのでつい噴き出した。
「何が可笑しいの？」
「いや別に何でもない。兎に角早く歸れと云ふんですね。」
「え、、今夜はどうか早く切り上げて頂戴な。其代り木曜の晩、つまり明後日の晩ね、もつと早く來て遲く迄ゐさせて上げますから。」
自分はいがらつぽい咳をした。彼女は此咳の心持をよく飲み込んでゐる。
「ね。い、でしよ。」
「い、にも惡いにも貴女の命令と云へば從ふより仕方があるまい。併しそれにしてもまだ少しはい、だらう。たつた今來たばつかりなのだからな。」
「一體今何時なの？」
と彼女は圓い眼をして訊ねた。自分は隱しから時計を取り出して見た。と、彼女は自分が僞を吐くと思つたので、機嫌よく笑い乍ら自分の背後へ飛んで來て、「さ。妾にもお見せ

なさい。」と自分の一方の腕をシツカリ押へた儘背中越しに時計を覗き込んだ。自分は彼女にこんなことをされると、もうすつかり逆上せて來て、胸に熱い慟悸を感じたが、それと同時に灰色をした自分の穢ない時計を彼女に見られることに氣がひけもするのであつた。時間はカツキリ八時であつた。
「此時計は十分進んでゐるんだ。」
と自分は赤面した顏に微笑を湛えながら、おづ〳〵彼女の方に體を捩じ向けた。自分の額は彼女の圓い、すべ〳〵した頸と擦れ〴〵になつてゐた。が、自分はそれを觸れさせる勇氣はなかつた。
「い、え。合つてるのよ。「セキ」今何時だい？」
自分は彼女が襖越しに急に大きな好い聲でかう訊ねる息を額の上に感じた。
「八時三分過ぎで厶います。」と隣りで答へた。
「あの時計少し遲れてるの。でも後まあ十五分位は許してあげてもい、わ。」

「さうお？はい〳〵。」

で、彼女はとう〳〵自分を離して前の座に戻つた。

と、此時門の塀を小供か何かゞコツ〳〵と棒の先らしいもので叩き乍ら通つて行つた。

「はゝあ先刻の男が塀の外で待ちくたびれてゐて、君に會圖をしてゐるな。早く僕を追い返へして了へと。」自分が鹿爪らしくかう云ふと、Sは可愛く笑い出した。

「えゝ。だからもう上つてもいゝつて云つて來て頂戴よ。」Sはかう云つた。しかし自分はもう餘り巫山戯て許りゐることに不快を感じて來た。で、自分は云つた。

「木曜には來ます。しかし晩よりも出來ることなら午過ぎにでも會い度いがな。」

「何しに？」

「一緒に歩き乍ら談すのさ。」

「それはいや。」

「ふむ。他の男ならいゝんでしやう。HとかBのやうな。」

「つまり誰か他にもう一人でも連れがゐればいゝんですよ。貴方と二人きりぢやいや。」

「僕と二人で出歩いて人から疑はれてはいゝ面汚しだらう。」

「いゝえ。さうぢやないの。ですけど妾キツとうんざり(bored)しますもの。」

「何、僕が貴女をうんざりさせるんだつて？」

「えゝ、貴方は屹度一つこと許り饒舌つて妾を退屈させるに定まつてるわ。」

「だが三人で行くとすると……例へば林にでも一緒に來て貰ふとするとだね、三人の中誰かしら一人は屹度除け者扱いにされて、馬鹿を見ることになるぜ。で、今の塲合で云ふと、貴女は態と林にばかり談しをしかけて、僕を全で對手にしないに定まつてゐる。林も僕と談しするより君と談した方が面白いだらう。何しろ貴女は女だからな。それで僕が一人で馬鹿を見る。やきもきして腹を立てる。それに定まつてゐる。林だつて餘り氣の利いた名譽な役ではない。だから三人はいけない。一體僕は男の友達同士の間ですら三人集ることは好かないのだ。三人集る位なら十人集つた方が未だいくらかましだ。僕は餘程離れて氣樂にし

てゐられるからね。尤もこれで百人、千人となると又騒々しくつて不愉快だが。」
自分は恁んなことをボッ〳〵一人で饒舌つた。
「だから結局散歩は駄目ですよ。」
「しかしかうして家の中では會つてゐられるものを、外では會つてならぬと云ふ筈もないぢやないか。それに若し貴女があゝ云ふ例もの話が嫌だと云ふなら、何か他の文學の話か、又は人の噂でもしてゐればいゝだらう。僕は強いてあゝ云ふ苦しい談をせずとも、貴女と一緒に二人きりでゐさへすればそれで隨分滿足出來るんだからな。」
「そんなら何も出歩かずとも家の中で澤山ぢやありませんか。しかし貴方にそんな默つてゐるなんてことが出來るもんですか。それは請合い。」
「しかし僕は今夜未だ一度も例もの談しを持ち出しはしなかつた心算だがな。」
「えゝ、露骨にはね。ですがもう少したつて御覽なさい。貴方は又屹度始めるから。」
「ふむ。そりや素と〳〵貴女とはさう云ふ性質の間柄で始まつてゐるのだから無理もない

さ。殊に事件の經過が到つて面白くないのだからな。しかし貴女の方で何かそれを紛らすやうな話でも聞かして呉れれば、又いくらか違ふんだが、そんなことがないんだから猶ほ……」
「だつてそんな話をしたつて貴方は面白がりはしませんもの。」
「あゝ〳〵。さうかな。」と自分は遂に投げ出すやうに大きな聲で唸つた。
「さあ〳〵もうお歸りなさい。大變遲れちやつた。」かうSはすかさず急き立てゝ、
「歸らないともうこれから來させないからいゝ。」と微笑みながら自分を睨んだ。
「たつた今此處で貴女が寢て見せれば歸る。」自分がかう云ふと
「ほんとに貴方は小供ね。眞個く駄々つ子だわ。」
とSはあは〳〵笑つて「ぢや、寢ますから早くお歸りなさい。さあ左樣なら。」と手を差し出した。
自分は其手をひしと折れる程緊く握りしめて「左樣なら。」と呟いるやうに云つた。
「他の男だと貴女は些しも眠くはないんだがな。例へば……」自分が起ち乍らかう云いか

けると

「もう例へばなんて云はなくつてもよござんすよ。いいえ。今夜ばかりは誰が來たつて斷然追い返へすわ。妾ほんとに弱つてゐるんですもの。」と彼女は打ち消した。自分は靴を穿かうとしたが、

「あゝそれから一寸用がある。」

と云つて「なあによ。」と自分の側に寄つて來た彼女を滿身の勇氣を搾り出して輕く抑え乍ら其耳に

「別になんでもない。只僕は心から貴女を愛してるんだと云い度かつた迄なのさ。貴女矢張り僕が嫌い？」と甘へるやうに囁いた。

「そんなこと……知らない！」と彼女はつんとして自分を突つ放つた。

「よし〳〵歸らう〳〵。」自分はかう呟鳴つて慌てゝ帽子を冠り靴を穿いた。

「でも今夜は少し飽氣なかつたでしよ。」と後ろからSの揶揄ふ聲がした。

「うむ。飽氣なかつたさ。だがそれ丈け何時も程苦しまされずには濟んだ。」

と自分は敷石の上にSの方に向き直ほつて起ち上つた。

「ちやこれから何時もかうするわ。」

と機嫌よく云い乍らSはもう一遍上から自分に手を差し延べた。そして彼女と強く握手し乍ら自分が「此れから松子の處へでも寄つて見やうかと思ふ。」と云つたら「あゝそれがいゝわ。松子さんにどうぞ宜しく。」と云いおいて中へ入つた。

恁んな風に追い返へされた自分はそれから松子の家に廻つてピアノを聽き、其處に十時過迄ゐて自家に歸つた。自分は愈々Sが戀しくて戀しくてならなくなつた。「只Sだ、Sだ、それより他には何もない。」かう自分は幾度か胸の中に繰り返へして云つた。

「昨夜は失禮。毎度お眠むい處をお邪魔して本當に濟みません。ですが昨夜は何となく私には面白い晩でした。貴女と私との行きがゝりの上では到底面白いなんて云ふことは有り

得ない筈であるのに、矢張り其間にも偶まには面白いことも、甘つたるいとも爽まつては來るものだ。結局苦痛も單なる苦味ばかりを持つてゐないと私は感じました。併し思ふに私は段々貴女の前に臆病になつて來たやうな氣はします。ですが一體女々しい程甘やかされて育つた末つ子の私には小さい時から何處か女の兒の根性があります。何者か「母」――其「母」と云ふ意味は漠然としてゐるが――の懷に抱かれて、ちやほや甘やかされ、なぶられ、可愛がられつゝ駄々を捏ねて拗ね度がる根性です。その根性は較々永い間私の中に眠つてゐましたが、貴女にぶつかつてから又覺めて來たのです。

噫。(私はどうも貴女に對しては「噫」と云ひ度くなる。實際「あゝ」なのだから仕方がない。)貴女に調戯はれ、嬲られ、彈奏でられることは何と擽つ度い心地だらう。私は譬へて見ればその戀い慕ふ處の天女の手によつて彈奏られる時に云い知れぬ歡喜を覺へる樂器に似てゐる。私の上に彈いて下さい。彈いて下さい。貴女だけが眞に私の音を出すことが出來る。恐ろしく哀れな音だ。餘りに痛ましい濁音だ。私は實にその音を自ら聽くに堪えない

程だ。であるに拘はらず貴女に彈かれることは此上なく嬉しい。貴女の氷のやうに冷たい指の先に觸れられると私は怖ろしさと嬉しさとから顫へ上がつて自ら聲を出さずにはゐられない。實に妙だ。

私は貴女のこぼれるやうな笑ひを聞き、快よい微笑みを見ることを無上に愛する。だが貴女の顰めた眉間を見、胸の惱みを見ることは――貴女の前におびへきつてゐる私にとつては什んなに恐ろしく、又辛いことでしやう。貴女に嚙まれることはどんなに快く、又甘いことでしやう。それは確に千のゼヌスに口づけされることにも增した快感だ。厭な云ひ方ではありますが。

私はお芽出度い。しかし私のお芽出度さの中には何處か愛すべき處がありはしませんか。私は貴女の前に出ると、一方誰の前によりも臆病になると同時に、又誰の前に於てよりも妙にシンミリと打ち解けて、私の中の誰にも見せない數々のものをつい腹藏なくさらけ出して了ふやうになるのです。極端に硬く、又極端に無邪氣になるのです。どうか其邊をよ

く飲み込んで可愛がつて下さい。――明晩は上ります。什うか早く追い返へさないやうにお願ひします。私は復た誰かに邪魔されはしないかと今からそれが氣になります。では左様なら。」

これは十九日の朝から午頃迄かゝつてSに書き送つた手紙である。

滿洲にゐる兄から返事が來て、自分が兄に今度の事件を打ち開けたことを心から喜び、大に同情を寄せて來た。「一寸した出來心から果敢ない同情を釣ると雜作なく引つかゝつて來るが、大切な望みの品を獲やうと針を下ろすと、山程餌を垂れて見ても何一つ容易に引つ懸つては來ないものだ。」と自分は思つた。

（今の自分に犇々と思ひ當る節多かつた「ウェルテルの悲哀」を、永くかゝつた後、此日漸く深い感銘を以て讀み了へた。又切ない日暮しに窮する一方にも何かせずにはゐられないので、油繪具を買つて來て、下手な繪を一心に描いて慰むだりした。）

次の日の夕べ毎もの刻限にSを訪れた時、自分は先づ彼女の寫眞を貰へるか什うかを訊

ねて見た。が、彼女は西洋から歸つて來て以來未だ一度も撮つたことがない。で、今眞個く手許にない旨を自分に答へた。

「本當ですか。」かう自分が訊ねると

「えゝほんと。でもよし持つてゐたにした處で貴方には上げられない。」と彼女は一人言のやうに呟いた。

「さう。ぢや僕も要らない。」

かう自分はつゝんとして答へた。さうしてSは或は自分の顏に非常な自信がある譯でもないのか知らん抔と思つた。二人は沈默した。

「丁度一週間許り前から僕の處に實に思ひがけない妙な事が起つて來た。」

彼女と妥協し度がつてゐたと云ふよりも一層彼女の打ちくゝろいだ笑顏を見度がつてゐた自分は、又そろ〳〵こんな串戲を云ひ始めた。と

「なあに？」と案の如く彼女は愛らしい興味の眉を心持ち吊し上げた。

「ある物好きな女が僕に手紙を寄來したのだ。」
「それで？」
「要するに僕を戀した譯さ。」
「それから？」
「一日おき位には屹度長い手紙を寄來してゐたが、昨日突然僕の處に直か談判にやつて來たんだ。一寸驚いたよ。」
「へえ。それで？」
「何しろ結婚を申し込んで來たのだから、僕は當惑もし、又些しは好奇心も惹かれたが、色々談して見ると中々利口な、恰度君のやうに氣位の高い、善良な厭味のない、そしてノーブルな、つまり一口に云ふと比較的僕の趣味に合ふ奴さ。見た處も決して醜くゝはない。何方かと云ふと綺麗な方だ。」
かう如何にも串戲らしく云つて自分は一目Sの方を見たが、彼女は無關心でゐた故か、

存外此自分の戯れ言を眞に受けて聞いてゐるらしくも見えた。が、まさかに本氣に取つてゐる譯でもあるまいと思い乍ら、自分は彼女のすゝまない追究に應じて猶ほ少し氣のない調子で續けた。
「其處で僕は斯ふ云ふ女が僕のやうな奴の處にこんなにして慕つて來る裏の動機を一通り穿鑿して見た後で、兎に角かう答へてやつたのだ。君がもう二ヶ月前に僕に交渉して來たならば僕は恐らく君を迎へたらう。しかし今は生憎僕に戀人がある。其戀は殆んど絶望なのだ。が、それでも僕は矢張り其女に精根を捧げて附き纏つてゐる。戀は理屈とは別物だからね。何分そんな譯だから氣の毒でも君の要求は聞き屆ける譯には行かないとね。」
「おや〳〵。それから。」
「すると其女は重ねて自分を戀出來ないかと訊くから、出來ない、好意や同情は持つけれどもと僕は答へてやつた。では自分の望みは全然絶望だらうかと迫つて來たから、僕も一寸可哀相になつて、いや全然絶望とは云はない。先のことは分らない。君の「善良」に殊に

よると其中僕を引きつけることがないとも限らぬと云つてやつた。そしてそれにしても君の差し當りの障碍は其僕の「誰かしら」と云ふ戀人だ。だから其女と僕を奪い合つて見ろ。君は未だ僕を誘引する機會を持つてゐると煽てゝやつた。」

Sはもう餘り注意して耳を傾けてはゐなかつた。で、元と〳〵其程巫山戯度い氣もなかつた自分はもう餘程此邊で止めやうかと思つてゐた。が、彼女はもう一遍「それから?」と眠む相な顔付で可愛らしく訊ねたので

「それから其女はでは什んなことがあつても自分は是非其其「誰かしら」から僕を奪ひ取つて見せるやうなことを息捲いてゐたつけが、僕はでは又來週の月曜の午後七時半に來給へ。待つてゐるからと云つて其女を返へしてやつた。」

自分は根氣よく此處迄出鱈目を饒舌つて了つたが、Sの詰らな相な顔付きを見ると、もう愈々莫迦々々しく張合抜けがして來て、厭になつたので、俄かに他の活き〳〵した事實の方向へ話題を轉じやうとした。が、彼女は相不變「夜少しも眠れないのですもの。」と云

ふ口實の許に眠むい〳〵と云つては眼を擦り乍ら自分の話の腰を折つた。

「貴女と僕との關係は全で夜と合歡の葉との間柄だな。僕が來ると君は什うも眠むくなるものと見へるね。」自分は彼女の傍近くに椅子をすり寄せてかう云つた。

「失禮ですけど。それは本當に眠むいの。」

かう云ひ乍ら彼女は椅子の上に座つて、眼を閉じて圓くじつとしてゐた。自分は彼女の前に益々臆病になつてゐることを感じた。彼女を愛すれば愛するにつれて彼女に對する畏怖の念は愈々嵩まりその逆鱗に觸れることが此上なく怖ろしく、その和らいだ快活の狀が此上なく慕はしい。「此人を對手には如何なることがあらうとも迚も〳〵喧嘩は出來ない。そんな能力は俺にない。」かう自分は感じた。

「もう毎もの一つことは厭よ。何か新らしい、面白い話をして頂戴。」

自分が何か話を持ち出さうとすると、薄く眼を閉じたなりぐんなりと椅子の肱に靠れてゐる彼女はかう云つて豫防線を張つた。「ふむ。什うしてそんな他の面白い話が此俺に出來

やう。」と自分は胸の中に答へ乍ら、苦し氣な微笑を浮べつゝ恐るべきダルな沈默の中に彼女の姿を混沌の帷を透してじッと凝視めてゐた。

「こゝに俺のあらゆる發展を喰い盡さうとする可愛い鬼がゐる。」

こんなことを自分は自分に凝視されてゐることを意識し乍ら温かさうに懶い瞼を閉じてゐる彼女を見つゝ腹の中で云つた。

「いや併しそれ丈けでは違ふ。俺は實の處俺のあらゆる發展は愚か、俺の生命をさへ此可愛らしい鬼に喰い盡されやうとも憾みはないと感じてゐるではないか。だが尤もそれはそんなことがよもや實際には有り得ないことを俺は信じきつてゐるので考えるのかも知れぬ。」

かう思つた時、自分はふとグルベーの「微睡むでゐる女」"La Femme endormie." と云ふ繪を頭の中に見てゐた。と、彼女は繪の中にぼうつと眼を睜開いて自分に微笑むだ。

「未だ眠むござんすか？眠む度けりやお寢みなさい。僕は關はないから。」かう云つて自分は少し云い過ぎたと思つてゐると

「でも矢張りかうしてちや眠られないわね。」と彼女は上體を搖りおこした。少時く快よい沈默が來た。

「貴女は僕が始めの頃からすると些し意氣地がなくなつたとは思はない？」

「いゝえ。」と彼女は頭髮をいじつた。

「僕はすつかり駄目になつた。だがそれでもいゝ。」

「つまり貴方は妾に失望し、妾は貴方に失望しかけて來たんだわ。」

「何？」と自分は彼女の此言葉を串戲にとつていゝのか、それとも少しは眞に受けていゝのかに迷い乍ら彼女の笑顏を凝と見た。

「分らないけど何と云ふことなしに……の」彼女は未だ手を頭髮から離さずに云つた。

「それは只貴女が僕に飽きて來たと云ふ丈けだ。」

不快な沈默が襲つて來た。

「其女の年は幾才？」

「だけども吾々の間では空々しい雑談は却つて馬鹿氣た不快を招くことになる。どうせお互に心の宿を意識し拔いてゐるのだからな。吾々二人の間ではよし面白くなくとも矢張り吾々の元來の關係にふさはしい談をして行くより外に仕樣がなさ相だ。それは苦しいけれども。」自分はかう云つた。

「そんなら妾は何時迄たつたつて一つ答へしか出來ない。貴方だつて一つことしか云へないんでしよう。だからそれは厭。」

「まあさう頭ごなしに云ふのは止し給へ。だが僕はこれで今迄も隨分一つことのやうだが、貴女には色々な爲めになることを供給し、そして貴女を彌が上にも幸福にしやうと眼醒ますことに努めて來た心算だ。尤もそれも根に何れ利己的な分子を持つてゐたには違いないが、しかし貴女は什うしてさう分らないんだらう。」自分はとう〳〵かう苛立つた。すると彼女は

「そんなら何故貴方は自分よりもずつと程度の低い、分らずやの妾の處へなんぞ附き纏つ

此思いがけない質問は、彼女が不快の後に來る自分の怒りを紛らさうとしてのものゝやうにも見へたが、事實はさうでないことが彼女の顏付で讀めた。で自分は驚いた。そして心配して遽だしく云つた。

「勿論あれは串戲さ。あんな分りきつた串戲が貴女に分らなかつたの？」

「まさか貴方からあんな長たらしい串戲を聞かうとは思はなかつた。」

「僕も串戲は大嫌いさ。だが貴女が何だか怖わかつたので、あれでも僕としては苦しい世辭の心積だ。僕はそれ位に迄墮落して了つてゐるんだ。しかし惡かつたら謝る。」

「ふむ。」とSは不快相な冷笑を漏らした。其冷笑は自分の惡戲よりも、彼女自身が自分から悟りが鈍く思はれることを憤つての冷笑であつた。で、二人の間に危く保たれてゐた快よい調和はこれでカナリ擾されて了つた。

「何か變つた面白いお話をなさいよ。」かう彼女は沈默の不快を避けにと云ふよりも、小さなことに對する無頓着を示しに自分の方から促して來た。

て來るんですよ。」と紅潮を顏にさゝして怒つた。自分もつい眞赤になつて面喰い乍ら云つた。
「そんなことを云ふから貴女には私の心持が分つてゐないと云ふんだ。僕の貴女に上げる手紙は何時も貴女に對する心からの讃美の辭で埋まつてゐるぢやありませんか。」
二人は俯向いたなり默つた。
「ほんとにライフこそ淋しいものね。」
暫くして彼女はかう心から感じてのもの〻如く嘆息の間から云つた。自分は情けなくなつた。が、くしや〳〵した頭を無理に落付けて云つた。
「うむ。さうかも知れぬ。僕も淋しいには實に淋しい。だが其淋しさに絶えず打ち克たうと奮鬪して行くのがライフだと云ふ方が更に眞實に近いかも知れない。少くも吾々の樣な人間にとつてはだ。——が、兎に角淋しさにも矢張り强者の深い淋しさと、弱者のつまらない淋しさとの區別があることは當然だ。」
「でもいくらそれに打ち克たうと努力したつて結句淋しいことは同じだわ。」

「では君は努力したことがあると云ふのだね。——うむ。それはあるにはあるだらう。」
「大變貴方は妾を見下げてゐるのね。でも貴方は妾の境遇が什んなだつたかと云ふことを全で知つてやしないぢやありませんか。」
「いや、決して見下げてなんぞゐやしないさ。だが只人は無暗に物事を締めて、早く愚痴をこぼす權利を持つてゐないと云ふことを僕は云ひ度いのだ。」
かう云つて自分は更に座を彼女の前に進ませ、そしてその手を取り乍ら二人の額と額とがくつつく位にして語り續けた。
「一體貴女は世間普通の女なんぞからすると遙かに野心家だ。何故なれば野心家であつて い〻資格を素質に與へられてゐるから。そして其野心は僕抔にも先天的に隨分ある氣がするが、寧ろ男女の差別なく持つてゐて矜りになるものであるし、又其あるが爲めに僕は一層貴女が好きでもあるんだ。處が貴女の場合ではその大切な野心が今妙に——實は妙にではないのかも知れぬが——コジレてゐる。つまり其生れ乍らの美しい野心の上に貴女の過

去の境遇と、悪い經驗とが知らず〳〵厄介な殼を被せて了つたのだ。其殼と云ふ奴は奔流のやうに絶えず生長して行く人間を囚へることが出來ない代りに、靜止してゐるもの丶上にはドン〳〵厚くなつて行くものなんだ。で、今となつて見るともう貴女一人の力では容易にそれが破れないばかりでなく、それと自分の眞身との境がはつきり感ぜられない程其れに麻痺しかけてゐるのだ。」

「え丶妾にはもう其野心がない。これで少しはあつたんだけれどもなくなつて了つた。」

Sは獨り言のやうにかう云つた。

「だがそれは一寸考えるより實はもつと恐ろしいことだぜ。處がそれを恐ろしいと思はせなくするのが殼の恐ろしい處だ。兎に角吾々の前途には未だ何十年と云ふ未來が控へてゐるのだからね。僕達のライフは殆んど之から始まると云つてい丶程のものだ。それなのに最早今迄の貧弱な過去に征服されて了つて、ぐじ〳〵してゐては餘んまり情けないと云ふものだ。――又川に譬へて見るに、強い幸福な人間は恰かも急流に乘つたやうにどん〳〵

苦しい不幸を押し流して海迄行くのに、君は恰度小さな淀みに引つか丶つて其中をぐるぐる廻つてゐる木の葉に似てゐる。木の葉は流れてゐる心算でゐるが、實は一つ處に小さく輪を描いてゐるに過ぎないのだ。其癖側をどん〳〵流れて行くものを馬鹿だとか、簡單だとか云つて嘲笑ふことだけはする。而も實は貴女は木の葉のやうな憐れなものと異つて、一旦流れ出れば海迄も行ける高い天命を素質に持つてゐる人だ。それにも拘はらず本物の木の葉のやうに何時迄も其淀みに引つか丶つてゐると云ふのは餘まり不幸が克ち過ぎてゐる。そんなことをしてぐず〳〵してゐる間には、縱令木の葉でなくとも大抵なものは朽ち果て丶仕舞ふぜ。」

「だけども一體そんなことを貴方が妾に向つて今更要求するのは當を得てゐるでしやうか。」

默つて聞いてゐたSは眞面目とも皮肉とも付かぬ調子で突然かう云つた。

「え、何だつて？」と自分は驚いて云つた。「こんなことを貴女と云ふ人間を捕まへて云つた處で始まらないと貴女は云ふのか。」

「え、恐らく。妾は貴方が思つてゐるよりかもずつと意氣地もなければ深みもない人間なんですもの」とSは淡く笑ひ乍ら云つた。

「何だ。貴女が以前に云つた辭と大變矛盾して來ましたね。だがそんなことは何方にしたこと處で關はない。女は格別強くなるにも、深くなるにも及ばない。何となれば少くも戀人である女は男にとつては其自身元來恐ろしく強いものであり、深いものであり、又高いものであるからだ。一體強くなる、深くなると云ふことは男丈けの自然に命ぜられた任務だ。男は深くならなければ深くないんだ。だが女は深くならずにも深くあるんだ。」

「貴方の云ふことも隨分ごちや〳〵だわ。でも貴方はさう云ふ風に自分一人で勝手に妾を強いものにして、そして本當の強い男にでも要求すべきことを妾に要求してるんだわ。」

「さうかも知れぬ。僕は隨分君に眼が眩んでゐるからな。だが君が強くなければ強くないでもいゝ。どうせ僕にとつては同じことなのだから。」

「それで？」

「それでつまり僕と一緒に船に乘り給へと云ふのだ。」

「船に乘つて何處へ行くの。」

「何處でもいゝさ。兎に角さうすれば貴女は幸福な海に出られるんだ。」

と自分も幾分串戲を意識することを強いられて云つた。Sは微かに笑つたが急に何か思ひ出した樣に

「あゝあ。妾もほんとに何うかしなくつちや。」と自分の問題を其方退けにしたやうに云ひ放つたが、それなり伸びをし乍ら欠伸をした。

「だけども妾實際もう何にもする氣がなくなつちやつた。」彼女は又ぐんなり椅子に凭れ乍らかう云つた。

「だが假りに貴女が一ケ月前に生れたとして、そして一足飛びに今の貴女に達したとすれば、貴女はもつとグイ〳〵積局的に進んで發展しやう、幸福を獲やうと努力するに違いないのだ。處が生憎實際の貴女には今迄の惡い過去が惡魔のやうに執拗に祟つてゐるのだ。」

「だつて妾が毎も善い欲望を伸ばさうとすると屹度禁じられるし、欲望のないことは無理にもしろと云はれた。それや誰だつてさうなんでしやうけれども、妾はほんとに自分を活かしやうがなかつた。」

「ふむ。貴女にも似合はない弱音を吐くな。だが少くとも今では貴女はもう大抵そんな壓制者を拂い退けて、自由な身になつてゐるぢやありませんか。だからこれからどん〳〵勝手なことをして、自分にピツタリ適合するやうな善い理想的な境遇を自分で生むやうにして行けばいゝぢやありませんか。」

「處がもう今になつて見ると其欲望も枯れ死んで了つたんですもの。」

「だから貴女は何もそれを自力でやる必要は些しもないと云ふんだ。男と違ふから自力でやらなかつた處で決して辱にはならない處か、それは却つて賢い自然なやり方だ。まさか貴女だつて今の儘でくたばつて了ふ氣もあるまい。さうでしよ？」

「だけど妾矢張り結婚はしさうもない氣がするの。さう決めた譯ぢやないけれど。」

「結婚をしずに一生獨りで自由に飛び歩いて暮す方が呑氣で利口か。」

「そりや女にとつて結婚をしないと云ふことは確かに不幸なことですよ。でもそれも不幸な結婚よりは未だ増し。」

「だが幸福な結婚に超したことはあるまい。」

「さう。只そんな幸福な結婚の對手になる男が妾にはゐない丈けのこと。」

「だがHと出來ればいゝだらう。」

「へ。どうですか。」と彼女は不興氣に横を向き乍ら冷笑したが

「兎に角妾にはもう何の男も大抵ならし一樣に見へるの。」

と附け足した。間抜けな自分は此Sの辭を彼女が自分の自惚を揶揄ふ心算で云つたやうには取らなかつた。そして

「うむ。さう見やうとしてゐるらしいね。貴女のやうに自暴になつて來てゐると、そんな風にでも見てゐなければならないんだらう。しかしさう云ふ傾向を自分に許すことは何と

云つてもいけないよ。僕は貴女が串戯にもそんなことを云ふと本當に情けない氣がする。」
かう云つて自分は思はず赤面してチラとSの方を見たが、彼女はじつとこゞんだなり默つてゐたので自分は更に續けた。
「一體貴女は僕が日の家で始めて貴女に逢つて、それなり貴女への戀に陷つたことを不思議には思はない？」
「ちつとも不思議なことには思はないわ。只當り前の機會ぢやありませんか。」
「うむ。チャンスとして現はれた。しかし其チャンスを司つてゐるものが何かしら後ろにゐると僕は思ふよ。其チャンスを吾々の上に下したものがだ。だが貴女は僕を戀してゐないから僕の場合を單なるチャンス位に輕く見ることは貴女としては又當然かも知れない。」
「貴方は割りに迷信家ね。」
「なあに別に迷信家と云ふのでもないが、兎に角凡て考えることのない人間にはあらゆる不思議が極く當り前なことにしか見えないものだ。僕にとつては殊に今度のことなんぞ不

思議だらけだ。それが又不思議な癖に當り前な必然として現はれて來るから猶ほのこと不思議になつて來るんだ。」
二人は猶ほ色々の談を交はした。ある時は激昂して。ある時は比較的落付いて。しかし素より二人の中多く語るものが自分であつた以上に、熱するものも殆んど自分のみであつた。自分は日本の現在の地位と時機とに就いて語り、又自己の未來に對する所信をも語つた上、更に興奮した恐怖を以て彼女の自分に對する感情の近況をも訊ねて見ることを敢てした。が、それは依然として訊く丈け無駄であつた。で、自分は例の如く苦しむだ。しかし苦しむ中にも自分は一方Sからの辛らい拒否に對して、自分が何時となく少しは慣れて來たかの如く、――と云ふのはその辛らい宣告から受ける毎度の恐ろしい苦痛に對して、自分の剃刀のやうに鋭敏になつてゐる恐怖の神經が、素速く用心深い豫防線を最早本能的に張つて了ふので、其蜘蛛の巣のやうに纖弱い豫防線は到底怒濤のやうに駛入して來る苦痛の潮を遮ぎることが出來ないにもせよ、猶ほいくらかは警戒の用にも立つて、一寸した

刺戟位は什うにかかうにか自分の中の何處かに收まらして了ふ。そして彌が上にも苦しみを避けることにそれとなく努力するので――稍々無神經にもなりかけて來つゝあることを感じた。で、自分は又毎ものやうに彼女から再促されて、次の週の火曜日に來ることを約した後、玄關の處で

「まあよく考えておき給へ。人間にはいくら考えても、考え過ぎると云ふことは出來ないのだから。考えは何時でも不足だと思つてゐれば間違いない。何と云つたつて貴女は未だ僕よりも猶ほ若い人だ。吾々にとつて「時」は過去でもなければ現在でもない。只未來ばかりだ。だから希望を失つちやいけない。飽く迄もライフに執着して行かなくつちや……。」

かう云つた。

「有り難ふ。考えては見ましやう。」と蒼褪めた彼女は異樣な調子で俯向き乍ら答へた。自分は二度熱い握手をして彼女の許を去つた。

これは愈々絶望だと自分は感じた。そして今となつては最う只彼女の中に覺束ない希望

の火を焚きつけることのみが自分の持ち得る微かな希望だと思つた。しかしそれとても殆んど糠に釘であることは分つてゐる。「併し糠と知りつゝも飽く迄釘を打ち込まずにはゐられない處に已み難い戀の盲目がある。意地惡い運命の諧謔がある。あゝ吾々は什うせ運命と云ふ暴君の奴隷だ。運命に反抗を企てることからが既う所詮運命の意志なのだから仕方がない。然うだ。俺はSの奴隷でもなければ、又戀の奴隷でもない。只運命の絶對的無力の奴隷に過ぎないのだ。運命の奴隷であるが故に俺はSを戀しもし、又其殘忍な戀に白痴の如く惑溺してもゐるのだ。かくして哀れむべき俺は何處迄落ち延びて行くとか。」かう自分は闇の中に獨り自らに言つた。

十一時過ぎ見るかげもなく悄然としてSから歸つて見ると前田から端書が屆いてゐた。それには彼が復た新らしい自信のある脚本を作つた旨が書いてあつた。自分は一人淋しく深夜の机に凭り乍ら悚へられなく不安になり、涙ぐむ程焦立つて來た。「あゝ馬鹿だ〳〵。こんなにしてはゐられない。周圍は遠慮なくずん〳〵生長し、「時」は會釋なくどん〳〵過

ぎて行く。あゝしかしどうしたらいゝのか。俺には今迚も仕事は出來ない。だがその中果して出來る時が來るだらうか。萬事が破滅に畢るやうなことになりはしないだらうか。えゝ。畜生！」自分は物狂ほしく苦しみ乍ら室の中を歩き廻つた。そして前田には此返事を出すまいと決心した。

十九

翌日の朝は霧が立ち罩めて朦朧とした天氣であつた。其故か自分の頭も妙にどんよりと霞んで、前夜の恐ろしい不安も淡くぼんやりとしてゐた。自分はSに對する近頃の自分の心持を熟々考へて見た。そして彼女に對しては苦しみは依然として變らないが、不滿と云ふよりも、もう一方恐ろしく憐憫の情が自分の中に嵩じて來たことを感じた。彼女を下から高く見上げると同時に、愍みの眼を以て上から見下ろすやうにもなつて來つゝあることを感じた。Sは要するに美しい善人である。愛すべき女である。何處迄愛するも愛し足りない懐しい乙女である。そして其前途はと云ふと、底知れぬ闇の溪に向つてゐる。自分は盲目だ。併しその盲目には未だその盲目たることによつて、何時かは睿智の眼を明かに見開き得ると云ふ確信がないでもない。迷ふことは免れ難い自らの命數としても、何れ末には如何なる遠い迷行からも正しい本道に立ち歸つて、就くべき處に就かずには措かない。又就き得ると云ふ信仰がある。然るにSの盲目はそれとは違つて、永劫の盲目である。果てしない闇である。救はれない沈淪である。で、自分は年老い、窶れ、金襴を飾つた不信實な凡俗共の間に圍まれ乍ら、死に望む彼女の運命を想像し、可哀さの餘りに涙ぐみ、そして長いこと咽び泣いた。わが身の爲めには嘗て容易に涙することのなかつた自分も、戀人の運命の爲めには泣かずにはゐられなくなつた。生ける他人の運命の爲めに心から涙を濺ぐと云ふことは自分にとつて之れが最初の經驗であつた。が、その涙は漠然と苦しい涙だ。何故苦しいかと云ふに素よりそれが自分にも關係してゐるからだ。結局實はその中に自他の

區別はつけられない。彼女の不運の爲めに泣くのか、それとも自己の不幸の故に歎くのか分らぬ。兎に角ある混沌とした一つの大きな不幸の苦痛が何と云ふことなしに自分を壓し泣かせるのである。自分にとつて二人の凡ては一つである。それは利己的のものゝやうで、實は利己以上の大執着である。盲目の火である。愛である。と自分は思つた。「あゝ不幸な彼女を救ふのは什うしても自分より外にはない。自分は縱令此身を粉にしても愛する彼女を「闇」と「死」から救つてやることに十二分の歡喜と滿足とを感ずる。自分は什うしてもさうしなければならぬ。」かう思ふと傷ついた自分の胸の中にもヘラクレスのやうな力が何處ともなく湧き上つた。「おゝSよ。薊のやうに可愛いゝSよ。この俺に賴れ。俺の腕は細くとも君の爲めにはアヒレスの腕だ。俺の胸は薄くとも君を守る爲めにはサムソンの胸だ。俺は君を愛するの餘り君を憐れむ。君が餘りに可愛いので、俺は君の現在の境遇に不滿になり、そして君が可哀相でならないのだ。俺は何うしても君を救はずにはゐられない！」かう自分は心の中に叫んだ。

「Sと自分との間に於て最も大いなる懸隔をなす點は敬虔の念に就いてだと思ふ。自分にはある一種信仰的な觀念とも云はるゝものが兎角思想の裏に附き纏い、彼女にはさう云ふものが全くない。それが二人をどうも隔てる。

自分はリアリストだと云へる。が、マティリアリストではない。處で彼女は餘りにマティリアリストなので、彼女の前に出ると、自分のやうなものが恰かもアイディアリストであるかのやうに見へて了ふ。だが凡てそんなことは二人の間に因緣さへ結び付けられてあれば、極く小さな何でもないことになるのだが。」

かう日記に書いた。

二十二日の朝から午後三時過迄かゝつてSに十頁ばかりのギッシリした手紙を書いた。自分は先づ「此手紙はちつと長いが辛棒して終り迄讀んで下さい。」と云ふ斷り書きを以て左の樣に書き出した。

「――私は貴女に上げる自分の數々の手紙を貴女から餘りぞんざいに讀んで貰つてはちつ

と情けない。私が如何に不作法なことを不充分な云い現はし方で書いたにせよ、それは凡て貴女に對する私の最も信實なる情火と思考との縱斷面であつたことを貴女は認めて下さるでしやう。私は相變らず吾々の運命、殊に貴女の運命に就いての同情ある思索に切ない日を送つてゐます。私が貴女の運命に就いて、又未來に就いて、かれこれ自分の考えを披見する時、貴女は素氣なく仰有るでしやう。「どうか關はないでお呉れ、お前が妾に忠告する位のことなら妾が疾ふの昔に自分で感付いてゐるのだから。又妾が敢へて自分で觸れやうとしない處には他人からもそつとしておいて貰い度いから。それにお前の云ふことはもう何もかも公平を失してゐる。お前がいくら妾の爲を思つてしてゐる心算のことでも、それは要するにお前が無意識的にお前自身の爲を計つて企てた都合のいゝ計畫に過ぎないのだから。そしてお前と妾とは全然別な人間なのだ――」と。さうかも知れません。しかし貴女は返へすゞゝも私に對して自分の耳を塞ぐ權利を持つてゐても、私の口を塞ぐ權利を迄は持つて居られない。又私は貴女に對して元から薄弱であつた自信が愈々零に近くなりましたが、

若し貴女に私――貴女を女王のやうに、又母のやうに、崇め奉つてゐる憐れな私――の赤誠なる本心の告白を容れる丈けの慈け深い度量がおありでしたならば、縱令私が今更新らしい奮發力を感じて如何にくどく熱心に貴女に肉薄しやうともそれは最う只甲斐ない繰り返へしに過ぎないにせよ、その烏許がましい意見も實は貴女にとつて結局何かにならないことはあるまいと私は信じます。もしそれが全く無効に畢るものであつたならば、私はもう私の爲めではなく、寧ろ貴女の爲めに心から悲しみます。だが縱令それが貴女に什う云ふ風に受けられやうとも何の道噴く丈けのものを噴いて了はなければならないのが私の運だ。が、それにせよ、貴女も呪はれた殼(コンヴェンション)の中から一概に「又始まつた。」と許り云はずに、貴女の自由にして新鮮な赤裸の靈を以て辛棒して味い乍ら讀んで下さい。貴女は生れ乍らにして大海の魚の自由と、孔雀の尊嚴とを憧れてゐた。貴女の中にはエリザベス女王や、露西亞のカザリン二世や、ジャン・ダアクのやうな女の天賦がないでしやうか。最高なる意義に於ける女王的專横がないでしやうか。狹い猫の檻の中に投げ込まれた

牝獅子の抑えつけられた不服の閃きがないでしやうか。奔放な發展の欲望と、美しい力とに充ちて、貴女は牝獅子のやうな素質を享けて生れ、而も檻の中に投ぜられ、小猫同様に育てられた。貴女のあらゆる要求は排けられ、境遇は常に貴女の延ばさうとする枝を切斷する暴君であつた。貴女は常に脅かされてゐた。そして斯ふ云ふ風に哀れな貴女のあらゆる生長が頑冥な殼の中に禁固され續けてゐる年月の間に、その呪ふべき愚かな殼の細胞は何時となく貴女自身の中に溶け込み、そして次第に牢として拔くべからざるものになつて來た。以前の殼は今ではもう貴女の體にピッタリ密着した離し難い衣裳となり、當の貴女自らが何うかするとその咀はれたる衣服にそれと氣付かなくなる處迄行つて了つた。勿論貴女はそれに氣付かれない處ではなかつた。實は並外れて貴女がそれを苦にしたればこそ、貴女は又他の女よりも一層勇敢にそれをふるい落して、貴女の解放の爲めに美しく奮鬪したのだ。今でさへ貴女はそれを思ふ時冷や水をかけられた如く戰慄し、火の如く憤つて心の底で奮い起たれるのだ。が、恐ろしいのは「習慣」だ。「時間」だ。時間は貴女の頼りない

奮戰の根氣を遂には眩ます根氣を持つてゐる。貴女の根氣はよし周圍の根氣に克てやうとも、時間の根氣には克てない。それで貴女はその自分の殼との力戰をそろ〳〵莫迦らしく思つて來た。以前の氷のやうな戰慄や、火のやうな憤懣も、今では正直にぶつかる丈け面倒な「煩はしい幼稚」になつて來た。それが時間の勝利であつて、同時に貴女として別に恥辱でもない必然なのだ。だがさうかと云つてそれを欲する意志さへあれば充分牝獅子にもなり得る優秀な素質を以てゐ乍ら、徒らに習慣の暴威に屈服せられ、そして本物の猫の中に交つてそれで永久に滿足――でなくとも泣き寢入りに畢つて了ふやうなことがあつては餘りに情けない不自然な話ぢやありませんか。私は恁う云ふ私の不躾な辭が貴女にとつては避けてゐたい舊傷に觸れることになりはしないかと同情を以て恐れます。併し人の瘡を癒すものはその痛手に觸れる愛の勇氣がなければならない。私にとつて貴女の傷口に觸れることは實に私自身のそれに觸れるよりもずつと痛々しいことなのです。だが私は我慢强く吾々の爲めに云ふ。未だ若い美しい貴女は今も折々自分の勝氣な素質、あの先天的な美しい權

威を欲する欲望に内から呻やかれ、促されるとの煩はしい苦痛をまぎらす爲めに一つには
テニスや、活花や、舞踊や、旅行と云ふやうな社交を愛してゐる必要があるのだ。そして
妄りに自分を平凡だ、普通だと冗談のやうに喇つて、内心の不安と苛立ちとを茶化す必要
があるのだ。處で貴女が更に正直な自然の意志に促がされて己れを凡庸な猫と思ふ必要に
苛立つ時、貴女が淋しい沈靜を惡夢のやうにおじ怖れて、華やかな笑いと、賑やかな忘却と
の中に逃れやうと努めるとに不思議はない。卽ち少くも現在の貴女には不斷の麻睡劑が必
要なのだ。恐らく貴女がよく眠む度がるのは其故ではないでしやうか。が、本然の性は中々
そんな細工で眩まされるものでない處へ持つて來て、貴女の我儘が祟つて來た。元來貴女は
自信が强かつた。又貴女は强い自信を持つてゐていゝのみならず、貴女にとつて自尊は美
であつた。が、遠慮なく云ふと、私の見る處では貴女はその善い自信の用ゐ場所を誤つた。
見當を取り違へたと私には思へる。つまり貴女はそれを活かすべき處に向けずに、當然死
すべき處、又死んでも一向女として羞でない方向に向けた。そして其結果貴女は當然敗れ

た。すると積局的な貴女は一つには自暴の心からその自分の本領でない方面の失敗を以て
貴女全部の破壞と見て了つた。少くとも見て了ひ度くもなつた。而もその輕卒な絶望は專
横なる貴女の欲望（それはある意味に於て女王的征服欲とも云へやう）が燃えれば燃える
程、大きければ大きい丈け、悲慘なものになつて來ると同時に、貴女の本然の我儘と自信
とを通して妙にイコジな人生觀、浮ばれない、頑な、悲觀的哲學――コンヴェンションを產
み出した。それは貴女を締め殺すとも、永遠に活かすことのないものであるが、その禍な
る殼卽ち成心の中に、牢獄の中に、「妾は要するに凡庸な女だ。」と云ふ諦めの呪文を唱へつ
、永住することは、絶望者には一見樂な、自由な、外觀を供給する。そして貴女はその負
けぬ氣の爲めに、恰度年と共に堅牢になつて行く殼のやうな人生觀の中でむず〳〵し乍ら
自暴氣味な業を煮やしてゐる。いくら煮やすまいとしてもそれは無理だ。如何に快活な
忘却に逃れやうともそれは束の間の夢にしかならない。苦しい現實が犇々と遠慮なく貴
女に迫つて行く。つまり貴女が私に思ひ切つた上は手なとを云ふのも凡てそれが爲めであ

る。貴女にとつては勿論理性からよりも感情の上から、自分の小さな個人的經驗を大きな普遍的な經驗と押し立てずにはゐられないのだ。よしそれが弱いもの丶單純なる敗北であつても、自分の過去に強い權威を持たせずにはゐられないのだ。それは一方から云ふと無理もないことであるが、同時に貴女の爲めに福ともなるべき勝氣な性分が、今の有樣では却つて貴女に災してゐると云ふものです。だが凡てそんなことは單純なる誤謬から來てゐるのだ。使命に對する錯覺から來てゐるのだ。實際に於て貴女は未だ嘗て敗れたともなければ、又呪はれたこともないのだ。寧ろその失敗や、呪咀は一に貴女の誤謬の上に懸かつてゐるのだ。東に行くべき運命の者が、うつかり西に足を向けた爲めに詰らない障碍に迄躓躓いたからと云つて、その者は永遠に斃れた譯ではない。再び起き上つて東に踵を廻らせばそれでいゝのだ。少くとも貴女のやうな女はそれ丈けで立派に救はれるのだ。さうすれば凡ての外界が內界に適應して來る。今迄暗い禍であつたものが今度は悉く福となつて輝いて來る。男性の强者にとつては恰度發光體の周圍に光明が漲つてゐるやうに內界をして常に

あらゆる外界の創造者たらしめるのが運命であり、優秀なる女性にとつては斯の如き男性と運命を結びつける處に最高の使命がある。自然との美しい調和がある。一方から云ふと貴女のあらゆる過去の經驗と、それを通した現在の成心なり、境遇なりは凡て貴女として當然です。決して無理もないことです。そして私は貴女に衷心から炎えるが如き赤誠な同情を捧げます。併しまさか貴女は自分の慘めな經驗の豐富を以て徒らに誇る無知な頑固婆にならう抔とは夢にも望まれないでしやう。貴女は無論そんな分らずやではない。それに私は貴女が嘗て「妾は決して自分の考えを一つ處に固定させておき度くはありません。妾は始終自分の心を自由に開放し、そして妾が前に考えて居たことが間違つでゐたと確かに自ら信ずることが出來る時が來れば、何時でも其舊い考えを打ち捨て丶更に先へ進む用意を怠つてゐない心算です。」と手紙の中に仰有つたお辭をよく記憶し、且つそれを信じてゐるものであります。ですが私の恐れるのは貴女がその間違つた舊を捨て丶正しい新に就くことにすら無精を感じられることです。貴女自身さへ實は不滿なイコジを白暴に張り通

さうとなされることです。しかしそんなことは凡て私の爲め、又如何なる他人の爲めでもありません。貴女自身の爲めです。も一遍貴女に繰り返へして云います。運命によつて與へられたる人と運命を一にすることは賴ることではありません。又自己を沒することでもありません。より高い、より深い生活に入ることです。自己を自己以上、人力以上の時間と空間との中に解放することです。兎に角吾々は未だ若い。何も爲てはゐない。何も經て來てはゐない。凡てが此れからにある。貴女の生命が僅か二十代の初期で永久に完結するものなら、今貴女が抱いて居られるやうな人生觀も至當かも知れない。しかし永く多望な未來に待たれてゐる吾々は、中々今迄の經驗とも云へないやうな貧弱なそれから得た空虛な見すぼらしい概念と成心との中に閉じ籠つて、安閑と治まつてなんぞゐられた譯ぢやありません。之から吾々は本當に自分の人生を創造して、それを眞に世界的な光輝あるものに持ち來たす最も困難な、併し最も樂みな使命を擔つてゐるのだ。貴女の豪華なる欲望をも一遍奮いお起たせなさい。「意志あれば道あり。」だ。貴女は實に女として優秀な天賦を稟けて

ゐて、如何なる高い運命にも昇り得る資格を先天的に備えてゐ乍ら、而も惡夢のやうな過去の爲めに祟られて今では無意識と意識との間に於て確かに闇に面してゐる。闇は一度眼の眩むだ者には決して闇らしい顏をしてはゐない。寧ろ華かな、幸福なものに見へる。が、私は私の「ベダ！ハーフ「より善き片破れ」である貴女を恐ろしい闇の淵に臨ましめたなりに置き去りにして自分一人勝手にどんぐ先へ進むで行くに迚も〳〵忍びません。如何にそれが貴女には迷惑であらうとも、私にとつては世に二個とない貴女の迷行を見逃すに堪えません。貴女の希望ある未來の前に、幸福の前に、貴女の誤つた小さな過去の惡夢の故に怖れおのゝくのは何よりも先づ餘りに愚だ。活きるとはつまり貴女の好きな「變化」だ。だが「變化」も「發展」の義でなければならない。發展するには何事をも囚はれた殼を透して見てゐては駄目だ。又それを脫ぎ捨てる賢い勇氣がなくては駄目だ。斷えず堅固な意志を以て希望の火を盛り立てゝゐなくては駄目だ。運命の意志の前に從順でなくては駄目だ。それ故に又與へられたる運命の門前に狐疑してゐては駄目だ。噫、吾々の運命は何處にあるだらう。私が

それを一つだと見ることは間違つてゐるだらうか。それも要するに單なる惡夢の迷いに過ぎないのだらうか。

が、よしそれが迷いであつたにせよ、私はそれを信ぜずにはゐられない。又其迷いは恐ろしく苦しいものであるに拘はらず、私はそれに愛惜しきつてゐる。そして私の中に其愛惜の一滴たりともが殘つてゐる間、私は何時迄たつても所詮貴女を思いきることは出來ません。恐らくそれは私の生涯の終り迄續いて、斷えず私を惱ます重荷となるでしやう。

一體人の一番懷しい美點と云ふものは、一種何とも云ふに云へない慕はしさに存する。其人の最も魅力ある特殊のよさを人は形容することが出來ないものだ。其何とも云ふに云はれぬ最後の、そして其人以外の何處にも求めることの出來ない魅力が、其人の中のあらゆる他の缺點や、己れとの不快なる隔りを埋めて、矢張り何處かの隙を窺つて其人との和解を強ゐるものだ。さう云ふ譬へやうのない懷しい魅力で貴女は一分の隙間なく充滿しきつてゐる。私がいくらじたばたやつても容易に貴女に惹きつけられ、又私が折々高慢な理

性からその引力の鎖を斷ち切らうと一寸努めて見ても、到底それを斷ち切り得ないことに無理はない。而もさう云ふ私にとつて殆んど玉の緒であるやうな貴女が、私には又事實最も危險なエーダルクライシスに臨んで居られるやうに見へ、そして若し貴女が今其處から救はれることがなかつたならば、貴女は永久に無殘な沒落を免れ得ないと思へるのです。兎に角もう一遍も二遍も落付いてよく貴女の運命、又將來を熟考なされることを切願します。人は安りに自己を實價以上に買い被る權利を持つてゐないと同樣に、不當に自己を卑下し、見限る權利をも與へられてゐません。何よりもいけないことは無精な負け惜しみから輕々しく自己を拋つことです。何よりも惜越なる痴愚は淺薄なる弱者の厭世主義です。私にとつて貴女に希望、力、幸福、最後の歡びを與へることは自分の最も光榮ある使命の一に思はれます。そして私は萬一貴女が私を愛して下さつたならば、貴女が永遠に若々しく、美しく、力强く、又幸福であり得る丈けの眼に見へないエネルギーを、感謝と、絶大の愛とを以て又永遠に貴女の聖壇に捧げて行くことが出來ることを疑いません。

色々な厚かましい獨り定めの理屈を長たらしく捏ねました。嘸ぞお讀み厭きなされたでしやう。私も大分疲れました。ですが之れは全く輕卒な問題ではありません。篤とお考え下さい。――」

かう書き畢つて最後の名前の傍に「孔雀が鷲の仕事を爲し得なかつた處で恥にはならない。又鷲に孔雀の眞似が出來ないと云つて別に恥辱ではない。が何方よりもいゝことは孔雀の美と鷲の力とが一致することだ。」と云ふやうな文句を書き添へて出した。

手紙を出した後で自分は暫く肯定的な氣分になつたが、夜に入つて不安が又嵩じて來ると、手紙を出すと云ふことは今となつてはもう其内容如何に拘はらず、愈々事の破滅を急ぐより外役立たない。寧ろ出さずになつて遠慮深い敗者の沈默に同情を仰ぐに如かないと云ふやうな氣もした。と同時にそんな卑劣な手段を思ふやうに迄なつた自分を卑しみもした。そしてもうゐても立つてもゐられないやうに只管Sが慕はしくなつて來て、深夜の今からでも彼女の許に飛んで行つて、其膝に思いきり抱き付き度く思つた。

間斷ない恐怖と、不安と、重苦しい絶望とが燒きつくやうな愛情の焰に煮られて一日一日たつた。

二十五日の午後散歩から歸つて「誰かゝら電話がかゝつたか。」と一人の女中に尋ねると、誰からもかからないと云ふので一先づ安心した。此日自分は彼女を訪ねることにしてゐたが、若し都合が惡ければ電話で斷るとSは此前に云つてゐたからである。處が自分が二階の書齋に上つて本を讀んでゐると、も一人の女中がやつて來て「先程元山樣と仰有る方からお電話がかゝりました。」と云つて、自分が留守なので切つておいたと云ふ旨を告げ知らされた。「ハッ。」と自分は思ふと同時に、激しい慟悸に胸が鳴り始めた。自分は取り不敢怖る〳〵電話をSの家に取次いで呉れる近所の鷄肉屋にかけて「せき」を呼び出した。そしてSの都合が惡いので又今度來て呉れと云ふ斷りを聞いた。自分が呆然として電話口に立つた儘、今度とは何時のことかと尋ねることに氣付かぬ間に電話は切れた。自分はそれなり

ガーンと鳴り響く甚しい失望の頭を抱へて二階の室に戻り、グッと椅子に凭れたなり彼女の冷酷な排斥を思い乍ら取り止めもない苛立しい不安に打ち沈んだ。

「成り立つ戀の場合に於て情熱は恐らく一層二人の間を緊密に結ぶ紐になるであらうが、呪はれたる戀の場合に於て一方の情熱は畢竟只二人の間の溪を一層幅廣くする禍の焔にしかならない。自分が彼女の運命に衷心から深く同情を寄せ、彼女を熱烈に戀すれば戀する程、Sは自分を嫌い遠ける。而も運命はそれが爲めに意地悪くも猶ほ一層自分を彼女への愛に焚きつけやうとするのだ。」

と、自分は堪らなく胸苦しい思でくしゃ〳〵したが、やがて又意氣消沈し、ガクンと氣が挫けて、日記さへ書く力が失せて了つたやうに感じた。

二十六日の朝自分は又Sに手紙を書いて彼女の自分に對する遠慮のない心持を訊ね、又哀願するものゝやうに彼女の同情を強請んだ。貴女は今迄親切にも私に對して幸棒強かつた。しかし今となつて貴女はもう漸く私に厭き果て、そして露骨に私を遠ざけ始めた。だ

がそれは全く本當なのでしやうか。あゝ私はそれが單に私の毎もの取り越し苦勞であると
を此上なく望みます。私は迚も〳〵貴女との間に繫がれてゐる鐵鎖——それを撲ち切らう
と敲くとは結局それを一層太く堅固にして了ふ丈けの話だ——の鐘のやうな高い響に堪え
ることが出來ない。私はその體中に鳴り響く物狂ほしい音を聞くと失神しさうに蹣跚めいて
了ふ。私は益々貴女に對する自分の力の衰弱を感じる。私はほんとに貴女なしでは誰よりも
かも弱蟲だ。什うか會はして下さい。私は斷じてもう貴女に御迷惑をかけるやうなことは
しませんから。何卒。」と云ふやうなことをその中に書いた。

「夕方公園を散歩してゐる間にふと恁んなことに氣が付いた。自分は躍り上つて喜んだ。
暗い自分の胸の中に俄かに明るい希望の光がさした。Sは以前に若し彼女が自分を戀せず
ともよければ自分と結婚する。しかしそんな結婚で自分は滿足出來ないであらうし、又滿
足出來るやうであつてはならぬ筈だ。何故ならばそれは不幸な家庭に定まつてゐるのだか
ら。と云ふやうなことを云つた。其心は素より自分と結婚し度くないと云ふ丈けの口實に

過ぎないことは分つてゐる。しかしものは試めしだ。自分は今度自分を戀せずともいゝ、又其爲めの輕蔑をも甘んじるから兎に角是非共自分と結婚して呉れと申し込んで見やう。そんなことをしたつて大抵駄目なことは分つてゐるが、今の自分にはもうそれより外に道はない。自分は彼女の戀を求め、又尊敬をも望むが、元と〳〵自分の戀の目的は彼女の戀よりも、況んや尊敬よりも、何よりもS其物を獲ることにあるのだ。自分の方でSを兎に角我妻として戀してゐれば、縱令彼女から嫌はれやうが、侮られやうが、自分はそれでも充分幸福だ。それにSとても自分に現在ある丈けの德は認め度くなくとも認めない譯には行くまい。又自分と一緒にゐる間には彼女も何時かしら自分を愛するやうにならないとも限らない。兎に角此要求は是非今度逢つた時提出して見ずには措かない。尤もそれはもう自分にとつてどんづまりの要求であり、最後の希望であるから、それ丈けそれが素氣なくはねつけられた時の場合を考えると愈々恐ろしい。それこそもう絶對的な破滅なのだから。實に恐ろしい。又一方から云ふと馬鹿らしい考にも思へる。併しSとても嘘を吐くことは

嫌がるだらう。かうなるとSの道德心が賴みの綱となつて來ると共に、それが何となく危ふなつかしく、輕薄なものに思へてならない。」

自分は勇んでかう日記に書いた。そして自分を嘲笑い乍ら、何でもかんでも彼女を獲やう。限りない侮蔑の石にかぶりついても彼女を獲ずにはゐられないと胸をぞく〳〵躍らせて小供のやうに意氣組んだ。

二十

或る朝恁んなことを考えた。

「神を畏れることは智慧の始めだと云ふ。然らば人を畏れる心は軈て戀の始めだとは云へないだらうか。少くとも此事は確かに云へると思ふ。何者をも畏れることの無い、單なるイゴイストには戀は出來ない。否、實は何物をも解らないと云ふことは。」

自分は肉慾の發作に襲はれる毎に「こんなものが俺の中にあり、そして俺がそれを呪い乍ら矢張りそれに煩はされてゐるから、俺はあのSの心を奪ふ資格がないのだ。」かう思ふのであつた。そして自分の戀其物の本質を疑ひ憂へた。が、此頃になつてはもう最初の頃自分の中に蟠つて、兎角良心をチク〳〵と刺してゐた過去の懺悔と云ふやうなことは妙に不必要な問題として餘り氣懸かりにはならなくなつてゐた。で、自分は何れ何時か云ふ時があらう位に思つてゐたが、それには自分が一方彼女を勝手に高い聖壇に祀り上げておき乍ら、時としては彼女の冷遇に苛立つの餘り、自分許りを不徳な罪人扱いにすることにも、すれば强腹にもなる爲であつた。

二十七日になつた。二三日前からもう全く冬だ。庭には霜柱が立ち、吐く息は白く煙る。木は大方裸になつて散歩するにはちと寒過ぎる。こんな景を見るにつれてもSと共にならば氷の上でも素足で何處迄でも歩くだらうに抔と自分は思つたりする。

「戀は一點でかち合ふ爲めに二線の先が互に傾くか、或は一線が傾いて他の線がじつとしてゐるかでなくてはならぬのに、吾々二人と來ては餘りに並行線だ。自分はSの方へ〳〵と頭を振つて行くから吾々は永久に外へ向つて一層離れることはあるまい。が、自分が彼女の方へ傾けば、それ丈けの同じ角度で彼女も矢張り其方向へ傾くから、いくらぐる〳〵一つ處を逆立ちして廻轉しても吾々は常に互に交ることなき二つの並行線である。」と云ふ思い付きから、二つの線の會話で成り立つ短いストーリーを作つて見たりする。

寢不足で始終頭の加減が悪く、本も碌に讀めず、只くしや〳〵して日を暮す。Sに手紙を書く。Sから電話がかゝつた。明晩は都合が悪いから、明後日の晩にでも來て呉れ。其節又電話をかけると云ふのである。又ムカツ腹が立つた。併し仕方がないので、明後日の晩は友達と音樂會に行く約束になつてゐるが、君に會へると云ふなら無論其方へ行くことは見合はせる。自分にとつて君の爲めに他事を抛つこと程容易なことはないと云ふ旨の返事を書いたが、自分は少し低級な野心からそれ丈けの文句では濟まされず、一寸した——極めて簡單ではあるが——作り話をそれに書き加へた。その筋は、ある寂つそりとした暗

い廣間の中で、ある女が一人音樂を奏してゐる。室の隅でこつそりそれに耳を傾けてゐた自分は、其音樂を恰かも理想的なものゝやうに思い、それを彈いてゐる美しい彼女を一途に戀する。そして矢庭に彼女に近づいて行つてそつと彼女に並んで合奏をしやうとする。すると彼女は一曲から一曲に逃れて行つて、什うしても自分とは合はせやうとしない。如何に自分が輕妙に彼女の譜を後から〳〵と追つて行つても、畢竟二人は徒らに聞き苦しい騷音を出すのみである。其不調和な騷音は自分が一心不亂になつて彈けば彈く程高くなり、遂には流石の廣い室の中が宛ら鐵工場のやうにガン〳〵と響き渡つて、迚も聽いてはゐられない程騷々しくなる。で、自分も次第に堪らなく不快になり、苛立ち、且つ氣が遠くなる程惱むで來る。それにも拘はらず自分は彼女が其樂器から起ち退いて、自分を一人後に置き去りにして行つて了ふことを心から怖れてゐる。此不快なる騷音も、自分丈けの寂しい哀れな獨奏に比べれば、遙かに自分にとつては美しく、賴もしく、又樂しいのである。其故に自分が彼女の傍に座してゐることを彼女から許されてゐる間、自分は此惱ましい騷

音を以て怖る〳〵滿足しなければならなかつたと云ふのである。

處で此晩も自分は姉から切符を貰つたので、又も帝劇で催される演奏會に行くことになつた。一體音樂は好きでも音樂會の空氣を餘り好かない自分は、殊に此晩は何處とかの宮さんの臨席があるとか云ふので、禮服を着けて行く必要がある抔と云ふ面倒から、如何に自家に止まつて毎ものやうに一人もの寂しく惱むのが厭であるとは云へ、餘程行くことを躊躇した。それに松子と其妹とが母親が病氣である爲めに二人きりで演奏會に行くことになつてゐたのを、恰度午後から自分の家に切符を持つて來てゐた自分の總領の姉が世間體が惡いと云つて反對した。その非難の仕方と動機とに自分はカナリ腹を立てたりしたので、一層此姉等と共に帝劇へ行くことが可厭になつた。其中にSが電話をかけた。其時恰度自分は戸外へ出て留守であつたが、後で電話のことを聞いて、彼女は恐らく自家にゐるだらう。何故今朝の電話の時今夜彼女の在不在を尋ねなかつたらう抔と思つた。此前Sは今日の音樂會には行き相もないことを云つてゐた。自分は無暗と彼女に會はずにはゐられなく

なつた。之から音樂會行を止めてSの家に行かう。それに限る。Sは唐突の訪問に又氣を惡くするかも知れぬ。或は又誰か來てゐないとも、留守だとも限らない。しかしもう居ても立つてもゐられない。彼女に電話を掛けるにしても餘り近からぬ道を態々呼びに行つたりすることが臆刼である上に、自家の電話機のある室には女中なんぞがゐるしするので、何の道もう所詮自家にジッと落付いてはゐられないクサ〳〵した氣分から兎に角彼女を訪ねて見ることにして、母が姉の手前を憚つて何とかかとか云ふのも碌に聞かず、自家を飛び出した。「今夜は頭は惡いが勇氣はある。是非一つあの話を持ち出して見てやらう。」こんなことを自分は道々思つてゐた。

彼女は留守であつた。女中の「せき」は「たつた今お出掛けになりました。其處いらでお逢いになりはしませんでしたか。」と云つた。併し「せき」は彼女の行き先を知らなかつた。「畜生。」と自分は思つた。自分の胸は爆發し相になつた。併し仕方がないので小面憎く〳〵見える頓狂な顏の「せき」に三錢の切手を張つた儘の手紙を手渡して再び表へ出た。

自分は俯向きになつて、堪らなくいら〳〵した、併し打ち沈んだ心持で、足許ばかり見乍ら歩いた。誰と擦れ違つても氣は付かない。併しSは自分と來る途中で擦れ違つてそれと氣付いてゐ乍ら、態と素知らぬ體でそつと通り過ぎたのではなかつたらうか抔と自分は思つた。そして愈々業を煮やした。

電車の停留場迄ボッ〳〵來て、これから什うしやうかと思案してゐる矢先き、自分は折よくも懷中に先前の切符を携へて來てゐることを發覺した。で、自分は最早時刻も遲れてゐるし、餘り勸まぬ乍ら此儘自家へすぐ〳〵歸るよりはと其處から直ぐ樣電車で帝劇へ廻つた。例になく自動車や馬車がギッシリと横平な顏して詰めてゐる間を拔け、給仕に案内されて綺羅びやかな席へ通ると、隣りには自分の姉、其夫、娘、夫の弟達がずらりと並んで、恰度今始つた許りの演奏に靜肅な耳を傾けてゐた。松子等は來てゐなかつた。

「これは堪らない處へ來て了つた。」と始めから自分は眉を顰めた。自分は美しく思ふよりは先づ胸を惡くし、蔑むよりは先づ不快を感ずる盛裝の貴婦人等や、低能の男達を、自づ

と義兄の兄弟達や、其周圍の同類の中に數知れず認めざるを得なかつたからである。さう云ふ愚な周圍には全く無頓着にして、只音樂だけを氣持よく聽いて歸ると云ふやうな離れ業の出來惡くい性分の若い自分は、殊に此時の落付かぬ氣分として、プログラムの紙で口を隱し乍ら囁くやうな話し振りをしたりする、かう云ふ對手にもならぬ所謂社會の代表者の高慢な頭數から、矢張りある不快な壓迫を莫迦らしい程感じた。かうなると自分にはもうこんな凡そ音樂には緣遠い劣等な聽衆を對手にして、如何にそれが金になるからとは云へ、虛心平氣で悠々と歌つたり彈いたりしてゐられる演奏家迄が又恐ろしく無神經な、馬鹿なものに思へて來た。で、音樂は恁んなにして演ずべきものでもなければ、又聽くべきものでもない抔と思ひ乍ら自分はもう何と云ふことなしに甚しく不快に惱むで來た。そして曲目が三つ許り濟んだ幕間に自分は姉にも誰にも告げず、つと席を起つて其儘歸らうとして廊下へ出た。するとSに逢つた。自分は飛び上り相になつた程驚いた。

自分の見知つてゐるTと云ふ男と立ち談しをしてゐたSは自分を認めた時サッと顏を赭

らめたが、彼女の傲慢を恐れて自分が輕く、併し非常な力を籠めて挨拶した時、彼女も淡い微笑を口許に漾はし乍ら相當な會釋を自分にし返へした。自分はそれに滿足して彼女に近寄らうとすると、直ぐその後ろの人込みの中からH夫婦とBとが現はれた。HとBとは早速自分を認めた。彼女との僅か一歩か二歩の距離を横切ることが既に宛ら急流に逆らつて歩むことのやうに甚しい努力に感ぜられてゐた自分は、此時ピタと立ち止まつた儘、ある遽しい不快と敵愾心とを以て、皮肉な眼でじつと自分を見据へてゐる此二人と顏を向き合はせた。自分はカッカと逆上せ乍ら彼等の冷膽な苦笑を見、それに對して自分が精一杯反抗の蔑視を投げ返へしてゐることを感じた。吾々は猶ほ二三秒時の間其儘の姿勢でガヤ〳〵した雜沓の中に挨拶を交はすでもなく對立してゐた。ふと自分は「何故皆に挨拶しないのか。」と云ふSの眼光を傍に感じた。で、自分は怒つてSを睨み返へした。彼女は水色の衣裳を着てゐた。

其時誰かしら後ろから自分の背中を敲くものがあつた。振り向くとそれは林であつた。

自分は俄かに味方を得たかのやうに喜んだ。そして少し雑沓を離れた廊下の隅に寄つて、其幕間の終る迄彼と立ち談しをした。が、其間にSと其仲間とは人込みに交つて何處ともなく影を隱して了つた。自分はジレ氣味になつて表へ出た。

「あの人は俺を見た時赤面をした。」冬枯の公園を拔げ乍らかう自分は思つた。

「だが赤面も色々の動機で出來るものだからそれを見て突然喜ぶのは大間違だ。が、それは兎も角、什う云ふものかあの赤面は俺にはカナリ嬉しかつた。」

と自分は此晩思いがけなくもSに逢へたことを喜ぶと同時に愈々彼女の周圍、及びそれに對する彼女の愛着的な態度を忌むだ。そして是非何か書かずにはゐられないと興奮しきつて自家に歸つて來たが、書くことには矢張り成功しなかつた。

カナリひどい憎人的な氣分が概して此頃の自分を支配してゐた。朝起きたてとか、晝食の直ぐ後には什うかすると恰度春さきの睡眠から覺めた許りの恍惚とした精神狀態でも云つたやうに、ぽうつと明るく霞んだ、平靜な、そして愛を感じ易い氣分に浸ることもあつたが、其以外の時間と云つては大抵ぷり〳〵した、怒りつぽい、極端に周圍を避け度がる心地にゐた。殊に日暮方には自分はもう殆んど規則的に破壞的な、征服的な氣嫌になつてゐるのであつた。「Sのみを除いては何人からも愛は要らない。又求めない。愛はそれによつて生きる女の望みだ。男は只尊敬と服從とのみを欲する。俺は其等を以て滿足する。」こんな氣になつてゐた。さうかと思ふと自分は又俄かに濕つぽい哀れを感じることもあつた。

「自分は自己の爲めに泣く時には其泣く自分が情けなくなるので、涙はやがて兇暴な忿怒に轉ずる。オメ〳〵と涙流す自分の慘めさを其儘に許しては措けなくなるのだ。併し他人の運命の爲めに泣く時には腹は立たない。そして其代りに自己に責任を感ずることによつて敢爲な力を内を見出す。結局何れの涙にせよ、勇氣の奮發に歸着することは同じだ。」

二十九日の日記にかう書いた。少し宛有益な讀書をする。翌日の夕方又Sに手紙を書い

た。

「日曜の夕」

貴女は私を全き沈默の裡に葬らうと決心しましたね。貴女は別に決心したと云ふ程お前に拘泥はしてゐないと云はれるでしやうが。併し私はそんなことが何の道私にとつては何にもならないと云ふことを云つておきます。貴女が何れ程沈默を守らうが、無頓着にされやうが、私は物を言ふ口、書く手、憂慮する腦髓、苦悶する心臓を持つてゐる。貴女は私を忘れることが――恐らく――出來るでしやう。が、貴女の如何なる忘却も無論私の貴女に對する無關心を促す力にはなり得ない。戀が方程式と違い、又賣買と異なることを理屈の上では承認してゐる私も、感情の上では什うしたつて二つの心の平均を欲せずにはゐられない。が、不公平は何れ自然界の附きものだ。月は如何にそれを煩はしがらうとも所詮日に其面を照らされざるを得ず、太陽は又何等の報酬なしにも永遠に月の姿を照らさねばならない。日が強いて報酬を求めるならば、彼はそれを萬物を照らす自己の使命の中に求

めるより外ない。それが彼等の運命だ。が、彼等の寂しさの上には什うしたつて絶對的不平均がある。永劫に全力を盡して萬物を照らしても、嘗て照らされることのない偉大なる太陽の運命こそは寂しいものに違いない。

吾々の戀、少くとも私の戀は大海の一粟よりも小さく、又譬へむ方なく慘めにも果敢ない一動物の戀だ。しかしそれとても矢張り絶大無量な運命の意志に由る憐れな盲動には相違ない。譬へば荒磯の巖壁に衝き當つて、其自身に碎け散る爲めに、何遍とも限りなく懲りず打ち寄せて行く狂瀾のやうに、戀も要するに一つの意志だ。自然力の現はれだ。が、碎ける波と、碎く巖と果して何方が幸福か、それは絶對的には分らぬかも知れない。

私は何故恁んな少し諦めに近いやうな理屈を、斷えず彌が上にも私から遠ざからうとして居られる貴女に向つて敢へて云ふだらう。併し私は未だ決して諦めてはゐない。未だではない。恐らく一生諦めることは私の力にあるまい。私は濫りに「此れが俺の運命だ。俺の運命はもう此れより以上を俺に許してはゐない。だから俺は此れで滿足しなければ

ならぬ。」と云ふことを口にする簡單な借越を嫌ふ。何事にかけても凡そ諦めの悪い私は――殊に貴女との關係に於て――そんなことをかりそめにも思つてはゐられない。だが私は一つには貴女に私の日々の感想を、又私が實際の感情に絶えず苦しむ一方に自然考えると云ふ本能を眠らしてはゐないことを認めて貰い度い爲めに、こんなことを書きもするのです。それに何か貴女に書いてゐさへすれば私はいくらか氣が落ち付くのですから。

扨て私は又來る火曜（十二月二日）の午後七時半頃貴女を訪問させて頂き度いのです。尤も月曜でも宜しければそれに超したことはありません。ほんとに永い〳〵間私は貴女のお目にかゝらなかつた氣がします。世にも戀しい〳〵貴女に。」かう書いて、終りの餘白の處に小さな字で

「貴女には私から戀と云ふ辭を聞くことさへもう實に堪らなくお厭でしやう？　お察しします。自分の愛し得ない者からひつつこく戀い慕はれると云ふことは餘り有り難いことでもなからうかと思います。ですから私もなるべく加減して戀と云ふ字を使はないやうに努めてはゐる心算ですが、什うも吾々の間で、少くも私の方から戀と云ふ言葉を全然拔きにして貴女と對話しやうと云ふのは少し無理なのです。――」

と書き入れて封じた。寒い風の吹く晩、遲く彼女への手紙を出しに郵便筒へ行く心持は一種妙なものであつた。かくして此秋も終ることになつた。

二十一

自分は什うかするとSとは一生こんな關係ずる〳〵に終ることにはなるまいかと案ずることもあつた。自分は後に引き返へすことは出來ない。が、さうかと云つてうつかり先へ進むことは又取り返へしのつかぬ破滅が思はれて恐ろしい。しかし一方物事に片を付けずには什うしても濟まされない自分の性質が氣遣はれもする。實際片付け度くはある。時にはもう破滅でも何でもいゝ。兎に角什うにか早く片が付いて了はなければ、かう何時迄も

望みのない一つ事にぐず〳〵引つかゝつてゐてはやりきれないと焦立つこともある。が、何と云つても矢張りSは捨てられない。自分の性急な堰の門はもう今にも水で破れさうに危くなつてゐ乍ら、それでゐて中々破れない。一旦破れた日にはSをも戀をも押し流して了はうが、それと同時に永久に自分の心の中心、平安をも押し流して行つて了いさうな氣がするので、自分が敢へて破らうともしないのだ。處で自分には其堰の門を何時迄も持ちこたへて行くことが出來るか什うか、それを敢へて自分が破らずとも、Sの方に果してそれを破る力が全然ないか什うか、其邊はよく分らない。

十二月二日。雨上りでぽか〳〵した恰度三月頃の日和である。水蒸氣の立つてゐる濕つぽい地面の上には未だ青い若草がまばらに殘つてゐて散歩抔に氣持よささうだ。元來野外の空氣と最も美く調和するSと共に散歩することの愉快を空想する。自分が彼女を見る時は殆んど毎も夜で、彼女は常に狹い室内の椅子の上に、殊に彼女には最も相應はしからぬ不活潑な姿勢に於て、懶る相にじつと蹲つてばかりゐる。自分は潑溂たる光線の漲る野外

の中に恰かも豹のやうに活動してゐるSを見度く思つた。

今晩こそは久し振りでSに會へるだらう。兎も角も彼女に會へさへすれば室の中でも何でも自分はカナリ滿足だ。もう今となつて自分には室内だの、戸外だのと暢氣な要求を彼女に抱いてゐられる餘裕はない。で、此日自分は彼女に會へる毎ものやうに朝から何となくそは〳〵した樂みと不安とで落付かなかつた。

午後前田の處へ行つて此月の雜誌を取け取つて歸つて來ると、留守中にSから電話で（彼女は自分に電話をかける時、何時も無論「せき」にのみかけさせて、自身では出ない。）「今夜は不在だから明晩來て呉れ。」とのことであつた。「何だ又か。畜生！」と云ふ氣になつて自分は無暗に腹が立ち、そしていら〳〵し乍らヒドク落膽した。

「眞個く蛙の面に水だ。Sは自分がいくら骨を折つて心血を注いだ告白の手紙を書いてやつても全で風馬牛に受け流してしやあ〳〵としてゐる。全で張合がない。手答へがない。問題になる處迄自分が突つ込んで來たなら問題にしてやらうと云ふのではなくて、頭から

問題にしまい、てんで對手にしないと云ふ態度なのだから始末に畢へない。自分にとつては何よりも一番惡い、最も絶望的な態度だ。此樣子では縱令自分が聖書のやうに偉い戀文を書けたにした處で、それが彼女に惹き起こす結果は同じに相違ないと思へる。自分が未だ實に偉くないこと、恐ろしく力の足りないことはいくらも認めるが、それにした處で此れは什うも人格の問題とは別だ。自分にとつてSは殆んど人格以上の權力を持つてゐる對手なのだから什うにも自分の手にはおへない。

自分はむしやくしやした。彼女に對する火のやうな愛情や、執着と、性急な創作熱とが自分の小さな胸の中に混亂して痛く自分を惱ました。が、「明晩は來てもいゝ。」と云ふ彼女の許し丈けが未だしもの慰めであつた。

翌三日の夕方、自分は今夜も又Sは電話で斷つて來相な氣が頻りにするので他所から電話がかゝる度にビク〳〵した。併し五時になつてもSからはかゝつて來なかつた。それでも未だ自分が自家を出る迄に二時間と云ふ危い時間が狹つてゐるので、其間に又斷つて來

ることを思ふと自分はもう恐ろしさの餘り迚も此儘じつと落付いてはゐられなくなつて、とう〳〵自家を飛び出した。自分は自由な表へ出てホッと一息吐いたが、それから何と云ふとなしに青山の方へボッ、、歩いた。そしてある洋食屋の二階に上つて隅の方で一人ゆつくり食事をしながら、「此處ならもう電話の追擊に襲はれる心配はない。今夜は多分久し振りにあの戀しいSに會へるだらう。」扨と思つて安心した。それから自分は寂しい墓地の間を拔けて、霞町の方へ廻り、時間を取る爲めに態と遠廻りをし乍らSの家に行つた。時間は未だ少し早過ぎたが、門に入る前からもう自分は「あゝ居るな。」と思つた。Sは机に凭つて何か手紙のやうなものを認めてゐたが、其姿を上口から見た時、自分は飛び立つ程喜んだ。しかしにこ〳〵し乍らもイヤに落付いて上に通つた。

恰度手紙を書き畢えた彼女は自分に日本の字でその上は書きをして呉れと賴んだ。

「私の處へは端書一つ出せない程忙しい貴女が私に他の人への手紙の上は書きを賴むのか。」

こんなことを自分は微笑みながら云ふと

「いゝえそんな譯ぢやないんですよ。でも用便だから仕方がないの。」と彼女も微笑んで自分にペンを渡した。自分は男か女かと訊ねた。「女よ。」と彼女は笑つて答へた。

手紙は英國大使館當てのある夫人への書簡であつた。自分が下手な字で書き畢ると「どうも有り難ふ。」とSは云つてそれを「せき」に手渡した。

今宵Sは例もの桃色の着物を着てゐたが、實に美しかつた。顔にはそれが自然の色と思はるゝ程度で薄く白粉を塗つて、口笛なんぞを吹きながら何時になく快活にしてゐた。で、自分のおど〳〵した心迄が彼女の快活に歩調を合はして何となく浮き立つて來た。

「どうも此人は耐らなくいゝ。益々よくなつて來る。それにあのふつきりの長い目眦の處に云ふに云はれぬ特別な甘味がある。俺は此人が粉飾を施してゐない時の顔にすつかり魅入らされたが、かうして白粉を塗つた顔を見ると、又それが無上に美しく淨らかなものに見へる。それを以て見ても戀愛が凡ての感嘆の源だと云ふことが分る。何のことはない。

戀の眼を以て見れば何もかも好くなつて了ふのだ。

恁んなことを自分は心に思つたが、やがてふとそんなことを今頃考えてなんぞゐられない現在の切迫した立場に思い及ぶとつい「あゝあゝ。」と云ふ永い嘆息を洩らしたなりドシンと深く椅子に腰を卸した。

「何があゝあゝなの？」とSは笑い乍ら訊ねた。

「何がつてあゝあゝは矢張りあゝあゝさ。それより外に云ひ樣がないぢやありませんか。」自分も少し笑つて云つた。

「なあぜ？」

「そんなら何かあゝあゝなんて云ふ必要のないやうないゝことを云つて聞かせて呉れ給へ。何かあるかしら。」

かう云ふと同時に自分は一方「此人は元來餘程桃色が好きと見へるな。」抔と、机の上の小さな人形に着せてある桃色の着物や、蔓で編んだ紙屑籠に編み通してある桃色のリボン

や、電燈の蓋に被ぶせてある桃色の巾を見廻はし乍ら思つたりした。
「どうですか。」と彼女は氣のなさ相な返辭をした。
「まあい丶。兎に角僕の留守宅へ電話はかけなかつたでしやうね。」
「え丶。何故？」
自分は度々の惡い電話が怖さに夕方から自家を逃げ出して來た旨を笑談半分に語つた。
Sは「まあさうお？」と云つて笑つた。
二人はそれから一寸音樂の話をした。するとそれからTと云ふ音樂好きの男の話に移つた。此Tと云ふ男は自分も知つてゐる同窓の先輩で、以前に秦野と云ふ人の處でSと知り合いになつたのであるが、先月の初め自分達の仲間が主催で催した音樂會の時や、つい此間帝劇での演奏會の折りに彼女の處に來て少時くではあるが慣れしく會話をしてゐたのを自分は見たことがあり、又ある友の口から自分は此男が嘗て其頃イギリスにゐたSの處に、彼女の弟の用に託して手紙を送つたことがあるのを耳にしたことがあつた。それに什う云

ふものか其友は此男と割りに親しくしてゐた爲めに其手紙の中の「私は始終貴女のことを思つてゐます。」抔と云ふ文句迄を記憶してゐて、それを別に惡氣もなく自分に告げた。自分は此Tが今は細君のある身でもあるし、又Sと其程親しく交際してゐる譯でもないことを知つてゐたので、始めから餘り念頭にはおいてゐなかつたのである。
併し自分はSがTに對して、二度も自分に宥さないやうな慣れ〳〵しい態度で談しかけてゐる樣を目のあたりに見、又TがSに抱いてゐた只ならぬ厚意を思つたりすると、此事をさも大したことらしく云い出して見ることは、此れから自分が提出しやうとしてゐる主要な問題の前に臆してゐる此時の自分にとつてい丶手間取りであつたのである。
「へえ、Tが妾に氣があつたんですつて？妾ちつとも知らなかつてよ。」とSは物珍らし氣に云つて笑つた。
「當り前さ。」と自分は答へるより仕方がなかつた。そして陽電氣が陰電氣に近附く時は何れ放電することは避けられないものだ。殊に未婚の若い男が、矢張り未婚の美しい女に積

極的に觸れ乍ら戀の氣が少しも起らないと云ふこと程有り得ないことはない。だからうつかり男に好意を見せるのは止めた方がいゝ。什うせ夫婦になる心算がない位なら其程殘酷なことはないんだから。と云ふやうなことを鹿爪らしく饒舌つた。

「だつて好きになつたものなら仕方がないぢやありませんか。」と彼女は云つた。

「好きになつてもラヴが成り立たないと思へたなら、いつそ嫌つてゐるやうに見せかけてやつた方が餘つ程先方の爲めには親切なんだ。僕なんぞはこんなに貴女から無關心を見せつけられてゐてさへ、自分一人の戀が充たされない爲めに恐ろしく苦しむでゐるのですからね。それにしても貴女のやうな聰い人にでもそんな男の心を解しないやうな無邪氣な時があつたんだと見へるナ。」自分はギゴチない調子で途切れ〳〵こんなことを饒舌つた。

「今だつて妾は何も解つてやしない。」

話はこんな處迄辿れて了つた。

「どうです。よかつたら明日あたり一緒に何處かへ行つて見る氣はありませんか。」

自分はもういゝ加減に談しを中心に引き戻し度くなつたので、急に恁んなことを云つて見た。

「明日は駄目。併しイギリスに歸る前には兎に角一度歩きましやう。毎度のお約束ですものね。」と彼女は云つた。

「するとそれは確かなのですね。イギリス行きは。」

「え、、確かなの。」

「何時定めたんです。」

「はつきりはつい近頃。」

「日と一緒に？」

「什うですか多分妾一人の心算。」

「そんなことはないさ。だがそれはどうでもいゝ。それで何時行く。」

「大方來春早々。」

「いゝだらう。勝手にお出でなさい。しかし永久に？」
「どうですか。でも兎に角容易には歸つて來ないことになるでしよ。」
「好い良人でも捜しに？」
かう云つた自分は少し露骨過ぎたのでSから怒られはしまいかと氣遣つたのと、自分自身の鬱憤との爲めに顔に血を上ぼせてゐた。併しSは「どうですか。」と輕く笑つて、それなり腕を組み乍ら横を向いた。自分は前にこゞんで火鉢の中を火箸で自暴にかき廻はした。中には小さな火種子が二つ三つしかなかつた。
「寒くつて？」と彼女は眞向から訊ねた。
「うむ。非常に寒い。」と自分は小供らしい嘘を云つた。
彼女は起つて石油のラムプ・ストーヴに火を點けた。暫くする中に元と〳〵決して寒くはなかつた狹い室の中が一しほほてつて來た。自分は何氣なく又亂暴に火鉢の中をかき廻はした。

「未だ寒くつて？」とSは復た實際恐らしく寒くもあり、熱くもある自分の顔を見乍ら眞面目臭つて訊ねた。
「あゝ寒い。」
と自分は微笑んで云つたが、彼女が又起ち上つてラムプの心を一層強く出さうとしたので、慌てゝ「なに嘘だ。嘘だ。もうちつとも寒くはない。却つて熱い位だ。」とそれを止めた。恁んな場合にも巫山戯度がる癖のある自分は其の時心の中に「なに、實は室がいくら熱くなつても氷のやうな君が傍にゐて、其熱を片つ端からどん〳〵吸ひ取つて了ふので寒いと云つたのさ。」抔と思つたりしたが、流石にそんな厭な串戯を口に出しはしなかつた。
彼女は苦笑し乍ら自分の前の座に戻つて膝を重ねた。
「貴女に一つ云ふことがある。」
暫く曖昧な沈默の續いた後で、自分は遂に昂奮から勇氣を驅り立てられてかう眞劍に云ひ出した。